

宮城県文化財調査報告書第 93 集

東北自動車道遺跡調査報告書

VIII

昭和 58 年 3 月

宮城県教育委員会
日本道路公団

序

私達の生活している宮城県内には、先人がのこした数多くの遺跡があります。これらの文化遺産は、豊かな自然環境と長い歴史の中で創造し、育ぐくんできたものであり、これを愛護し、活用するとともに後世に伝えていくことは、現代の私達に課せられた重要な責務であると考えます。

近年、地域開発の事業が進展することに伴ない、埋蔵文化財の保護が一層重要視されてきているのもその線に沿ったものであります。

国土開発幹線自動車道建設法に基づき建設中の東北自動車道が、宮城県内で全線開業したのは、昭和 53 年 12 月でありました。

宮城県教育委員会では、自動車道建設事業に関連した 52 の遺跡を日本道路公団仙台建設局の委託によって、昭和 45 年度から 53 年度までの 9 カ年間に事前の発掘調査を実施するとともに、終了後は引続いて遺物の整理と報告書の刊行に努めてまいりました。

本報告書は、東北自動車道遺跡調査報告書の第 8 冊目として、佐内屋敷遺跡、八谷館跡、御所館跡、駒場館跡の 4 遺跡について、発掘調査の成果をとりまとめたものであります。

本書を刊行するに当たり、調査以来長い期間にわたって御協力をいただきました関係者各位に対し、心から感謝の意を表するとともに、本書が広く社会教育や学術研究の場で役立つことを切に念願するものであります。

昭和 58 年 3 月

宮城県教育委員会

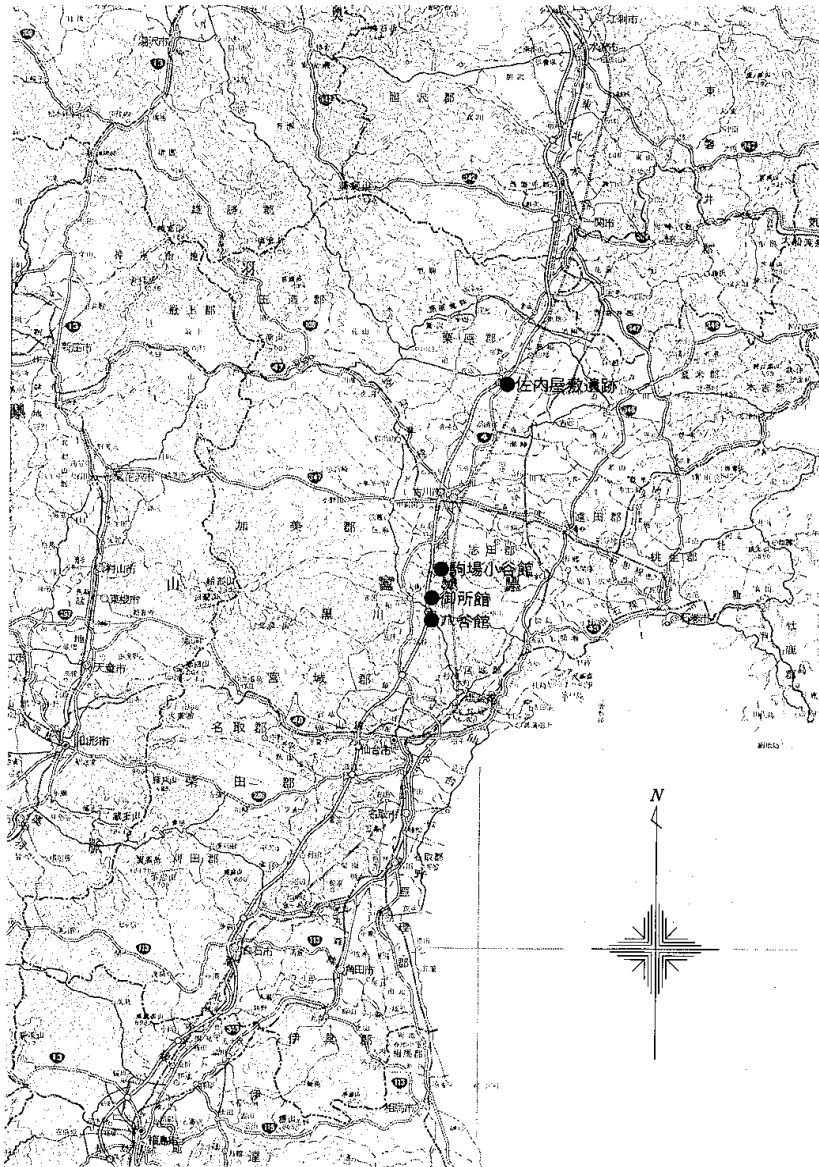
教育長 三浦 徹

目 次

| | |
|-----------|-----|
| 1. 八谷館 | 3 |
| 2. 御所館 | 101 |
| 3. 駒場館 | 223 |
| 4. 佐内屋敷遺跡 | 289 |

例 言

1. 本書は東北自動車道関係遺跡発掘調査報告書第8分冊として、4遺跡について作成したものである。
2. 遺跡の記載は南から順に行なった。
3. 調査の主体は宮城県教育委員会、日本道路公団である。
4. 発掘調査は宮城県教育庁文化財保護課が担当し、関係各市町教育委員会、各学校教職員等の方々と機関に協力をいただいた。
5. 調査および整理に関して次の方々および機関の指導、助言、協力をいただいた。
芹沢長介氏(東北大学文学部教授)、藤沼邦彦氏(東北歴史資料館)、白鳥良一氏(宮城県多賀城跡調査研究所)、東北歴史資料館、多賀城跡調査研究所
6. 各遺跡報文中、土色は「新版標準土色帳」(小山・竹原：1973)を利用した。
7. 国土地理院発行の地形図を複製したものには、図中に図名と縮尺を記した。
8. 整理、報告書の作成は文化財保護課が担当し、各遺跡の整理、執筆は課員の検討を経て、次のとおり分担して行なった。
(1)八谷館、(2)御所館、(3)駒場館、斉藤 吉弘
(4)佐内屋敷遺跡 森 貢喜
9. 各遺跡の内容は、すでにその一部が現地説明会資料・調査略報等によって公表されているが、本書の内容がそれらに優先する。
10. 上記遺跡の出土遺物および、実測図、写真等の諸資料は、東北歴史資料館へ移管し保存・活用をはかることにしている。



東北自動車道関係遺跡位置図

調査に至る経過

東北自動車道の建設に係る遺跡に関しては、「日本道路公団の建設事業等工事施行に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」等にもとづき、宮城県教育委員会が調査にあたった。

自動車道の計画予定路線は、昭和 42 年 5 月に仙台市以南の発表があり、昭和 44 年 6 月から昭和 45 年 11 月までの間に、4 回にわたって仙台市から岩手県境までの路線が発表された。

県教育委員会は、昭和 42 年に東北縦貫自動車道遺跡緊急調査対策委員会を発足させ、路線敷の分布調査を急いだ。その結果確認した遺跡は、仙台市以南で 23 遺跡、以北で 28 遺跡の合計 51 遺跡に達した。

発掘調査は、昭和 45 年 2 月から上記の対策委員会を中心に開始されたが、4 月に入り県教育委員会が主体となり、最終の昭和 53 年度まで実施した。

この間、昭和 49 年度の高川市愛宕山遺跡（宮沢遺跡）の調査中に、公団から同遺跡周辺丘陵の土取計画が協議されて翌 50 年度に発掘調査したところ、古代城柵官衙遺跡であることが判明した。そのため文化庁・日本道路公団との協議を重ねて遺跡保存を検討し、路線敷は精査のうえ、施工方法や設計の変更等を行なった。この土取計画部分一帯は昭和 51 年 7 月 13 日、「宮沢遺跡」として史跡に指定された。

関連遺跡は調査の過程で 1 遺跡を追加して最終的に 52 遺跡となったが、昭和 53 年 8 月栗原郡志波姫町御駒堂遺跡の発掘調査をもって、全遺跡について完了した。

遺物整理については、昭和 54 年度から 58 年度までの 5 年間で行ない I から X 分冊までの報告書を刊行する、本報告書に引続き第 9 分冊および第 10 分冊を刊行する予定である。

(1) ^{はち}八 ^や谷 ^{だて}館 ^{あと}跡

目 次

| | |
|---------------|----|
| I. 位置と環境 | 9 |
| 1. 位置と地形 | 9 |
| 2. 周辺の遺跡 | 10 |
| II. 遺跡の状況 | 14 |
| III. 調査の方法と経過 | 17 |
| IV. 調査の成果 | 21 |
| 中世の遺構と遺物 | 21 |
| 1. 発見された遺構 | 21 |
| 上段平場 | 21 |
| 北側下段平場 | 25 |
| 南側下段平場 | 38 |
| 空堀・土塁 | 44 |
| 腰郭 | 44 |
| 2. 発見された遺物と年代 | 46 |
| A. 陶磁器 | 46 |
| B. 土師質土器 | 54 |
| C. 石製品 | 54 |
| D. 貨幣 | 55 |
| V. 遺構について | 57 |
| 1. 遺構の形態と規模 | 57 |
| 2. 遺構の重複 | 57 |
| 3. 遺構の年代 | 63 |
| 4. 館跡について | 64 |
| 古代の遺構と遺物 | 66 |
| 1. 古墳時代の遺構と遺物 | 66 |
| (1) 墓壇 | 66 |
| (2) 墓壇の構造について | 68 |
| (3) 墓壇の性格 | 69 |
| 2. 古代の遺物と年代 | 70 |
| 3. 焼土遺構 | 70 |
| VI. まとめ | 72 |

調査要項

遺跡所在地：大和町落合蒜袋字新田

遺跡面積：15,000 m²

遺跡記号：AD

調査主体：宮城県教育委員会・日本道路公団

調査期間：昭和47年11月1日～昭和48年6月3日

調査面積：10,000 m²

発掘面積：4,000 m²

調査員：藤沼邦彦・白鳥良一・小井川和夫・加藤道男・斎藤吉弘・熊谷幹男・
田中則和・柳田俊雄・遊佐二郎

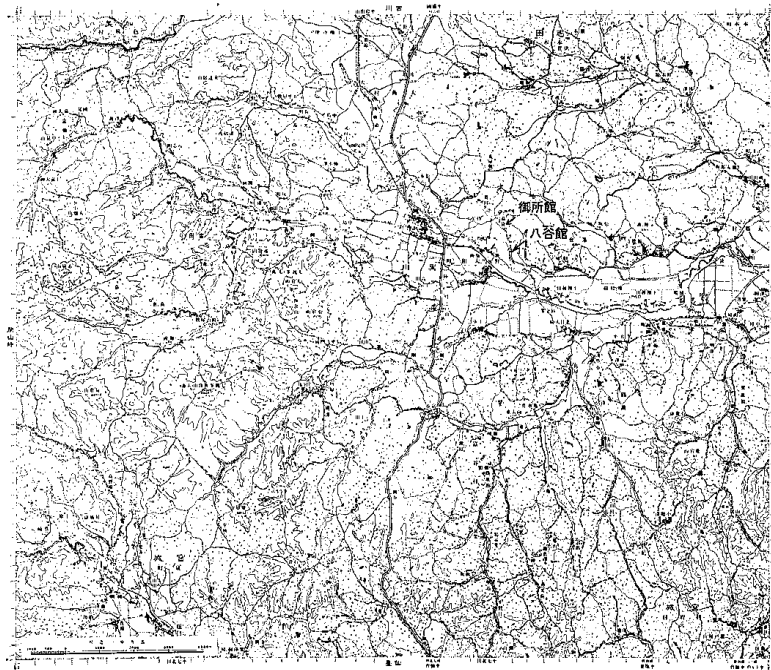
I. 位置と環境

1. 位置と地形

八谷館と北側の御所館は黒川郡大和町落合蒜袋字新田・宮下に在り、大和町役場の東約2 kmに位置する。黒川郡は宮城県の中北部に位置し、加美郡・志田郡・桃生郡・宮城郡の4郡に接している。行政的には富谷町・大和町・大郷町・大衡村の3町1村が含まれる（第1図）。

黒川郡の位置する地域の地形を概観すると、西側に南北に長い奥羽山地帯があり、その東側に奥羽山地麓が広がっている。この山地麓は東にゆるやかな勾配をもつ樹枝状の丘陵であり、北部には大松沢丘陵、南部には富谷丘陵・松島丘陵などの名称が付いている。これらの丘陵間には低地が開けており、鶴田川・善川などの支流を集めて吉田川が東流している。これらの河川の流域には河岸段丘や沖積地が発達している。

遺跡が位置する大和町の地形をみると西側の奥羽山地帯から北東部に大松沢丘陵、南東部に富谷丘陵が樹枝状に派生してきており、この丘陵間に吉田川低地帯と呼ばれる低地帯がみられる。この低地帯には吉田川とその支流である善川・南川・西などが東流し、その流域には河岸段丘・沖積平野・谷底平地などが発達している。



第1図 大和町周辺の地形

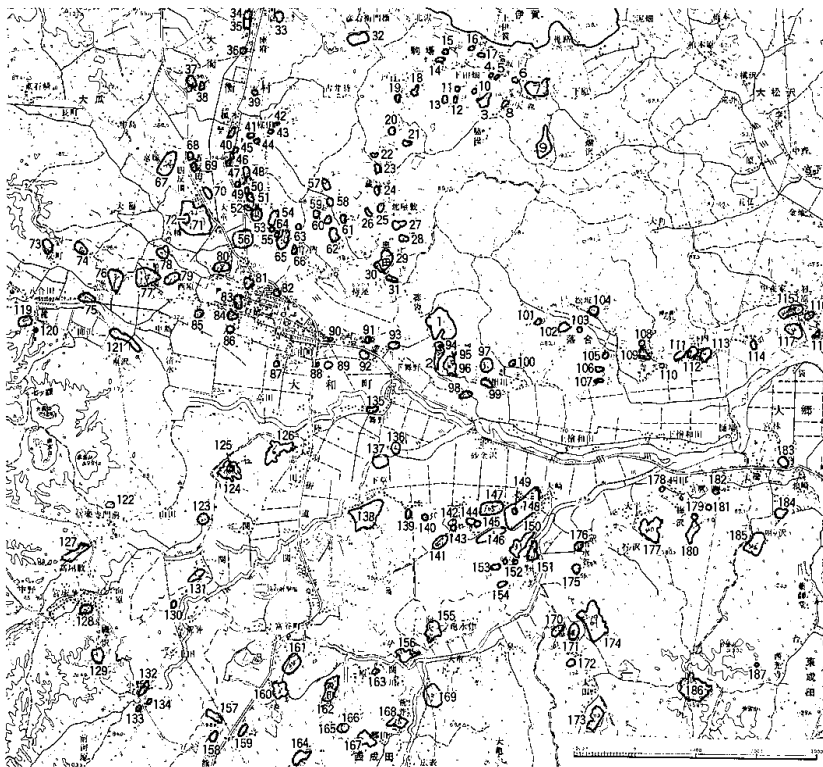
大松沢丘陵の西部に、低地帯に面して南東方向にのびる丘陵がある。その西側と東側には小丘陵が発達している。この丘陵は大衡村古井待地区から大和町落合報恩寺地区に派生している。南東方向にのびる丘陵の西側小丘陵の中に沖積地と音羽沢の間を南にのびた丘陵がみられ、大和町落合行屋下付近から同町相川地区にかけて派生している。2つの館跡はこの南にのびた小丘陵の落合地区に位置している。

館跡の位置する丘陵は菱柄地区から北東に入る沢と東側から入る音羽沢によって囲まれ、北側の鞍部を残して周囲の丘陵から分離した状況を示している。

2. 周辺の遺跡

本遺跡の周辺には旧石器時代から近世までの遺跡が数多く分布している(宮城県教委:1980)。第2図は黒川郡内の遺跡分布を示したものである。これらの遺跡の多くは吉田川とその支流(鶴田川・善川・西川・宮床川など)の流域にある河岸段丘と丘陵に多く立地している。

この中で、本遺跡と同じ中世の遺跡には城館跡・経塚・板碑・磨崖仏・廃寺跡・墳墓(塚)などがある。



第2図 御所館・八谷館・駒場館周辺の遺跡

第1表 遺跡地名表

| 番号 | 遺跡名 | 時代 | 町名 | 番号 | 遺跡名 | 時代 | 町名 |
|----|------------|-----------|-----|----|---------|-------------|-----|
| 1 | 御所館跡 | 中世 | 大和町 | 48 | 平林B遺跡 | 旧石器 | 大衛村 |
| 2 | 八谷館跡 | 〃 | 〃 | 49 | 平林遺跡 | 縄文・奈良・平安 | 〃 |
| 3 | 駒場館跡 | 〃 | 大衛村 | 50 | 八幡神社北遺跡 | 縄文 | 〃 |
| 4 | 上深沢遺跡 | 縄文(中) | 〃 | 51 | 八幡神社遺跡 | 〃 | 〃 |
| 5 | 上深沢東遺跡 | 縄文 | 〃 | 52 | 八幡神社南遺跡 | 〃 | 〃 |
| 6 | 海老沢遺跡 | 縄文(中) | 〃 | 53 | 大衛城跡 | 中世 | 〃 |
| 7 | 長楯城跡 | 中世・近世 | 〃 | 54 | 古城館跡 | 〃 | 〃 |
| 8 | 鎌砥裏遺跡 | 旧石器・奈良・平安 | 〃 | 55 | 五十沢遺跡 | 縄文・奈良・平安 | 〃 |
| 9 | 猫ノ森館跡 | 中世 | 〃 | 56 | 大衛役場前遺跡 | 縄文・奈良・平安 | 〃 |
| 10 | 中里遺跡 | 縄文 | 〃 | 57 | 奥田金沢遺跡 | 縄文(中)・奈良・平安 | 〃 |
| 11 | 小田遺跡 | 〃 | 〃 | 58 | 熊ノ沢遺跡 | 縄文 | 〃 |
| 12 | 小田南遺跡 | 〃 | 〃 | 59 | 前沢圃B遺跡 | 〃 | 〃 |
| 13 | 小田西南遺跡 | 〃 | 〃 | 60 | 前沢圃A遺跡 | 縄文・平安 | 〃 |
| 14 | 須山支神社裏遺跡 | 奈良・平安 | 〃 | 61 | 五十沢遺跡 | 縄文・奈良・平安 | 〃 |
| 15 | 上原川遺跡 | 縄文・平安 | 〃 | 62 | 苗代沢遺跡 | 〃 | 〃 |
| 16 | 下原川遺跡 | 平安 | 〃 | 63 | 寺沢遺跡 | 奈良・平安 | 〃 |
| 17 | 坂下遺跡 | 奈良・平安 | 〃 | 64 | 松本A遺跡 | 〃 | 〃 |
| 18 | 戸口B遺跡 | 〃 | 〃 | 65 | 松本遺跡 | 縄文・奈良・平安 | 〃 |
| 19 | 戸口A遺跡 | 縄文 | 〃 | 66 | 要害遺跡 | 奈良・平安 | 〃 |
| 20 | 小田切A遺跡 | 〃 | 〃 | 67 | 四反田遺跡 | 縄文(早・前) | 〃 |
| 21 | 小田切B遺跡 | 縄文 | 〃 | 68 | 小沓掛B遺跡 | 縄文(中・後) | 〃 |
| 22 | 梅木遺跡 | 奈良・平安 | 〃 | 69 | 小沓掛遺跡 | 縄文(晩) | 〃 |
| 23 | 新道遺跡 | 縄文・奈良・平安 | 〃 | 70 | 大童遺跡 | 縄文 | 〃 |
| 24 | 蔵遺跡 | 奈良・平安 | 〃 | 71 | 亀岡遺跡 | 奈良・平安 | 〃 |
| 25 | 在家遺跡 | 縄文 | 〃 | 72 | 亀岡古墳 | 古墳 | 〃 |
| 26 | 中沢圃遺跡 | 奈良・平安 | 〃 | 73 | 山沢遺跡 | 縄文・奈良・平安 | 大和町 |
| 27 | 荒屋敷遺跡 | 〃 | 〃 | 74 | 瀬戸原遺跡 | 縄文 | 〃 |
| 28 | 大蛸遺跡 | 平安 | 〃 | 75 | 童子沢遺跡 | 縄文・奈良・平安 | 〃 |
| 29 | 腰館跡 | 中世 | 〃 | 76 | 中峯B遺跡 | 縄文・平安 | 〃 |
| 30 | 下屋敷遺跡 | 奈良・平安 | 〃 | 77 | 中峯A遺跡 | 〃 | 〃 |
| 31 | 岩下遺跡 | 〃 | 大和町 | 78 | 小屋館跡 | 中世 | 大衛村 |
| 32 | 彦右衛門橋南遺跡 | 〃 | 大衛村 | 79 | 一の坂遺跡 | 縄文(中)・平安 | 大和町 |
| 33 | 待井沢遺跡 | 〃 | 〃 | 80 | 金谷遺跡 | 縄文(中・後・晩) | 大衛村 |
| 34 | 河原A遺跡 | 縄文・奈良・平安 | 〃 | 81 | 中興寺遺跡 | 縄文(晩) | 大和町 |
| 35 | 河原B遺跡 | 奈良・平安 | 〃 | 82 | 安楽院遺跡 | 縄文(中・後) | 〃 |
| 36 | 座府遺跡 | 〃 | 〃 | 83 | 吉岡城跡 | 江戸 | 〃 |
| 37 | 尾無A遺跡 | 縄文・奈良・平安 | 〃 | 84 | 吉岡古館跡 | 中世 | 〃 |
| 38 | 尾無B遺跡 | 奈良・平安 | 〃 | 85 | 南金谷遺跡 | 縄文 | 〃 |
| 39 | ボート仙台工場南遺跡 | 平安・中世・近世 | 〃 | 86 | 車遺跡 | 奈良・平安 | 〃 |
| 40 | 大衛中学校裏遺跡 | 縄文 | 〃 | 87 | 天皇寺遺跡 | 平安 | 〃 |
| 41 | 楓木D遺跡 | 〃 | 〃 | 88 | 一里塚 | 江戸 | 〃 |
| 42 | 長原C遺跡 | 〃 | 〃 | 89 | 一里塚遺跡 | 縄文 | 〃 |
| 43 | 長原B遺跡 | 〃 | 〃 | 90 | 糸繰遺跡 | 〃 | 〃 |
| 44 | 長原A遺跡 | 〃 | 〃 | 91 | 西涌田遺跡 | 平安 | 〃 |
| 45 | 楓木C遺跡 | 〃 | 〃 | 92 | 柴崎遺跡 | 奈良 | 〃 |
| 46 | 楓木B遺跡 | 奈良・平安 | 〃 | 93 | 古川遺跡 | 奈良・平安 | 〃 |
| 47 | 楓木A遺跡 | 縄文 | 〃 | 94 | 新田古墳 | 古墳 | 〃 |

| 番号 | 遺跡名 | 時代 | 町名 | 番号 | 遺跡名 | 時代 | 町名 |
|-----|----------|------------|-----|-----|------------|---------------|-----|
| 95 | 新田古墳 | 古墳(円墳) | 大和町 | 143 | 日光山西小塚 | | 大和町 |
| 96 | 八谷古城跡 | 中世 | 〃 | 144 | 別所遺跡 | 縄文(晩) | 〃 |
| 97 | 上ノ山遺跡 | 平安 | 〃 | 145 | 天神遺跡 | 中世 | 〃 |
| 98 | 相川堤防遺跡 | 縄文・奈良・平安 | 〃 | 146 | 別所遺跡 | 奈良・平安 | 〃 |
| 99 | 熊野遺跡 | 奈良・平安 | 〃 | 147 | 寺東遺跡 | 〃 | 〃 |
| 100 | 塚越遺跡 | 〃 | 〃 | 148 | 北目大崎館跡 | 中世? | 〃 |
| 101 | 新坂囲遺跡 | 縄文(中) | 〃 | 149 | 北目大崎古墳 | 古墳 | 〃 |
| 102 | 要害館跡 | 中世・近世 | 〃 | 150 | 天神館跡 | 中世 | 〃 |
| 103 | 要害遺跡 | 縄文・弥生・平安 | 〃 | 151 | 町場遺跡 | 奈良・平安 | 〃 |
| 104 | 斎の前遺跡 | 縄文(中・晩)・平安 | 〃 | 152 | 県史跡 鳥屋八幡古墳 | 古墳(後)・(円墳) | 〃 |
| 105 | 竹沢 A 遺跡 | 奈良・平安 | 〃 | 153 | 大崎窯跡 | 中世 | 〃 |
| 106 | 竹沢 B 遺跡 | 〃 | 〃 | 154 | 新田古墳 | 古墳 | 〃 |
| 107 | 竹沢 C 遺跡 | 〃 | 〃 | 155 | 大童館跡 | 中世 | 富谷町 |
| 108 | 黒川景氏の墓塔 | 中世 | 〃 | 156 | 奈良木城跡 | 〃 | 〃 |
| 109 | 古館跡 | 〃 | 〃 | 157 | 熊谷館跡 | 〃 | 〃 |
| 110 | 窟薬師磨崖仏 | 〃 | 〃 | 158 | 源内遺跡 | 平安 | 〃 |
| 111 | 西館跡 | 〃 | 〃 | 159 | 平沢遺跡 | 旧石器 | 〃 |
| 112 | 中橋城跡 | 〃 | 〃 | 160 | 南橋城跡 | 中世 | 〃 |
| 113 | 東館館跡 | 〃 | 〃 | 161 | 湯舟沢遺跡 | 縄文(早・前) | 〃 |
| 114 | 郷の目囲古墳 | 古墳(後)・(円墳) | 〃 | 162 | 小国館跡 | 中世 | 〃 |
| 115 | 石原東館跡 | 中世 | 大郷町 | 163 | 原町南遺跡 | 縄文(早・前)・奈良・平安 | 〃 |
| 116 | 石原北館跡 | 〃 | 〃 | 164 | 鹿鼻館跡 | 中世 | 〃 |
| 117 | 石原南館跡 | 〃 | 〃 | 165 | 穀田十三塚 | 近世 | 〃 |
| 118 | 下り松遺跡 | 奈良・鎌倉 | 〃 | 166 | 穀田経塚 | 中世 | 〃 |
| 119 | 麓城跡 | 中世 | 大和町 | 167 | 兵六館跡 | 〃 | 〃 |
| 120 | 麓遺跡 | 縄文 | 〃 | 168 | 熊野館跡 | 〃 | 〃 |
| 121 | 窪囲遺跡 | 縄文(中・晩) | 〃 | 169 | 鳥屋又遺跡 | 〃 | 〃 |
| 122 | 信楽寺跡 | 中世 | 〃 | 170 | 十王沢遺跡 | 奈良・平安 | 大和町 |
| 123 | 山田遺跡 | 縄文 | 〃 | 171 | 広畑遺跡 | 縄文・奈良・平安 | 〃 |
| 124 | 門前城跡 | 中世 | 富谷町 | 172 | 太田遺跡 | 奈良・平安 | 〃 |
| 125 | 館山経塚 | 室町 | 〃 | 173 | 小谷城館跡 | 中世 | 〃 |
| 126 | 馳取城跡 | 中世 | 〃 | 174 | 佐和城跡 | 〃 | 〃 |
| 127 | 宇和多手城跡 | 江戸 | 大和町 | 175 | 清水谷 B 遺跡 | 奈良・平安 | 〃 |
| 128 | 田手岡館跡 | 〃 | 〃 | 176 | 清水谷 A 遺跡 | 〃 | 〃 |
| 129 | 89 | | 〃 | 177 | 泉館跡 | 安土・桃山 | 〃 |
| 130 | 柴崎遺跡 | 奈良 | 〃 | 178 | 郷の目囲古墳 | 古墳(後) | 〃 |
| 131 | 堂屋館跡 | 中世 | 富谷町 | 179 | 多門寺麿寺跡 | 江戸 | 〃 |
| 132 | 小野 B 遺跡 | 旧石器 | 大和町 | 180 | 八津八城跡 | 中世 | 〃 |
| 133 | 小野 A 遺跡 | 縄文 | 〃 | 181 | 真山古墳 | 古墳(後)・(前方後円墳) | 〃 |
| 134 | 小野向田遺跡 | 奈良・平安 | 〃 | 182 | 庚申塔 | 江戸 | 〃 |
| 135 | 上舞野 B 遺跡 | 〃 | 〃 | 183 | 大小寺遺跡 | 平安(末) | 大郷町 |
| 136 | 上舞野 A 遺跡 | 縄文・奈良・平安 | 〃 | 184 | 大小寺古墳群 | 古墳(後) | 〃 |
| 137 | 下草古城跡 | 中世 | 〃 | 185 | 土橋古城跡 | 中世 | 〃 |
| 138 | 鶴巣館跡 | 〃 | 〃 | 186 | 小屋館跡 | 〃 | 大和町 |
| 139 | 迫遺跡 | 奈良・平安 | 〃 | 187 | 支倉常長の墓 | 近世 | 大郷町 |
| 140 | 観音堂小塚跡 | | 〃 | | | | |
| 141 | 勝負沢遺跡 | 縄文(中)・平安 | 〃 | | | | |
| 142 | 日光山遺跡 | 中世・近世 | 〃 | | | | |

城館跡は中世から近世まで62ヶ所確認されている。この中で中世の城館とされるものは59ヶ所である。その分布は吉田川の支流である味明川・西川・竹林川～宮床川・善川・鶴田川流域にある沖積地や谷底平地に派生した丘陵頂部と中腹に見られる。これらの中で調査された館跡は本遺跡の他に駒場小屋館(大衡村)、御所館・八谷古城・鶴巣館(大和町)などの4遺跡である。これらの館はいずれも丘陵頂部・斜面を利用した山城形式のものである。調査の結果、土塁・堀・掘立柱建物跡・門・井戸・土倉などの遺構が検出され、中世の国内産陶器や中国産の青磁・白磁などが発見されている。また、文和二年(1353年)の「和賀義綱代野田六郎左衛門尉着到状」・「和賀義綱軍忠状」に「黒河郡吉田城」として出てくる城が、麓館と考えられている。

経塚には二ノ関城の館山経塚(大和町)、志戸田経塚・穀田経塚(富谷町)、鶉崎経塚(大郷町)の4ヶ所が知られており、丘陵に立地する。館山経塚一号塚からは永和二年の刻名のある青銅製の経筒が発見され「黒河郡中迫二湛」の地名がある。また、鶉崎経塚からは鎌倉時代と考えられる銅製の経筒が出土している。

板碑には草川の碑(大和町)をはじめ鎌倉期のもの10基、南北朝のもの1基が確認されている。この分布は館、屋敷跡・寺の周辺に集中する傾向があると指摘されている(加藤:1975)。

塚には日光山遺跡1号・2号方形塚(大和町)、勢見ヶ森方形塚(大郷町)が調査されており、日光山遺跡は中世末の修法関係の塚・墳墓と考えられている(斉藤:1981)。

磨崖仏は報恩寺の窟薬師磨崖仏(大和町)と石原下り松磨崖仏(大郷町)が知られ、いずれも鎌倉期のものとされている。

この他に上深沢遺跡で中世の無釉陶器・施釉陶器と近世の染付磁器、勝負沢遺跡で中世の無釉陶器と中国産の青磁碗が出土しているが遺構は検出されていない(丹羽:1978)・(丹羽・阿部・小野寺:1982)。

なお、旧石器時代から古代にかけての遺跡も第2図に見られるように数多く分布している。これらの主な遺跡について概観してみると次のような遺跡があげられる。

旧石器時代の遺跡には丘陵斜面に立地する長沢遺跡などが知られ、ナイフ形石器・石刃などの石器が発見されている。

縄文時代の遺跡には早期から晩期まで見られ、この中で上深沢遺跡・勝負沢遺跡・大松沢遺跡・金取遺跡・中峰遺跡などが調査されている。この時代の遺跡は丘陵中腹・段丘・台地上に立地する。

弥生時代の遺跡には要害遺跡・深谷遺跡・日吉神社前遺跡などが知られ、前者2遺跡からは石包丁、後者からはアメリカ式石鏃が発見されている。

古代に属する遺跡には古墳・集落跡・窯跡などがある。

古墳としては高塚古墳と横穴古墳がみられる。高塚古墳には諏訪古墳・山中古墳・大小寺古

墳・鳥屋八幡古墳・真山古墳などがある。横穴古墳として別所横穴古墳群があり、5基調査されている。これらの古墳は吉田川右岸の大和町北目大崎から大郷町東沢にかけての丘陵、台地上に多く立地している。

集落跡は原前南遺跡、勝負沢遺跡で調査が行なわれ、原前南遺跡で奈良時代の住居跡2軒、平安時代の住居跡が1軒、勝負沢遺跡で平安時代の住居跡が1軒検出されている。

窯跡としては鳥屋窯跡・三角田南窯跡がある。いずれも吉田川の支流である西川左岸の丘陵斜面に立地しており、両窯跡とも須恵器の甕・坏などのほかに円面硯が焼かれている。

この他に勢見ヶ森遺跡で平安時代と考えられる土壘が調査されている。

II. 遺跡の状況

八谷館は黒川郡大和町落合蒜袋字新田に所在し、大和町役場の東約2kmに位置する。館跡は御所館の南側にあり、北は五光沢、東は窪田沢、西と南は吉田川の沖積地に面した南にのびる南北500m、東西50mの丘陵上に立地する。丘陵の北側が雑木林、中央が水田、南側が杉林、雑木林として利用されている。館跡の遺構は丘陵の北側と南側に平場、土壘、空堀などが確認できるが、中央部分は水田のため不明である(第3図)。

北側の蒜袋字新田地区にみられる館の立地する丘陵は、東側は北東部の北から入る五光沢と南から入る沢の間にある鞍部で東側の丘陵と続いていく。

尾根上には頂部の平場(上段平場)とその北側と南側に1段低い平場(南、北下段平場)があり、北側の下段平場の西～北斜面には土壘を伴う空堀がみられる。さらに東側の沢に面した斜面と西側斜面には小さな平坦部(腰郭Ⅰ・Ⅱ)がある。

上段平場は東西25m×南北35mの不整形をした標高40mの平場であり、北辺および西辺中央にかけて高さ約1mの土壘がめぐっている。西側の水田との比高は27mである。

北側下段平場は上段平場より3～4m低く東西30m、南北40mの約1200㎡の面積で、ほぼ平坦であり、西辺に長さ25m、高さ1.5mの土壘がある。南側下段平場は上段平場より2～2.5m低く東西20m、南北15mの約300㎡の面積で南に傾斜する平坦面であり、西辺に長さ約40m、高さ約1mの土壘がある。その内側に溝がある。

北側下段平場の北側から西側斜面にある空堀は、下段平場より2～5m低く、幅は約2mである。空堀は南側にいくにしたがって徐々に浅くなり、下段平場の南西隅で消滅する。空堀の西側には土壘状の高まりがみられる。

腰郭Ⅰは、頂部平場と南側下段平場の西側にあり、頂部平場より5m低い。腰郭Ⅱは南側下段平場より3m低く五光沢に面した平場であり、南東部の境は明確でない(第4図)。

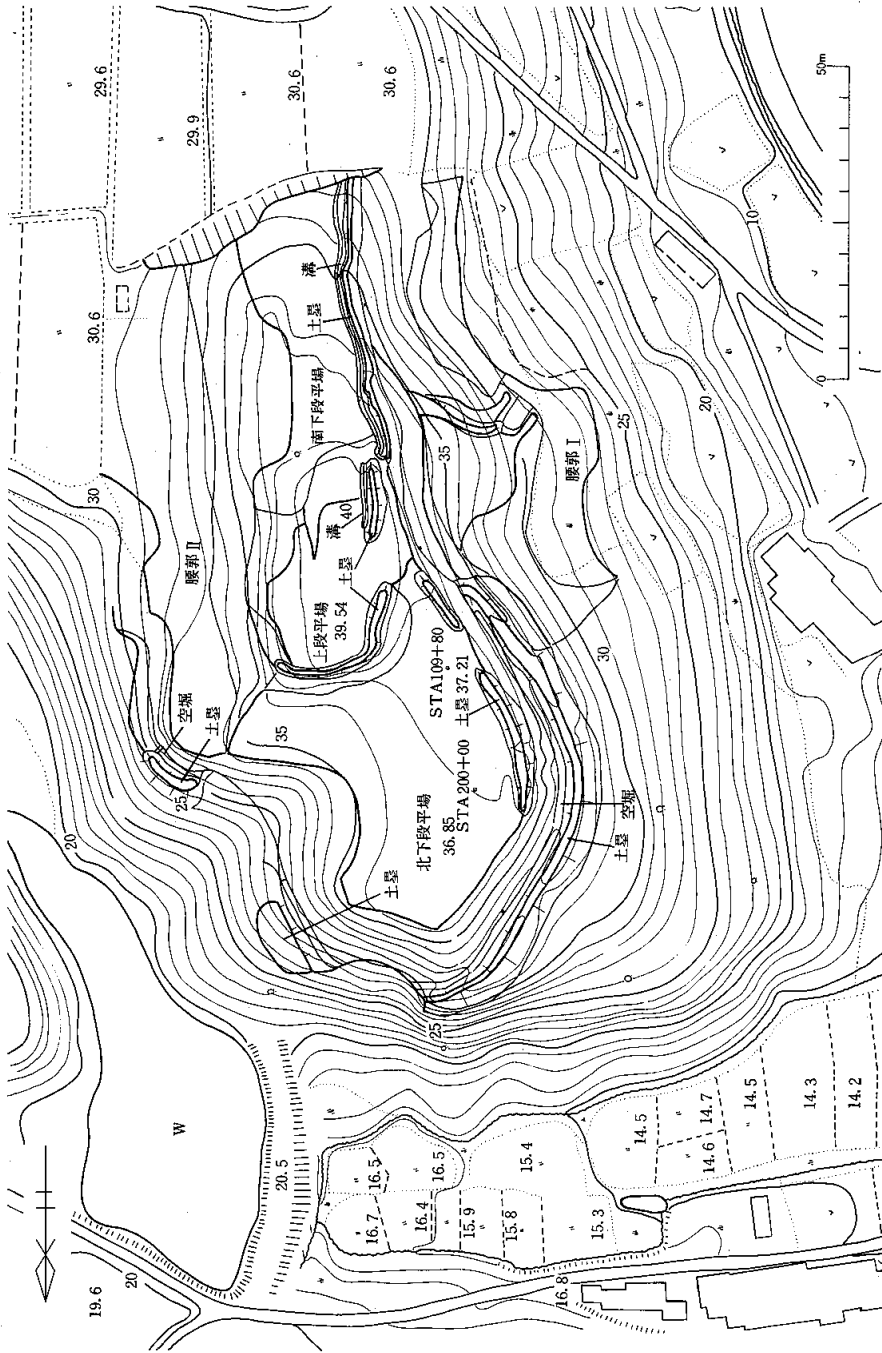


第3図 遺跡周辺の地形図

注1

相川地区の館跡は、丘陵南端に位置し東は窪田沢、西と南は沖積地に面している。館としての遺構は中央部の水田との境にある北側を区画する「堀切り」と丘陵端の南側を区画する「堀切り」の間にある丘陵部に確認できる。この北と南の「堀切り」の間にある丘陵頂部にはさらに空堀によって区切られた南と北2つの平場からなる。両平場間の空堀には土橋が設置されている。

南側丘陵頂部は堀を境としてさらに南東に延びた狭い平場である。この地区は町道工事の際の調査で柱穴が確認されており1つの郭としての性格をもっていたものと考えられる。



第4図 八谷館地形図

Ⅲ. 調査の方法と経過

地区設定：中心杭 S T A 109+80 と S T A 110+00 を結んだ延長線とこれに直交する線を基準とし、遺跡全体に 3 m 単位の方眼を組み、南北方向をアラビア数字で東西方向をアルファベットで示した。

調査経過：調査は 11 月 1 日に入った。雑木を撤収の後、全体の写真撮影を行なった。グリット設定の後、セクション観察用の土手を残し、トレンチによる遺構確認に入った。最初に北側下段平場に入った結果、地山面と整地面から重複した多数のピットと土壌が検出された。特にピットは平場全体に認められ、掘り方と柱痕跡がみられるため柱穴と考えられるものが多かった。その後、上段平場、南側下段平場でも柱穴群が確認されたために、路線敷にかかる部分の全面調査を行なうことにした。11 月に入った時点で平場の調査と同時に西斜面の空堀の調査や土塁の切断を行なった。その結果、北側下段平場の南西隅の土塁切断の途中で土塁下から門跡などが検出されたために建物の建て替えの他に土塁の修築なども考えられた。調査が進むにしたがって次のような遺構が検出されてきた。

上段平場からは土塁・溝に囲まれて平場全体で多くのピットが検出されそれぞれの組合せによって 4 棟の建物跡の存在が考えられた。

北側下段平場は南北約 50m、東西約 20m の規模で西側に長さ約 25m の土塁がめぐる。平場の北から東側全体にかけて整地層が確認されており、造成によって平場面積の確保が行なわれていた。平場内からは、多数のピット、土壌、溝が検出され、ピットは柱穴と考えられるものが多く、組み合わせによって掘立柱建物跡が 12 棟確認できた。土壌は平場北側部分で 8 基検出されている。さらに平場北端で古墳の主体部と考えられる土壌 2 基を掘りあげた。

南側下段平場では掘立柱建物 4 棟と土塁が確認されている。

その他、発見された遺構は北辺と西辺をめぐる土塁と空堀である。

最後に下段平場の整地層をはずした地山面で長方形の土壌を検出した。

12 月～1 月にかけて調査は一旦中断したが、その後平面実測・写真撮影を行ない昭和 48 年 6 月 3 日で調査は終了した。

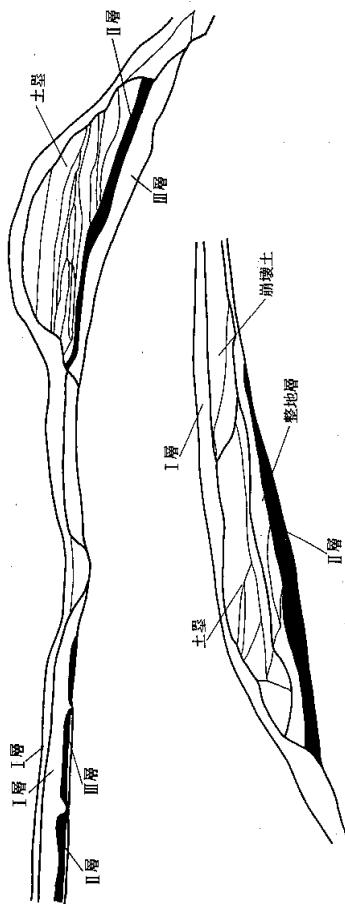
基本層位：館跡は南北にのびる丘陵上に立地しており、丘陵の東側には小さな沢地が入り込んでいる。館の構築をみると丘陵頂部を削平し、東側の沢の斜面に積み土による整地を行い平坦面の造成を行い、縁辺部や斜面を掘って空堀と土塁を構築している。このため頂部の地形が変化しており、本来の層序が残っているのは整地面下および土塁下の斜面部分である。そこでみられる層位色調などは次のようである。

- I層 暗褐色土 (表土及び耕作土)
- II層 黒褐色土 (旧表土)
- III層 褐色土 (漸移層)
- IV層 明褐色土 (地山)

なお、整地層や土塁が構築されているのはII層であるが、1部II層を削平して構築している場所もある。

調査区の名称：報告にあたって調査区の平場の名称を次のようにした。

上段平場→平場A、北側下段平場→平場B、南側下段平場→平場C、西側腰郭→平場D。



- I層 暗褐色土 (表土及び耕作土)
- II層 黒褐色土 (旧表土)
- III層 褐色土 (漸移層)
- IV層 明褐色土 (地山)

第5図 基本層位



第6図 八谷館遺構配図

IV. 調査の成果

中世の遺構と遺物

今回調査を行なったのは上段平場(平場A)、北側下段平場(平場B)、南側下段平場(平場C)、西側斜面の空堀、西側腰郭I(平場D)の5地区である。これらの各地区で発見された遺構は掘立柱建物跡、土壇、竪穴遺構、溝、門跡、土塁、空堀などである。発見された遺構については各平場ごとに説明をおこない、出土遺物については器種ごとにまとめて図示し説明を行なう。

1. 発見された遺構

上段平場(平場A)

上段平場の平面形は台形をしており、その規模は西辺約15m、東辺約25m、北辺と南辺は約11mである。西辺、北辺に土塁が確認できる。

表土の厚さは約20cmであり、表坏すぐに地山となっている。遺構確認面は地山であり、掘立柱建物跡、溝、土塁が検出されている。平場の東側に整地面がみられる。

掘立柱建物跡

平場全体でピットが検出された。これらの多くは柱痕跡が認められ、それぞれの組合せから4棟の掘立柱建物跡が確認できた。その他に柱穴と考えられるピットもあったが組み合わせ関係は抽出できなかった。

A-1号棟

桁行5間(10.1m)、梁間2間(4m)の東西棟である。棟方向はN-82°-Eである。梁間東側列の棟持柱の柱穴はみられない。

2号棟・3号棟と重複している。2・3号棟の柱穴が1号棟の柱穴を切っていることで2・3号棟より古い。

桁行柱間寸法の平均値は1.95m(6.4尺)で梁間柱間寸法は西側列の平均値は1.98m(6.5尺)である。

柱穴の掘り方は方形を基調とするものと楕円形のものがある。方形を基調とするものは40×35cmで、楕円形のもの50×35cmである。柱痕跡は円形で15~20cmである。

A-2号棟

身舎は桁行4間(7.6m)、梁間2間(4m)の南北棟である。北面に幅約1.1mの廂がつく。棟方向は東側でN-19°-Eである。

1号棟・3号棟・4号棟と重複しており、柱穴の切り合いから1号棟より新しく、3号棟・4号棟より古い。

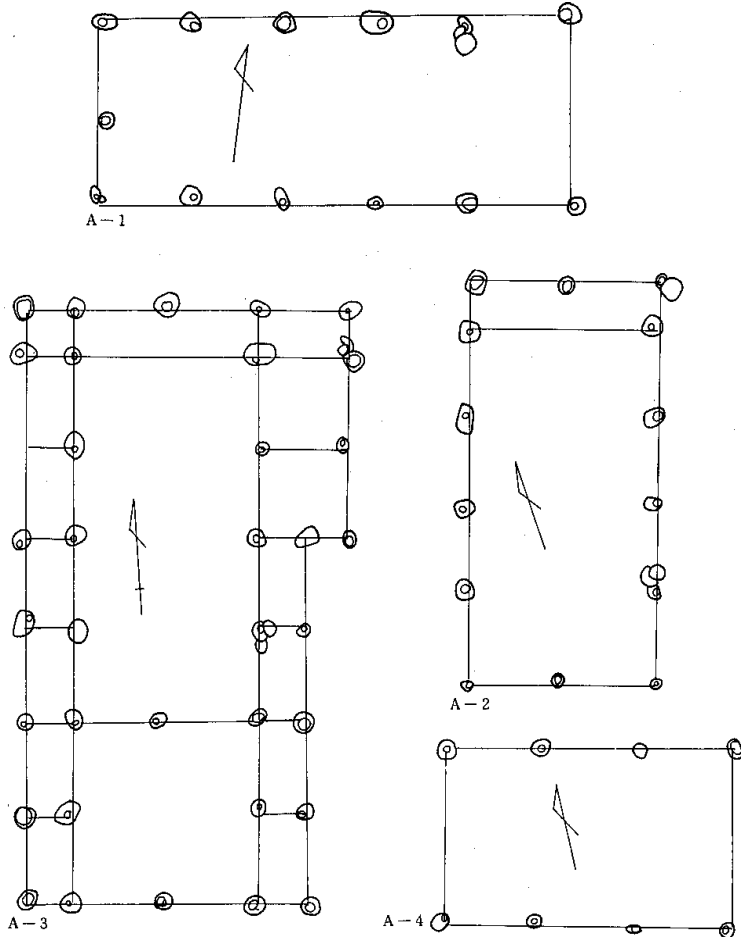
桁行柱間寸法の平均値は1.92m(6.3尺)で、梁間柱間寸法の平均値は2m(6.6尺)である。柱穴の掘り方は楕円形であるがその大きさは様々であり、大きい掘り方は60×30cm、小さい掘り方は30×20cmである。柱痕跡は円形で20～15cmである。

A-3号棟

身舎は桁行6間(12m)、梁間2間(4m)の南北棟である。北面・西面・東面南側に幅約1m、東面北側に幅約1.9mの廂がつく。棟方向はN-3°-Eである。

1号棟・2号棟・4号棟と重複しており、柱穴の切り合いから1号棟・2号棟より新しく、4号棟より古い。

桁行柱間寸法の平均値は1.98m(6.5尺)で、梁間柱間寸法は1.9m(6.27尺)である。柱穴



第7図 上段平場掘立柱建物跡

掘り方は楕円形であるが大きさは様々であり、大きい掘り方は50×40cm、小さい掘り方は20×15cmである。柱痕跡はほぼ円形で20～15cmである。

A-4号棟

桁行3間(6.2m)、梁間1間(3.8m)の東西棟である。棟方向は北側でW-79°-Nである。2号棟・3号棟と重複しており、柱穴の切り合いから2棟の建物跡より新しい。

桁行柱間寸法の平均値は2m(6.6尺)で、梁間柱間寸法は3.75m(12.37尺)である。

柱穴の掘り方は楕円形であり40×30cmである。柱痕跡は円形で20～15cmである。

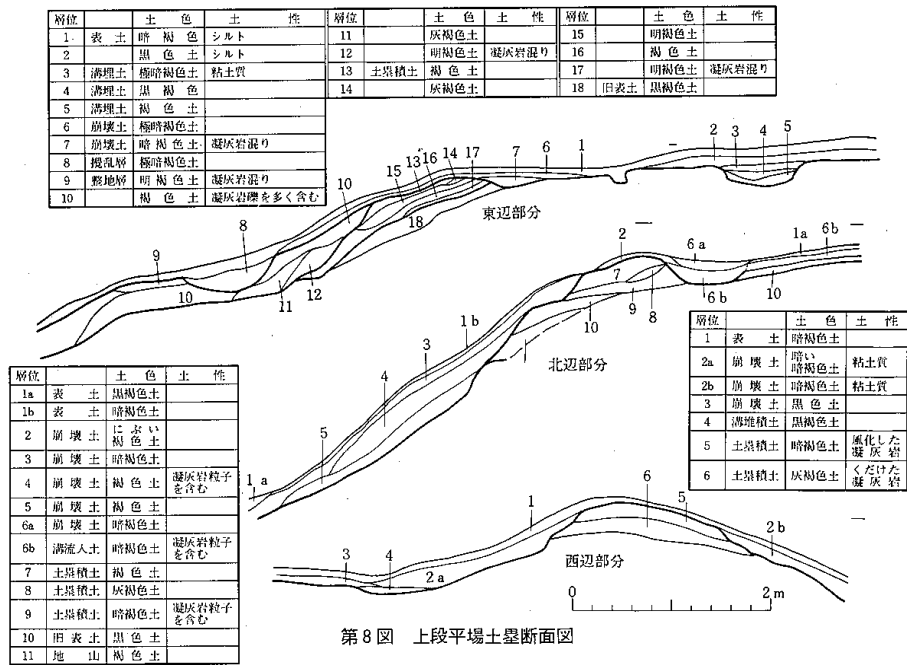
土 塁

土塁は平場の西辺・北辺に認められる。西辺の土塁は西辺の中央付近で約6m途切れておりその部分からゆるやかな斜面となって北側下段平場へ続いている。西辺から北辺にめぐる土塁は約26m、西辺の南側にのびる土塁は約15mである。

西辺部分の規模は基底幅約2m、高さ0.5～0.6mである。積み土はⅢ層を削平し凝灰岩質土と黒褐色土を平行に積み上げている部分と、整地層上面に明褐色土・黒褐色土などを平行に積み上げている部分がある。

北辺部分の規模は基底幅1.2～1.5m、高さ0.4～0.5mである。

西辺と北辺の土塁の外側には幅40～50cmの平坦な部分がみられる。



第8図 上段平場土塁断面図

溝

溝は6条（1号溝—6号溝）認められ、いずれも地山面で確認された。

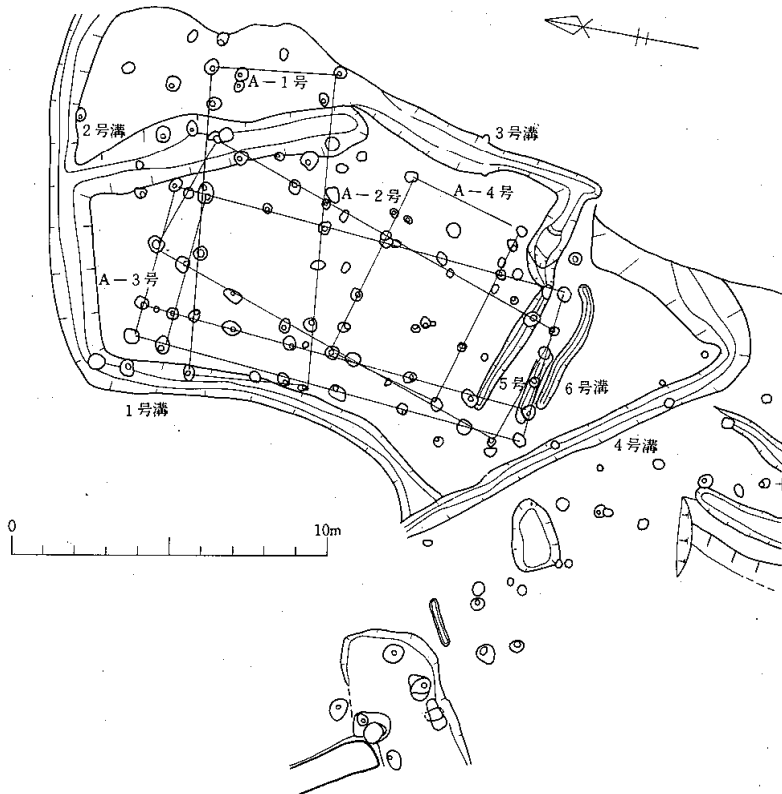
1号溝

平場の西辺中央付近から北辺をめぐる土塁の内側にそって北東方向にのびていき、東側の斜面に開いていく。西側北寄りでは1号棟と重複しており、北側で2号溝と、南側で4号溝と直交する。重複関係は1号棟の柱穴が溝の底面で確認されていることから溝が新しいと思われる。2号溝・4号溝との関係は切り合いが認められないため新旧関係は不明である。

検出された長さは全長25mで西辺の上幅は0.5～1m、北辺の上幅は1～1.5mである。底面は平坦であり、壁の立ち上りはゆるやかである。堆積土は褐色土、黒褐色土がみられる。溝の深さは約30cmで、下幅は50～60cmである。

2号溝

1号溝の北辺の中央から南東にのび、斜面に移行する部分で立ち上る。1号棟、2号棟と重



第9図 上段平場掘立柱建物跡 溝平面図

複している。1・2号棟の柱穴は溝底面で確認されているため溝が新しいと思われる。1号溝との切り合いは不明である。

溝の長さは約10mで、上幅は1.5～2mである。堆積土は褐色土、凝灰岩混り灰褐色土である。底面は平坦で、壁の立ち上りはゆるやかである。溝の深さは約25cmで、下幅は1～1.5mである。

3号溝

東辺中央付近から斜面にそって南にのび、南東で西へ直角に折れ南辺中央付近で立ち上る。3号棟と重複しているが、3号棟より新しい。検出された長さは東辺8m、南辺7mである。東辺で上幅1～1.5m、南辺で上幅0.6～1mである。堆積土は褐色土、灰褐色土などである。底面は平坦であり、壁の立ち上りはゆるやかである。深さは20cmである。

4号溝

上段平場の南東隅から直角に折れて西隅にのびていく。長さ約15m、東辺の上幅は1～2m、南辺の上幅は約0.7mである。堆積土は褐色土であり底面は平坦で壁はゆるやかに立ち上る。東辺の深さは20～30cmで、南辺の深さは約20cmである。底面幅は東辺約0.7m、南辺約0.4mである。西辺と南東隅の堆積土中から無釉陶器の甕の破片が5点出土している。

5号溝

3号溝と6号溝の間にある東西方向の溝で3号棟と重複し、3号棟より新しい。規模は長さ約4.5m、上幅約0.5mである。堆積土は褐色である。底面は皿状をしており壁はゆるやかに立ち上り深さは約15cmである。

6号溝

4号溝の北にある東西方向の溝で3号棟と重複し、3号棟より新しい。規模は長さ約2.5m、上幅0.5mである。堆積土は褐色土であり底面は皿状をしている。

北側下段平場（平場B）

平場は丘陵の北端部、標高36.9mの平坦部に位置し水田との比高は25mである。西側は沖積地、北側は五光沢、東側は五光沢より南西に入る小さな谷に面している。北側は比較的急な斜面となっている。平場の規模は南北約40m、東西約27mあり約1200㎡の面積である。平場の南西部は4×10mの平坦部で、上段平場の西側にそって序々に南に高くなって上段平場の南西隅に接続する。西辺に長さ25m、高さ1.5mの土塁があり平場の西～北斜面には土塁を伴う空堀からみられる。

表土の厚さは約20cm、第Ⅱ層の厚さは約20cmである。北側と東側は斜面の第Ⅱ層上面に積み土で整地を行ない平坦面を確保している。

遺構は地山面と整地面で確認した。平場内の検出遺構は掘立柱建物跡・竪穴遺構・土壇・溝などである。この他に平場の南西隅では第2号門跡と土塁西端の積み土の下より第1号門跡が

検出されている。

掘立柱建物跡

平場内でピットが数多く検出された。ピットには柱痕跡が認められるものが多く、これらの組合せによって13棟の建物跡が確認された（第10図）。

B-1号棟

身舎は桁行4間（8m）、梁間2間（3.8m）の南北棟である。西面に幅1mの廂がつく。棟方向は西側で $N-20^{\circ}-E$ である。ほぼ中央に間仕切りの柱穴がみられる。

B-2号棟と重複しているが柱穴の切り合いがないため建物跡相互の新旧関係は不明である。

桁行柱間寸法の平均値は2m（6.6尺）で、梁間柱間寸法は北側列で1.9m（6.27尺）である。柱穴の掘り方は楕円形であるが大きさは様々であり、大きい掘り方は $60 \times 50\text{cm}$ で小さい掘り方は $30 \times 20\text{cm}$ である。柱痕跡のみられるものはほぼ円形で $20 \sim 15\text{cm}$ である。廂の南西隅の柱穴掘り方埋土から青磁塼の口縁部が出土している。

B-2号棟

桁行2間（6.8m）、梁間2間（4.2m）の南北棟である。棟方向は $N-21^{\circ}-E$ である。1号棟と重複するが建物相互の新旧関係は不明である。ほぼ中央に間仕切りの柱穴がみられる。

桁行柱間寸法は $3.6\text{m} + 3.2\text{m}$ 、梁間柱間寸法は $2.2\text{m} + 2\text{m}$ であり、柱間寸法は不ぞろいな建物といえる。桁行柱間寸法の平均値は 3.4m （11.22尺）、梁間柱間寸法の平均値は 2.1m （6.93尺）である。

柱穴の掘り方は楕円形であり、大きさは $40 \times 20\text{cm}$ である。柱痕跡は円形で大きさは $15 \sim 10\text{cm}$ である。

B-3号棟

身舎は桁行2間（4.8m）、梁間2間（4.35m）の南北棟である。北面に幅1mの廂がつく、棟方向は $N-25^{\circ}-E$ である。

4号棟と重複するが、柱穴の切り合いがなく相互の新旧関係は不明である。

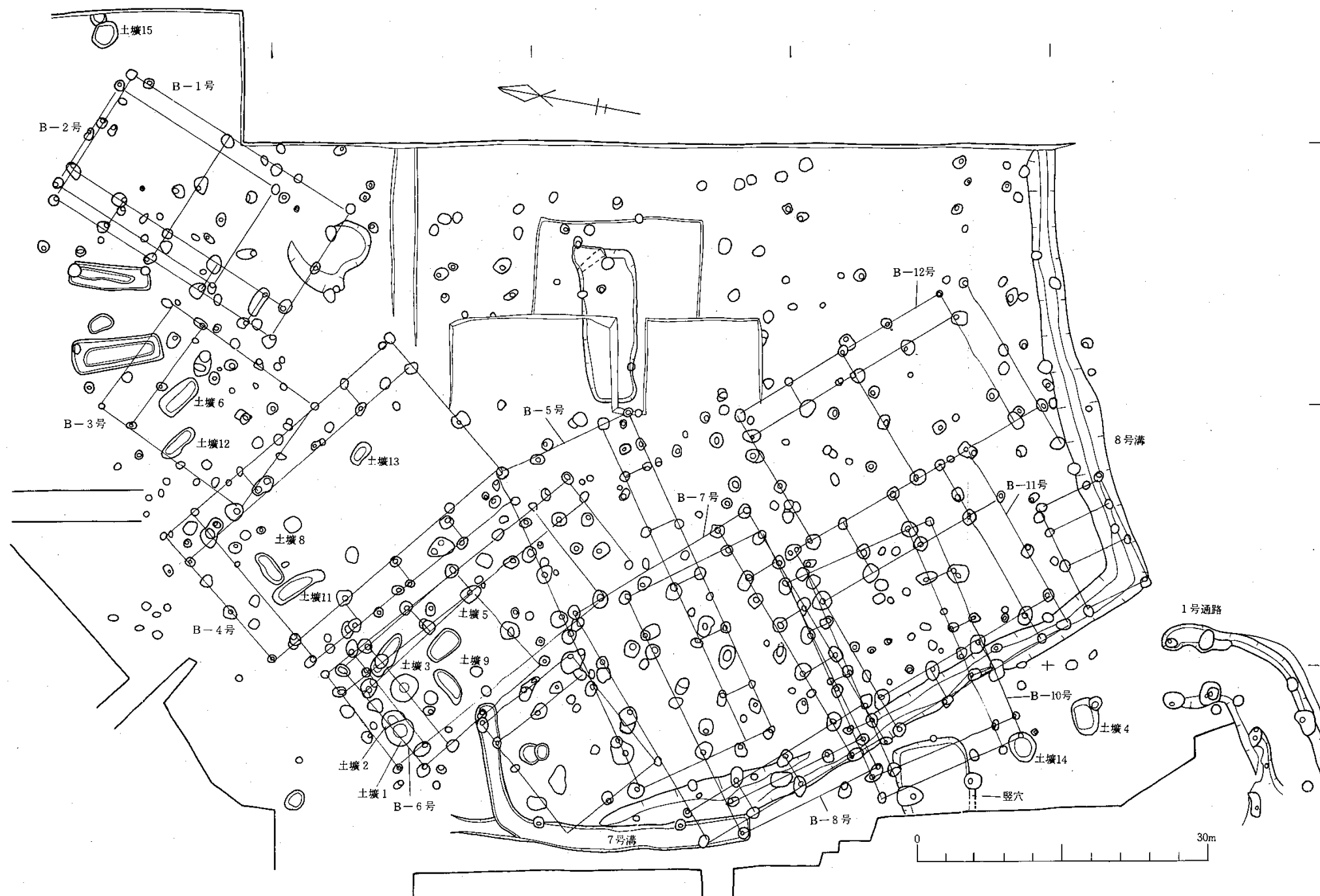
桁行柱間寸法の平均値は 2.35m （7.75尺）、梁間寸法の平均値は 2.171m （7.16尺）である。

柱穴の掘り方は楕円形であり、大きさは $30 \times 20\text{cm}$ である。柱痕跡は円形で大きさは $10 \sim 15\text{cm}$ である。

B-4号棟

身舎は桁行4間（9m）、梁間2間（4.8m）の東西棟である。北・西・南の三面に幅1mの廂がつく。棟方向は $W-46^{\circ}-N$ である。

3号棟・5号棟と重複している。4号棟の南東隅の柱穴が5号棟の柱穴と共有している。5号棟・3号棟との新旧関係は不明である。



第10図 北側下段平場掘立柱建物跡群

桁行柱間寸法の平均値は2.2m(7.26尺)で、梁間柱間寸法の平均値は2.4m(7.92尺)である。柱穴の掘り方は楕円形で、身舎の部分の大きさは50×30cmであり、廂の部分の大きさは30×20cmである。

B-5号棟

桁行6間(12.2m)、梁間2間(4m)の東西棟である。南面に幅1mの廂がつく。棟方向はN-59°-Eである。

4号棟・6号棟・7号棟・8号棟・9号棟と重複している。北側列の柱穴が9号棟の柱穴を切っていることで9号棟より新しいが、6～8号棟との相互関係は不明である。

桁行柱間寸法は1.9m～2.1mでありばらつきがみられるがその平均値は2m(6.6尺)で、梁間柱間寸法の平均値は2m(6.6尺)である。

柱穴の掘り方は楕円形であるが大きさは様々である。身舎の部分は大きいもので60×50cm、小さいもので40×20である。廂の部分は30×20cmと小さい。柱痕跡は円形で10～15cmである。身舎の柱穴から青磁壺と古瀬戸皿が出土している。

B-6号棟

桁行5間(9.8m)、梁間2間(3.8m)の東西棟であり、北・南の二面に廂がつく。棟方向はW-50°-Nである。梁間南側列の棟持柱の柱穴がみられない。廂の南側に3間(6.5m)、1間(2.2m)の建物が付設される。

5号棟・7号棟と重複している。7号棟の柱穴が6号棟南側の建物の柱穴を切っていることから7号棟より古い、5号棟との相互関係は不明である。

桁行柱間寸法は2m(6.6尺)で、梁間寸法は北側列で1.9m(6.3尺)である。

柱穴の掘り方は楕円形であり、大きさは40×30cmである。柱痕跡は略円形で10～15cmである。身舎の柱穴埋土から中世陶器片が出土している。

B-7号棟

桁行4間(7.9m)、梁間3間(5.8m)の東西棟であり、西・南の二面に幅1mの廂がつく。棟方向はN-48°-Eである。平面形は長方形で総柱の建物跡である。

5号棟・6号棟・8号棟と重複している。6号棟の柱穴を切っていることで6号棟より新しいが、5号棟・6号棟と相互の関係は不明である。

桁行柱間寸法の平均値は1.95m(6.43尺)で、梁間柱間寸法の西側列の平均値は1.95m(6.443尺)である。

柱穴の掘り方は楕円形であるが大きさは様々である。大きいものは70×50cm～小さいものは30×20cmまでである。柱痕跡は円形で20～15cmである。身舎の掘り方埋土から古瀬戸皿と中世陶器破片が出土している。

B-8号棟

桁行4間(7.9m)、梁間1間(3.7m)の東西棟であり、西と南の二面に幅1.2mの廂がつく、棟方向はN-61°-Eである。平面形は長方形である。

B-5号棟・B-7号棟・B-10号棟と重複している。B-10号棟の廂の柱穴がB-8号棟の廂の柱穴を切っているためB-10号棟より古いといえるが、B-5号棟、B-7号棟との相互関係は不明である。

桁行柱間寸法は1.9~2.1mでありその平均値は2m(6.6尺)である。梁間柱間寸法は3.7m(12.2尺)である。

柱穴の掘り方は楕円形であるが大きさは様々である。大きさは60×50cmの柱穴から40×30cmの柱穴までみられる。柱痕跡は略円形で15~10cmである。

B-10号棟

桁行4間(7.4m)、梁間2間の東西棟であり、北西南の三面に幅0.8m廂がつく。棟方向はN-55°-Eである。平面形は長方形である。梁間西側列への棟持柱に相当する位置が竪穴状遺構重複しているため、柱穴の存否は不明である。

B-7号棟・B-8号棟・B-11号棟と重複している。B-10号棟の廂の柱穴がB-8号棟の廂の柱穴を切っており、またB-11号棟の廂の柱穴に切られていることでB-8号棟より新しく、B-11号棟よりは古いといえるが、B-7号棟との相互関係は不明である。

桁行柱間寸法の平均値は1.82m(6尺)で、梁間柱間寸法の平均値は東側列で1.9m(6.27尺)となっている。

柱穴の掘り方は楕円形であるが大きさは様々である。大きいものは70×60cm~小さいものは30×20cmまでである。柱痕跡は円形で10~15cmである。

B-11号棟

桁行3間(5.9m)、梁間2間(3.9m)の南北棟である。東西南の三面に廂がつくが、西と南面は幅1.1mの廂で、東西は幅1.9mの廂である。棟方向はW-43°-Nである。平面形は長方形である。梁間南側列に対応する廂の中間部分に柱穴がみられる。

B-12号棟・B-10号棟と重複している。B-11号棟の廂の柱穴がB-10号棟の廂の柱穴を切っていることでB-10号棟より新しい。B-12号棟との相互の関係は不明である。

桁行柱間寸法の平均値は1.95m(6.43尺)で、梁間柱間寸法の平均値は1.95m(6.43尺)である。南側廂の柱間寸法は1.8m+2.1mである。

柱穴の掘り方は楕円形で大きさは身舎の部分が60×40cmであり、廂の部分が40×30cmである。柱痕の認められるものは円形で15~10cmである。

B-12号棟

桁行4間(8.2m)、梁間2間(4.2m)の東西棟であり、北・東の二面に幅0.9mの廂がつく。棟方向はN-47°-Eである。梁間西側列の棟持柱の柱穴が見られない。平面形の中央部に間仕切りと思われる柱穴が認められる。11号棟と重複しているが相互の新旧関係は不明である。

桁行柱間寸法の平均値は2.15m(7.09尺)で、梁間柱間寸法の東側列の平均値は2.1m(6.93尺)である。

柱穴の掘り方は身舎の部分が楕円形で大きさは60×40cmであり、廂の部分は円形で大きさは30×20cmである。柱痕跡は円形で20～15cmである。身舎の柱穴埋土から中世陶器片が出土している。

竪穴遺構

確認面は地山面である。B-10号棟と重複するが相互の切り合がなく、新旧関係は不明である。

平面形は方形を基調とするが、西側が削平されているため本来の平面形・規模は不明である。大きさは東辺が2.4m、北辺の残存長が2.5mである。

堆積土は4層認められる。1層は暗褐色土、2層は黒褐色土、3・4層は壁際にある黄褐色土である。

壁は地山でかたい。壁高は40cmである。底面は平坦であり、壁は底面からゆるやかに立ち上る。壁の周囲に柱穴が3個認められるが、基遺構に伴うものか不明である。

土 壇

土壇は7基確認されている。土壇は平場の西側に分布する(第11図)。

1号土壇～3号土壇は円形である。

1号土壇

3号土壇と重複しこれを切っている。

平面形は円形で、大きさは径0.9mである。

堆積土は4層認められる。1層は暗褐色土、2層は黒褐色土で層中に炭化米を含む、3層は炭化米の層、4層は木炭を含む黄褐色土である。

壁は地山であり、壁高は50cmである。底面は平坦で、壁は底面からゆるやかに立ち上る。

出土遺物は1層から石鉢の破片、1～3層で炭化米が出土している。

3号土壇

平面形は略円形で大きさは長軸1m、短軸0.9である。

堆積土は木炭・焼土を含む粘土質の暗褐色土である。

壁は地山であり、壁高は50cmである。底面は皿状をしており壁は底面からゆるやかに立ち上る。

出土遺物は炭化米である。

2号土壙（ピット2）

1号土壙に切られており北側の1/2が残っている。

平面形は円形を基調とするものであり残存する軸長は0.8mである。

堆積土は木炭粒と灰色の粘土質を含む暗褐色土である。

壁は地山であり、壁高は40cmである。底面は皿状をしており、底面からゆるやかに立ち上る。

出土遺物は炭化米である。

4号・5号・6号土壙は長方形の土壙である。7号～15号土壙は楕円形の土壙であるが、7号～9号土壙は10～16号土壙に較べて長短軸の比が小さいといえる。4号～16号土壙からは出土遺物は見られない。

第2表 土壙計測表

| 番号 | 形態 | 長軸 | 短軸 | 深さ | 番号 | 形態 | 長軸 | 短軸 | 深さ |
|----|------|-------|-------|-------|----|------|-------|-------|-------|
| 4 | 長方形 | 1.25m | 0.8 m | 11 cm | 11 | 長楕円形 | 1.7 m | 0.6 m | 15 cm |
| 5 | 〃 | 1.2 | 0.9 | 21 | 12 | 〃 | 1.4 | 0.5 | 25 |
| 6 | 〃 | 1.4 | 0.7 | 15 | 13 | 〃 | 1.3 | 0.6 | 15 |
| 7 | 楕円形 | 1 | 0.75 | 50 | 14 | 〃 | 1.5 | 0.5 | 15 |
| 8 | 〃 | 1.05 | 0.9 | 32 | 15 | 〃 | 1 | 0.5 | |
| 9 | 〃 | 0.8 | 0.6 | 36 | 16 | | 1 | 0.65 | 20 |
| 10 | 長楕円形 | 2.2 | 1.35 | 19 | | | | | |

通路（門跡）

通路はB平場の南西部で2ヶ所確認されている。

1号通路

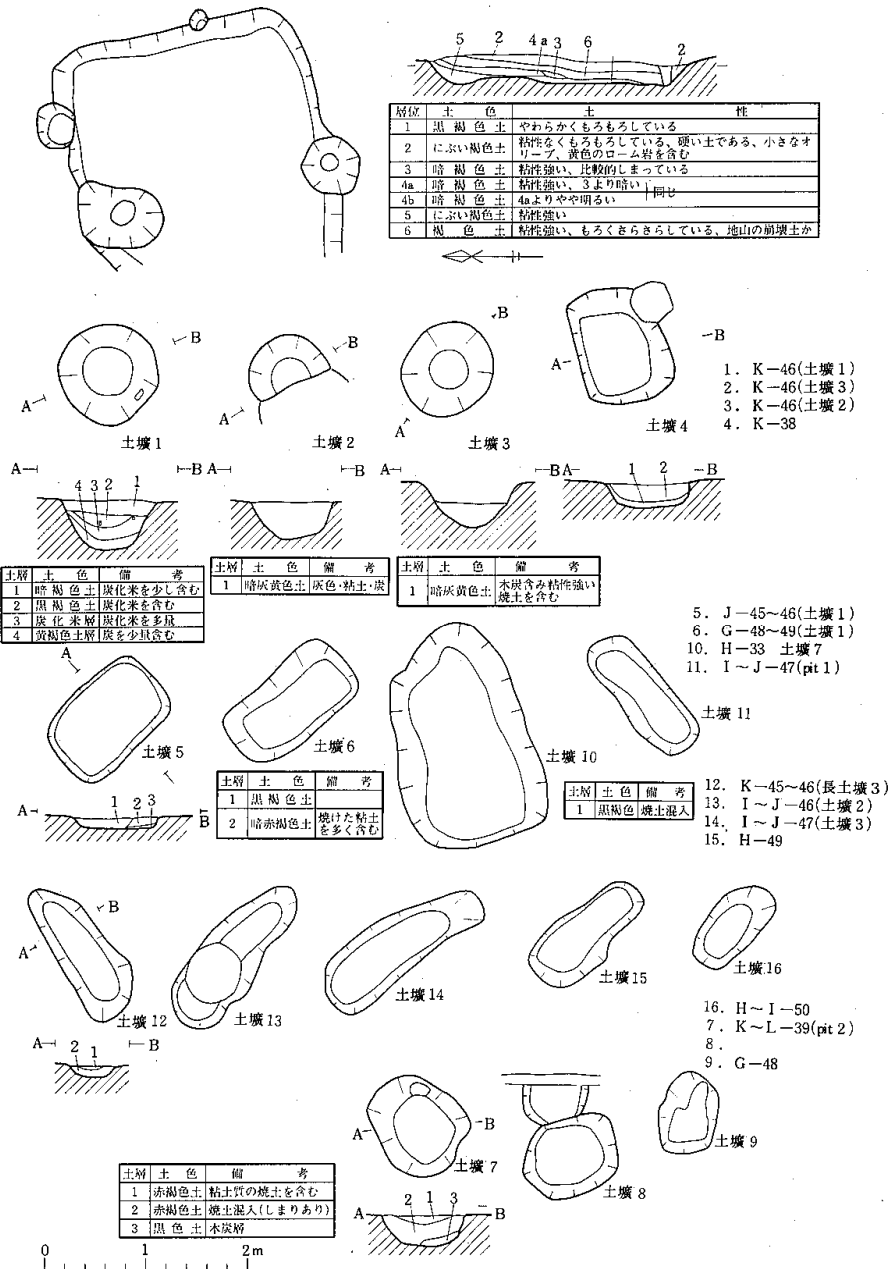
2号土壙の南端で土壙積土下から確認されており、土壙よりも古い遺構である。検出した遺構は空堀からB平場に続く地山を「┌」形に切り通した通路と12個の柱穴である。

通路は斜面を切り通したもので、斜面から東へ向って進み、途中で北へ直角に折れ曲って平場に通じる。右の壁は土壙積土、Ⅲ層・地山を壁として、左の壁は地山を壁としている。その平面形は「┌」形をした全長7mの掘り方をしている。掘り方の規模は上幅約3m、下幅約2mで高さは1mである（第12図）。

堆積土は9層認められ水平な堆積をしており、人為的に埋められたものである。堆積土は黒色土・暗褐色土・明褐色土が混入するものである。

通路の入口と平場側の壁沿いに2個1対の柱穴がみられる。その組合せからいずれも桁行1間×梁間1間となる建物跡が4棟考えられる。その配置は平場側にA号棟とB号棟が重複し、入口側にC号棟とD号棟が重複している。

A号棟とB号棟は桁行南列で柱穴の切り合いが認められることから桁行北列を共有した建て



第11図 堅穴・土塚 平面図・断面図

替が考えられA号棟が古く、C号棟とD号棟は柱穴の切り合いからC号棟が古いといえる。

A号棟は桁行1間(2m)×梁間1間(1.2m)で、B号棟は桁行1間(2m)×梁間1間(1m)で、C号棟は桁行1間(2m)×梁間1間(1.2m)で、D号棟は桁行1間(1.5m)×梁間1間(1.2m)であり、柱間寸法はほぼにかよっている。

通路に付随する遺構は左右の壁下にある溝である。右壁下にある溝はB号棟の南東隅柱穴付近からD号棟の南西隅柱穴までみられる。規模は長さ4mで、幅20~30cm、深さ10cmである。断面形は皿状をしている。左壁下にある溝はD号棟の西北隅の柱穴から西にのびて斜面で消滅する。規模は長さ1.5m、幅30~40cm、深さ5~10cmである。断面形は皿状をしている。

通路跡出土遺物は底面から青磁碗の底部(高台付)破片である。

第3表 通路1建物跡柱穴計測表

| 建物No. | PitNo. | P 1 | P 2 | P 3 | P 5 | 建物No. | PitNo. | P 7 | P 8 | P 9 | |
|-------|--------|---------|---------|---------|-------|-------|--------|---------|-------|-------|---------|
| A | 掘り方大きさ | 60×45 | 60×60 | 85×(80) | 90×65 | C | 掘り方大きさ | 20×(20) | 30×30 | 58×30 | |
| | 深さ | 56 | 61 | 56 | 59 | | 深さ | 15 | 38 | 12 | |
| | 平面形 | 楕円 | 方形 | 方形 | 方形 | | 平面形 | 方形 | 方形 | 長方形 | |
| 建物No. | PitNo. | P 5 | P 6 | | | 建物No. | PitNo. | P 10 | P 11 | P 12 | P 13 |
| B | 掘り方大きさ | 45×(45) | 60×(50) | | | D | 掘り方大きさ | 18×16 | 20×18 | 25×25 | (30)×25 |
| | 深さ | 10 | 58 | | | | 深さ | 10 | 32 | 30 | 15 |
| | 平面形 | 方形 | 方形 | | | | 平面形 | 円 | 円 | 円 | 方形 |

2号通路

1号通路の南側5mで検出された。地山面で確認された遺構である。検出した遺構は斜面からB平場に通じるやや左に湾曲した通路と門に相当する施設である。

通路は斜面を左にカーブするように切り通した全長4m掘り方となっている。左の壁は土壘積土、II層と地山を掘り込んで壁としている。掘り方の規模は上幅2.5~3m、下幅2~2.3m、深さ0.5mである(第13図)。

通路の壁沿いに2個1対の柱穴がみられる。その組合せから桁行1間、梁間1間の建物跡が2棟考えられる。その配置は平場側にE号棟、入口側にF号棟となっている。

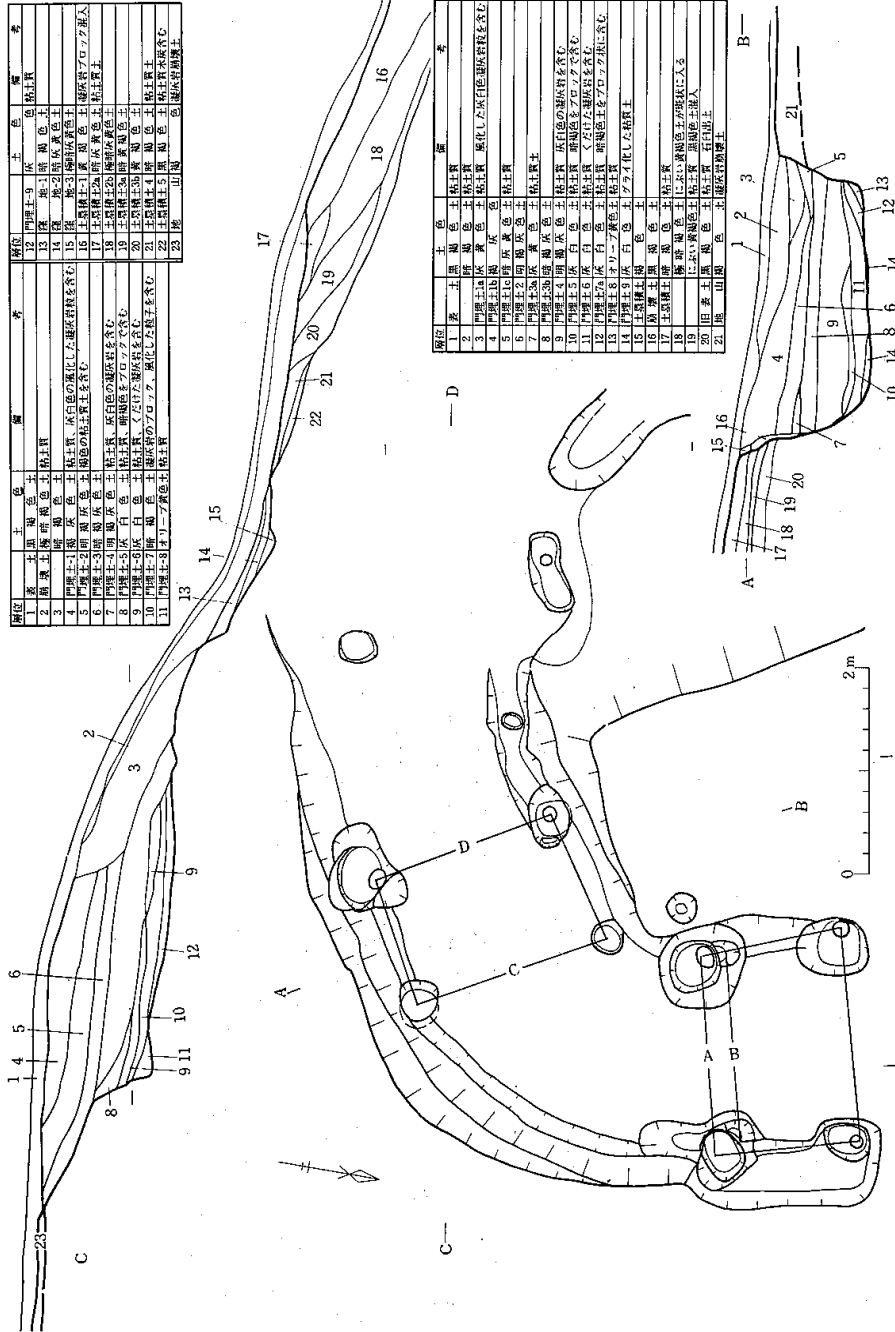
E号棟とF号棟は重複しており、E号棟南西隅の柱穴がF号棟南東隅の柱穴に切られているためE号棟が古い。E号棟は桁行1間(1.2m)×梁間1間(0.8m)で、F号棟は桁行1間(1.1m)×梁間1間(0.8m)である。

溝

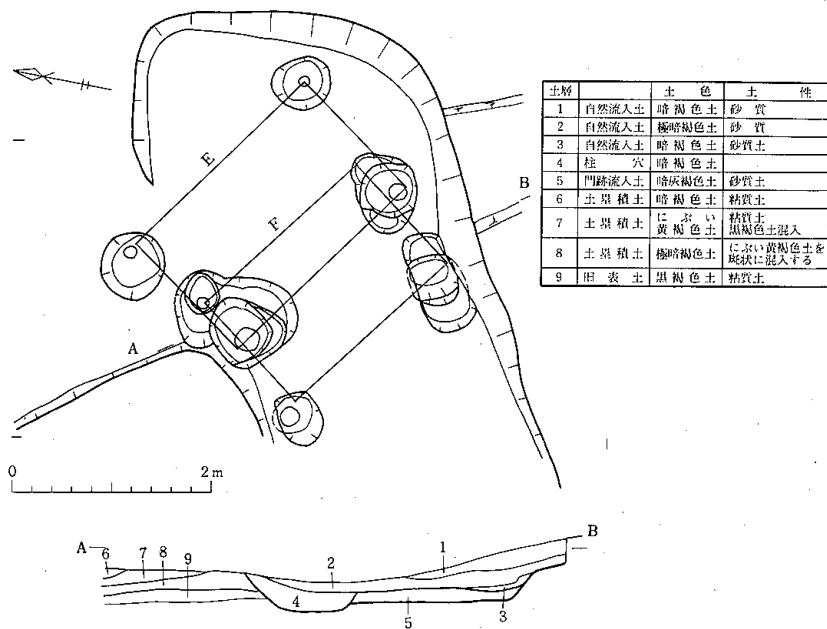
溝は2本発見されている(第10図)。

8号溝

平場の西辺から南辺にかけて「L」字形にめぐっている。西辺の北部で消滅する。8号棟・10号棟・11号棟・7号溝と重複している。柱穴が溝底面で確認されていること、7



第12図 1号通路 平面・断面図



第13図 2号通路平面・断面図

号溝を切っていることでいずれの遺構よりも新しい。

溝の長さは約41.5で西辺約25.5m、南辺約16mである。両辺の上幅は1m、南辺の上幅は1.5mである。堆積土は黒褐色土である。底面は平坦で、壁の立ち上りはゆるやかであり深さ約30cmである。

7号溝

平場西辺の中央付近から北へ約9mほどのびて東に直角に折れて約5mで立ち上る。形状としては「┌」字形をしている。

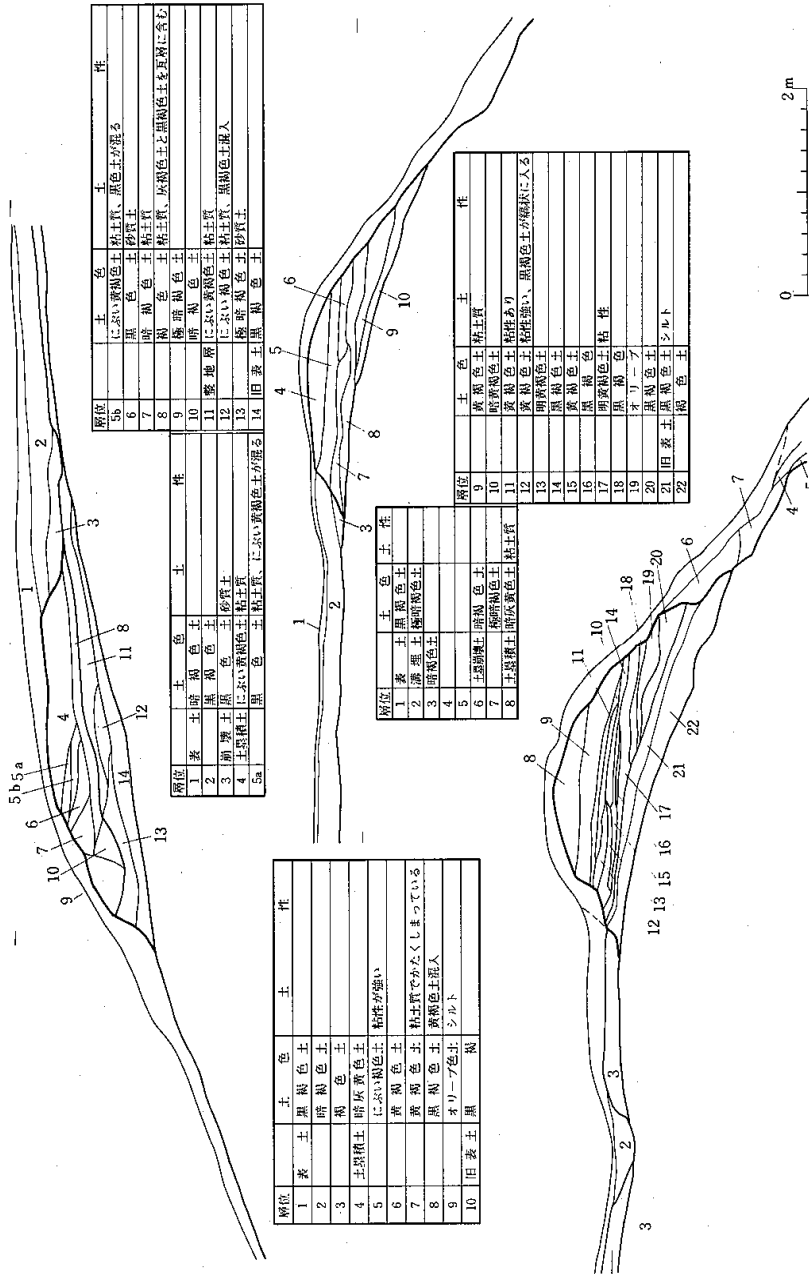
6号棟・7号棟・8号棟・8号溝と重複している。溝の堆積土が柱穴や溝に切られていることでいずれの遺構よりも古い。

溝の全長は14mで西辺の上幅は0.5~0.8m、北辺の上幅は約0.7mである。

土塁（2号土塁）

土塁は平場の西辺から北辺西側にみられる。北西付近は削平のため不明である。西辺は22m北辺は10m残っている（第14図）。

北辺は平場を造成した整地層上面に積土をして構築している積土の上部が削平されており、積土の下部が残っている。積土は黒褐色土・暗褐色土・凝灰岩混り褐色土などを外側から積んだ後に内側を積み上げている。その規模は基底幅約3.4m、残存高は約30cmである。



第14図 土層断面図

西辺はⅡ層上面に積土をして構築している。積土の上部がいくぶん削平されている。積土は暗褐色土・黒褐色土・凝灰岩混り褐色土などを交互に平行に積んでいる。その規模は基底幅約3m、高さ約50～70cmである。

また、西辺の南部で土塁下より通路跡（門跡）が確認されている。断面観察から、初期には通路（門跡）の左右に土塁が構築されていたが、後に人為的に通路を埋めて土塁を連続した状況を示している。

整地層

整地層は平場の北側周縁部分と中央部東側に見られる。

東側整地層－東側沢の部分に行なったものでその範囲は約200㎡である。整地は東側にむかって傾斜する沢のⅡ層上面に明褐色土・黄褐色土・暗褐色土などを上面が平坦になるように積んでいる。積土の方向はおおむね斜位であり、積土は12～15層認められる。

北側整地層－丘陵斜面の上端に明褐色土・暗褐色土などを2～3層に積み上げて平場の北縁部分を造成している。この整地層の部分に土塁を構築している。

南側下段平場（平場C）

上段平場の南東裾部から南側にあり、南北20m×東西15mの平場で面積は300㎡である。

表坪15cmで地山面となる。平場中央の東側は斜面のⅡ層上面に積土を行なって平坦面を確保している。遺構は掘立柱建物跡・溝・土塁などで地山面で確認した。

遺構の配置をみると平場の西辺に3号土塁が南北にのび、その内側に9号溝がみられる。平場の北側に掘立柱建物跡が4棟確認された。なお、平場の北東にかけて10号溝がみられ、平場の北側の区画となっている。

掘立柱建物跡

平場の北に2棟（C-1号棟・C-2号棟）、平場北東部に2棟（C-3号棟・C-4号棟）が重複して2ヶ所で検出された。

C-1号棟

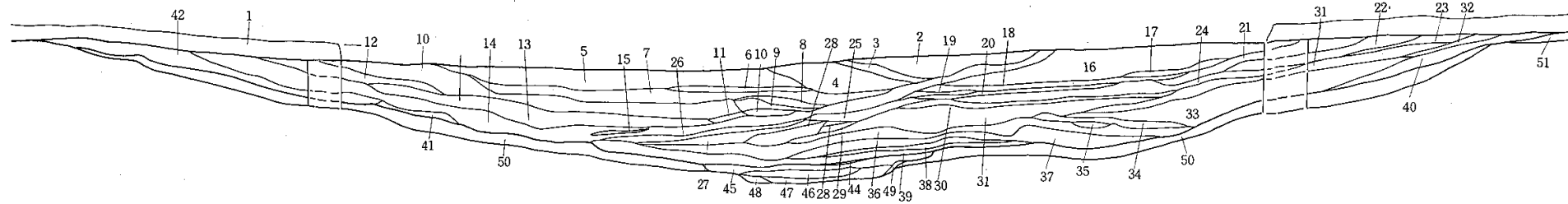
桁行3間（5m）、梁間2間（5m）の東西棟であり、棟方向はW-10°—Nである。桁行南側列の2個の柱穴と梁間西側列中間の柱穴は不明である。平面形は正方形に近い建物である。

C-2号棟と重複している。C-2号棟の柱穴に切られているのでC-2号棟より古い。桁行柱間寸法の北側列の平均値は1.68m（5.54尺）で、梁間柱間寸法の東側列の平均値は2.5m（8.25尺）である。

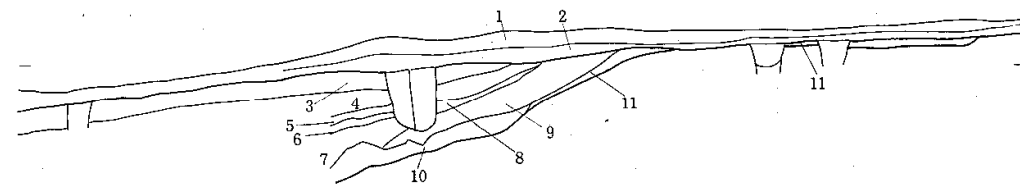
柱穴の掘り方は楕円形で40×30cmである。柱痕跡は円形で15～10cmである。

C-2号棟

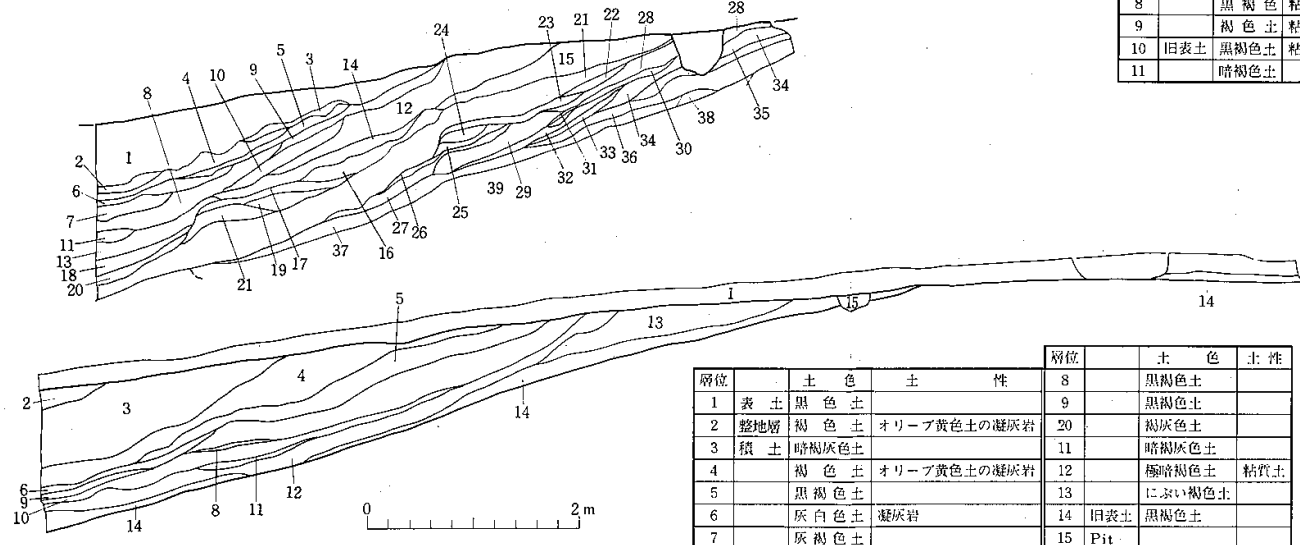
桁行2間（4.5m）、梁間1間（4m）の東西棟であり、西面に幅1mの廂と南面に幅0.8mの廂



| 層位 | 土色 | 土性・備考 | 層位 | 土色 | 土性・備考 | 層位 | 土色 | 土性・備考 | 層位 | 土色 | 土性・備考 |
|----|------------|--------------|----|------|---------------|----|------|-------------|----|-------|--------------------|
| 1 | 表土 暗褐色土 | | 14 | 暗褐色土 | 黄色土粒が混じる | 27 | 灰褐色土 | シルト、木炭粒が混じる | 40 | | |
| 2 | 整地層 におい褐色土 | | 15 | 黒褐色土 | 砂質シルト、木炭粒が混じる | 28 | 褐色土 | シルト、木炭粒が混じる | 41 | | |
| 3 | 積土 暗褐色土 | | 16 | 褐色土 | | 29 | 黒褐色土 | シルト、木炭粒が混じる | 42 | 黄褐色土 | |
| 4 | 褐色土 | かたくしまっている | 17 | 褐色土 | かたくしまっている | 30 | 褐色土 | | 43 | | |
| 5 | 褐色土 | 凝灰岩が混じる | 18 | 暗褐色土 | | 31 | 褐色土 | 黒色土が混じる | 44 | 土壌堆積土 | 黒褐色土 わずかに木炭・焼土が混じる |
| 6 | 褐色土 | 黒色土のブロックが混じる | 19 | 黒色土 | | 32 | | | 45 | 黒褐色土 | シルト、焼土が混じる |
| 7 | 暗褐色土 | | 20 | 褐色土 | | 33 | 褐色土 | 黒色土が混じる | 46 | 黒褐色土 | 焼土が混じる |
| 8 | 暗褐色土 | | 21 | 暗褐色土 | | 34 | 褐色土 | | 47 | 黒褐色土 | 木炭の層 |
| 9 | 褐色土 | 凝灰岩が混じる | 22 | 黒色土 | | 35 | 暗褐色土 | | 48 | 灰褐色土 | 木炭粒が混じる |
| 10 | 褐色土 | 黒色土が混じる | 23 | | | 36 | 褐色土 | 黒色土が混じる | 49 | 灰褐色土 | 木炭粒が混じる |
| 11 | 暗褐色土 | | 24 | 灰褐色土 | 木炭粒が混じる | 37 | 黒褐色土 | | 50 | 旧表土 | 褐色土 |
| 12 | におい黄褐色土 | | 25 | 暗褐色土 | | 38 | 暗褐色土 | 木炭粒が混じる | | | |
| 13 | 褐色土 | しまっている | 26 | 黒褐色土 | シルト、木炭粒が混じる | 39 | 褐色土 | 粘質土 | | | |



| 層位 | 色調 | 土性 |
|----|----------|---------------------------|
| 1 | 表土土 | 黒色土 |
| 2 | 暗褐色土 | |
| 3 | 整地層 灰黄色土 | 黒褐色が混る。かたくしまっている。 |
| 4 | 積土 黒褐色土 | 灰褐色の粘土がブロック状に入る。かたくしまっている |
| 5 | 灰褐色土 | 凝灰岩と黄褐色土が互層になる。 |
| 6 | 黒褐色土 | 粘質土、灰褐色が混じる。 |
| 7 | 褐灰色 | 粘質土、黒褐色が混じる。 |
| 8 | 黒褐色 | 粘質土 |
| 9 | 褐色土 | 粘質土 |
| 10 | 旧表土 黒褐色土 | 粘質土 |
| 11 | 暗褐色土 | |



| 層位 | 土色 | 土性 | 層位 | 土色 | 土性 |
|----|---------|------------|----|----------|-----|
| 1 | 表土 黒色土 | | 8 | 黒褐色土 | |
| 2 | 整地層 褐色土 | オリブ黄色土の凝灰岩 | 9 | 黒褐色土 | |
| 3 | 積土 暗褐色土 | | 20 | 褐灰色土 | |
| 4 | 褐色土 | オリブ黄色土の凝灰岩 | 11 | 暗褐色土 | |
| 5 | 黒褐色土 | | 12 | 極暗褐色土 | 粘質土 |
| 6 | 灰白色土 | 凝灰岩 | 13 | におい褐色土 | |
| 7 | 灰褐色土 | | 14 | 旧表土 黒褐色土 | |
| | | | 15 | Pit | |

| 層位 | 土色 | 土性 | 層位 | 土色 | 土性 |
|----|---------|---------------|----|----------|---------------|
| 1 | 整地層 褐色土 | 黄色土のブロックが混じる | 21 | 灰褐色土 | 木炭粒が混じる |
| 2 | 積土 褐灰色土 | | 22 | 褐色土 | |
| 3 | 暗褐色土 | | 23 | 整地層 灰褐色土 | |
| 4 | 灰白色土 | | 24 | 積土 黒褐色土 | 木炭粒が混じる |
| 5 | オリブ褐色土 | | 25 | 褐色土 | かたくしまっている |
| 6 | 褐色土 | 白色の粒子が混じる | 26 | 褐色土 | |
| 7 | 褐色土 | | 27 | 浅黄色土 | 凝灰岩の |
| 8 | 褐色土 | 灰褐色土のブロックが混じる | 28 | におい褐色土 | 粘性がある |
| 9 | 灰褐色土 | 粘質土 | 29 | におい褐色土 | 暗褐色の粒子が混じる |
| 10 | 褐色土 | | 30 | 灰褐色土 | |
| 11 | 灰褐色土 | | 31 | 褐色土 | ブロック |
| 12 | 褐色土 | かたくしまっている | 32 | 黒褐色土 | 木炭の粒子が混じる |
| 13 | 灰褐色土 | 褐色土のブロックが混じる | 33 | 褐色土 | 粘性がある |
| 14 | 褐色土 | 灰白色土の粒子が混じる | 34 | 褐色土 | 暗褐色土の粒子が混じる |
| 15 | 褐色土 | 凝灰岩の小礫が混じる | 35 | におい褐色土 | 粘質土 |
| 16 | 褐色土 | | 36 | 暗褐色土 | 凝灰岩の粒子が混じる |
| 17 | 灰褐色土 | | 37 | 褐色土 | シルト、かたくしまっている |
| 18 | 灰褐色土 | | 38 | 黒褐色土 | |
| 19 | 淡黄色土 | 粘質土 | 39 | 黒褐色土 | 焼土が混じる |
| 20 | 灰褐色土 | 粘質土 | 40 | | |

第15図 整地層断面図

がつく。棟方向は $W-10^{\circ}-N$ である。西側廂の柱列の中間部分に柱穴がみられる。

桁行柱間寸法の平均値は2.25m (7.42 尺) で、梁間柱間寸法は4 m (13.2 尺) である。

柱穴の掘り方は楕円形である。身舎の柱穴が大きく廂の柱穴が小さい。大きい柱穴は $50 \times 40\text{cm}$ で、小さい柱穴は $30 \times 20\text{cm}$ である。

C-3号棟

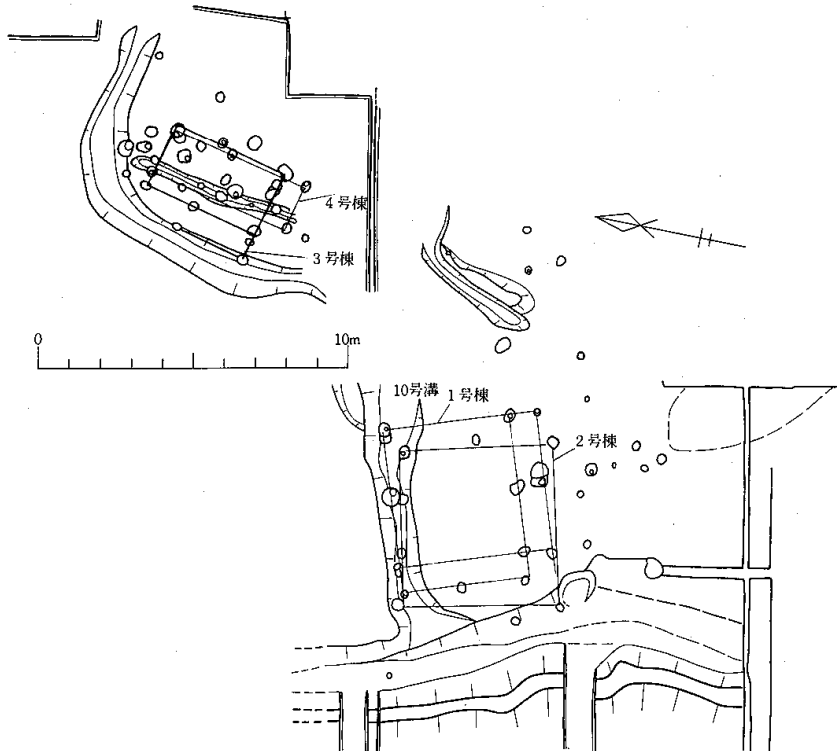
桁行2間 (3.8m)、梁間1間 (1.5m) の南北棟であり、南面に幅 0.8mの廂がつく。棟方向は $N-15^{\circ}-E$ である。

C-4号棟と重複しているが、C-4号棟の柱穴によって切られているためC-4号棟より古い。

桁行の柱間寸法は西列での平均値は2.3m (7.59 尺) である。

柱穴の掘り方は楕円形であり、大きさは $40 \times 30\text{cm}$ である。廂の掘方埋土から古瀬戸壺底部が出土している。

C-4号棟



第16図 南側下段平場掘立柱建物跡

桁行 2 間 (3.8m)、梁間 1 間 (2m) の南北棟であり、西面に幅 1m の廂がつく。棟方向は $N-15^{\circ}-E$ である。

C-3 号棟の柱穴を切っていることで C-3 号棟より新しい。

桁行の柱間寸法は 1.6m+2.4m で柱の位置が中心からずれている。

柱穴の掘り方は楕円形であるが大きさは様々である。大きい柱穴は 50×40cm で、小さい柱穴は 30×20cm である。

土塁 (3号土塁)

土塁は上段平場南側土塁から続くもので、平場西辺に認められる。土塁の総長は 45m である。土塁の構築方法をみると、北側ではⅡ層を削平して積み土を行ない、中央から南側ではⅡ層上面に積み土を行なっている。積み土は地点によって積み上げの順序は異なるが暗褐色土・凝灰岩混り褐色土・にぶい黄褐色土・黒褐色土などがみられる。その積み方をみると平行もしくは内側から外側に斜位に積みあげている。中央付近から南側では土塁上半が削平されており、本来の形態が失われている。規模についてみると、北側の残りのよいところでは基底幅 3m、高さ 0.8m で、南側では基底幅は 2.5~3m、残存高は 0.4~0.6m である。

溝

溝は 3 号土塁の内側に 9 号溝、平場北側から北東方向に巡る 10 号溝・11 号溝がみられる。この他に 10 号・11 号の南側に 2 条の短い溝がみられる。

9号溝

平場西辺の 3 号土塁の内側にあり、A 平場の南斜面から平場南端までのびていく。10 号溝と直交するがその新旧関係は不明である。


溝の長さは全長 45m で上幅は 1.5~2m である。堆積土は墨褐色土・褐色土などが自然流入している。底面は平坦な部分と「U」字状の部分がみられる。西側壁は土塁積土、東側壁が地山となっており、その立ち上りはゆるやかな部分と垂直に立つ部分がみられる。深さは 15~30cm である。

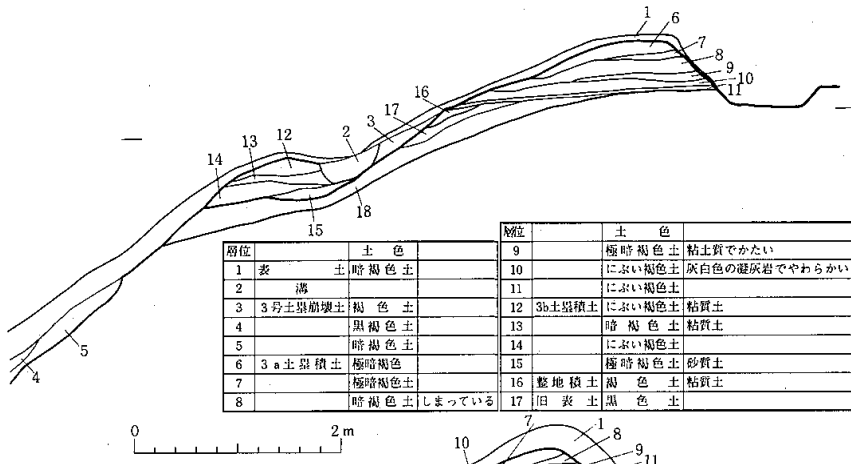
10号溝

平場北側にあり東西方向にのびる。西端は 9 号溝と直交するが新旧関係は不明である。C-1 号棟・C-2 号棟と重複する。2 棟の北側列の柱穴が溝底面で確認されているため各棟の柱穴より新しい。

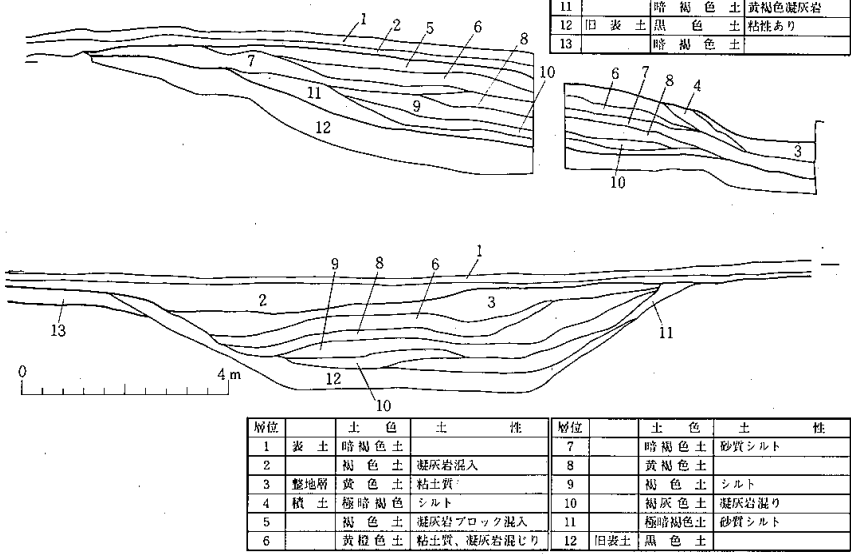
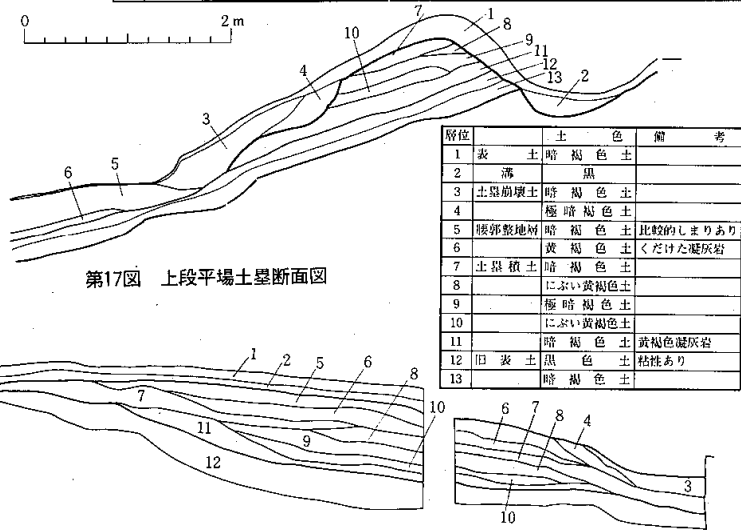
溝の長さは 8m 確認され、上幅は 1~1.5m である。堆積土は褐色土・黒色土が自然流入している。地山を壁としており、底面は皿状をしてゆるやかに立ち上る。深さは約 40cm である。

11号溝

平場北東にあり、A 平場の裾を「」字形にめぐっている。南端と東端は斜面に開いていく。C-3 号棟の西列柱穴と重複する。溝の側壁面で柱穴が確認されているため C-3 号棟より新



第17図 上段平場土層断面図



第18図 南側下段整地層断面図

しいといえる。

溝の長さは13mあり、西辺は8m、北辺は5mである。上幅は1～1.5mである。堆積土は黒色土・褐色土が自然流入している。底面は皿状をしており、壁はゆるやかに立ち上る。深さは約15cmである。

整地層

整地層は平場の東側中央付近と西側北半部に認められる。東側の整地層は沢のⅡ層上面に積土を行ない扇状の平坦面を造成している。積土は明褐色土・黒褐色土などが12層認められ比較的しまりがある。積土の方向はおおむね斜位であり、整地の上面は東にやや傾斜している。

整地層下のⅡ層中から土師器片が出土している。

西側の整地層は西斜面に暗褐色土凝灰岩混り・暗褐色土・黒褐色土などを積みあげて幅3mの平坦な面を構築している。

空堀・土塁

B平場の西・東斜面に土塁と併行した空堀がみられる。北側は斜面が崩壊しているため連続していない。確認できる堀の長さは西70m、北東で18m、南東で10mであるが、本来は西と北東部が連続していたものと思われる。

空堀

空堀は地山を掘り込んでおり上幅は3.2～3.5mである。深さは1.5～1mである。堆積土、平場側から流入しており、黄褐色土・暗褐色土・黒褐色土などがみられる。深さは北側より西側南側が深く堆積土も西側が厚い。

壁は地山であり、底面は平坦でゆるやかに立ち上がる。

出土遺物

堆積土中から中世陶器（口縁部・体部）・青磁・白磁・石臼・砥石が出土している。

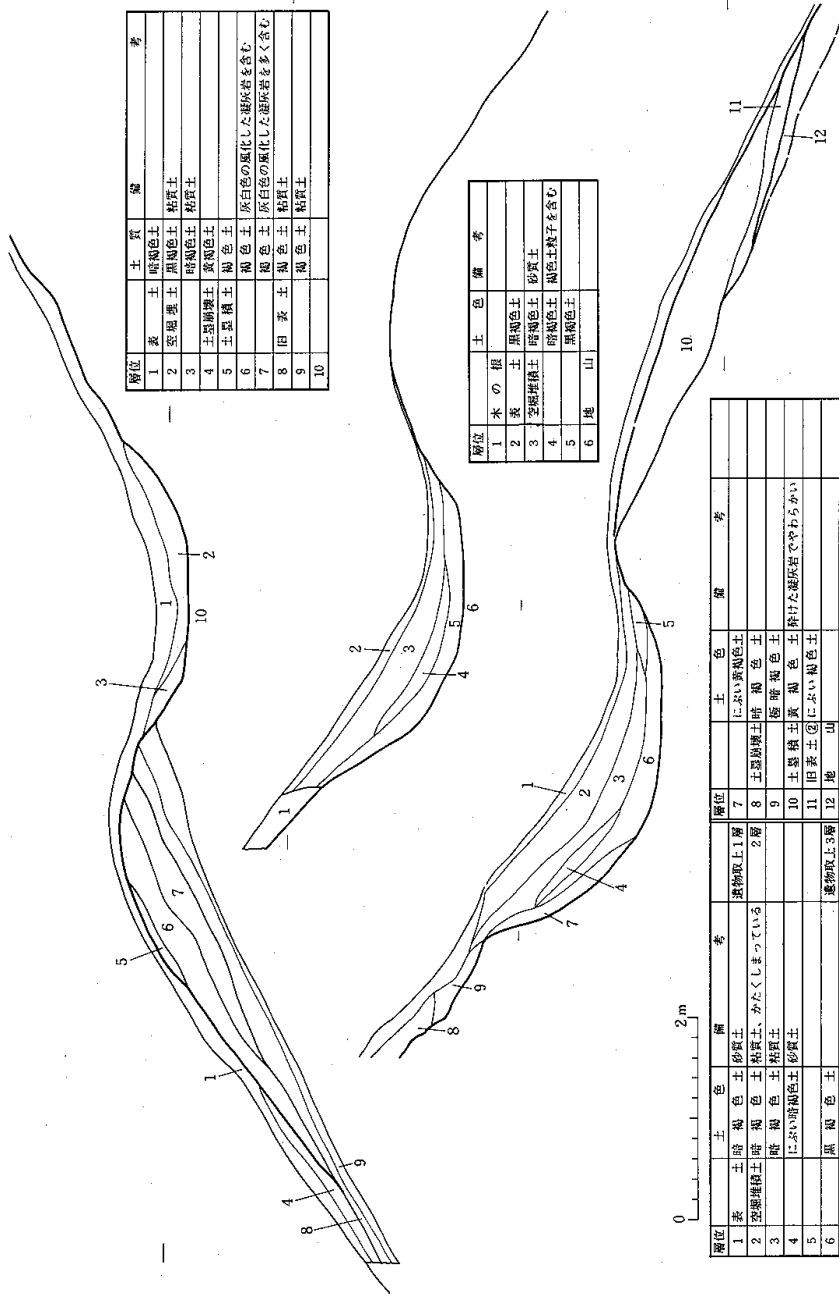
土塁（4号土塁）

土塁は地山の底面から0.5～1mの高さがある。幅は北西部で3.5m、北側で5mである。構築をみると斜面のⅢ層上面に積土を行なっている部分（北側と南西部）と地山を削り出しただけの部分（北西部）がみられる。積み土はにぶい黄褐色土、暗褐色土、黒褐色土などである。

腰郭

A平場とC平場の西側斜面の標高29m付近に、半月状の平場が南北に連続してみられる（腰郭1、腰郭2）。その境には東西に張り出した土塁状の高まりがあり、平場の区画となっている。平場の規模は南北長25m、東西幅10mである。両平場の規模はほぼ同じであるが、北側の平場の方がやや標高が高い。

遺構は南側平場の整地上面でピットが3個検出されている。ピットは円形でその大きさは20



| 階位 | 土質 | 備考 |
|----|----|----------------------|
| 1 | 表土 | 暗褐色土 |
| 2 | 空層 | 暗褐色土 粘質土 |
| 3 | 土層 | 暗褐色土 粘質土 |
| 4 | 土層 | 黄褐色土 |
| 5 | 土層 | 褐色土 |
| 6 | 土層 | 灰白色の風化した凝灰岩を含む |
| 7 | 土層 | 褐色土 灰白色の風化した凝灰岩を多く含む |
| 8 | 土層 | 褐色土 粘質土 |
| 9 | 土層 | 褐色土 粘質土 |
| 10 | 土層 | 褐色土 粘質土 |

| 階位 | 土色 | 備考 |
|----|-----|----------|
| 1 | 水の根 | |
| 2 | 表土 | 暗褐色土 |
| 3 | 空層 | 暗褐色土 粘質土 |
| 4 | 土層 | 暗褐色土 粘質土 |
| 5 | 土層 | 暗褐色土 |
| 6 | 土層 | 暗褐色土 |

| 階位 | 土色 | 備考 |
|----|----|----------|
| 1 | 表土 | 暗褐色土 |
| 2 | 空層 | 暗褐色土 粘質土 |
| 3 | 土層 | 暗褐色土 粘質土 |
| 4 | 土層 | 暗褐色土 粘質土 |
| 5 | 土層 | 暗褐色土 |
| 6 | 土層 | 暗褐色土 |
| 7 | 土層 | 暗褐色土 |
| 8 | 土層 | 暗褐色土 |
| 9 | 土層 | 暗褐色土 |
| 10 | 土層 | 暗褐色土 |
| 11 | 土層 | 暗褐色土 |
| 12 | 土層 | 暗褐色土 |

第19図 空堀・土塁断面図

cmである。深さはピット1が30cmで、2・3が約5cmである。

平場は西へ急に落ち込む斜面の第Ⅲ層上面に積土で整地を行なっている。積土は斜位方向に凝灰岩混り褐色土や暗褐色土などである。

出土遺物は南側の腰郭2の平場上面から永楽通宝が出土している。

2. 発見された遺物とその年代

出土遺物には陶磁器、土師質土器、刀子、古銭、釘、砥石、石臼、石鉢などがある。

遺物は遺構から出土しているものは少なく、Ⅰ～Ⅱ層から発見されているものが多い。そのため、ここでは種類ごとに説明を加えていきたい。

A. 陶磁器

陶器には中世の無釉陶器と施釉陶器があり、磁器には青磁、白磁がある。これらの中で実測図、拓本を作成できたものは約40点である。

無釉陶器

無釉陶器の器種には甕・壺・鉢がある。

(甕)

口縁部 (第20図1～5)

1は口縁部から肩部にかけての破片で、口縁部に縁帯がめぐり、口縁部は折り返えされ、断面形は「T」字を横にした形態をしている。外面はケズリの後にナデ調整がされ内面はナデ調整されており肩部に成形時の指痕がのこる。色調は赤褐色である。胎土は赤褐色で砂を含み硬い。

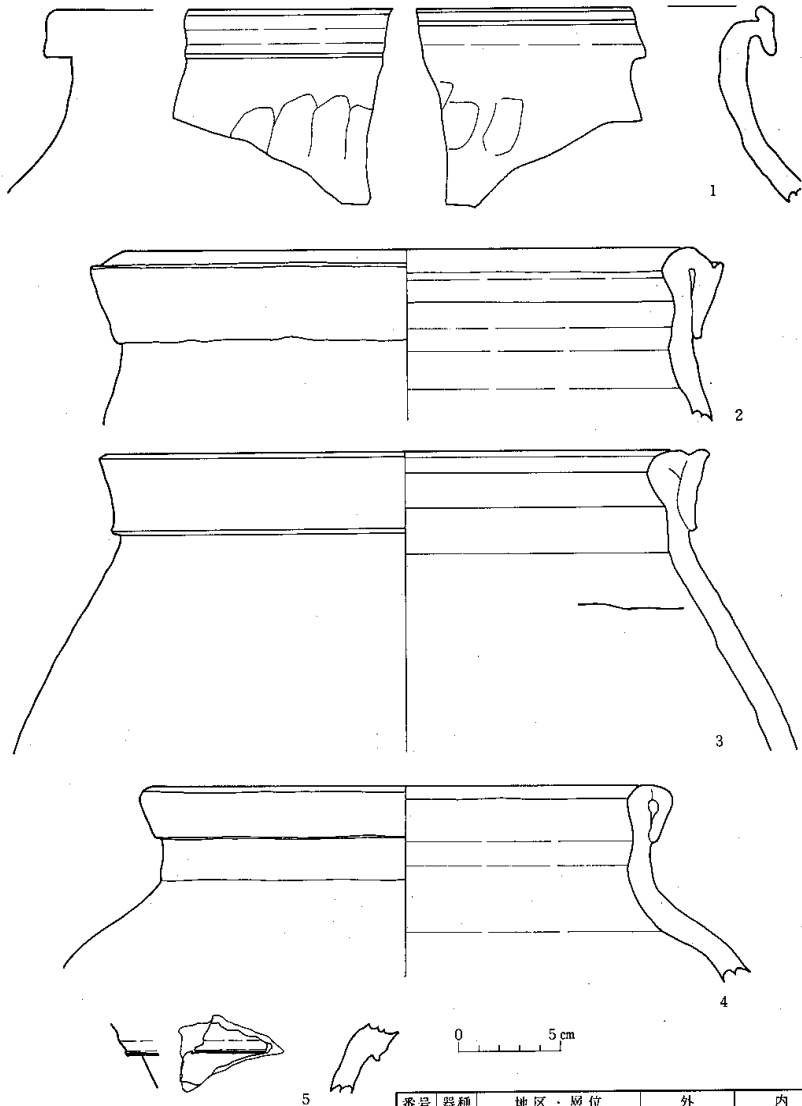
2～4は折り返しによる幅広い口縁帯がある。2・3は折り返えしのため口縁が直接頸部に接着し口縁帯の下部がすぐに肩部につながる形態である。2の口縁上端に接合による沈線がめぐり、内外面ともにナデ調整がされ、内面には粘土紐巻上げ痕が残る。色調は赤褐色土である。胎土は灰色で砂を含み硬い。3は空堀出土の口縁部とB平場のⅡ層出土の体部が接合している。4は口縁上部は丸味がある。内外面ともにナデ調整がされ、内面には整形時の指痕が残る。外面の色調は暗赤褐色で一部に黒色と灰白色がまだら状になった光沢のある自然釉がみられる。胎土は灰色で砂を含み硬い。同一個体と思われる体部破片が北側下段平場で出土している。

5は口縁上端が破損のため形態は不明であるが2～4と同様なつくり方と思われる。空堀出土の口縁部とB平場のⅡ層出土の体部が接合している。

底部 (第21図4～8)

4～5は揚げ底ぎみで底部端がわずかに外側に張り出した後に外傾して立ち上る。

6～8は平底で底部からそのまま外傾する。6・7は底部端がわずかに外側に張り出した後に外傾して立ち上る。7は上段平場の4号溝出土の破片と下段平場の破片が接合している。



| 番号 | 器種 | 地区・層位 | 外 | 内 |
|----|----|--|--------|--------|
| 1 | 甕 | M-43-2 | ナデーケズリ | ナデーオサエ |
| 2 | 〃 | 下段(斜面)-1 | 自然釉-ナデ | ナデーオサエ |
| 3 | 〃 | P-46-3 (空堀) H-44-1・K-45-3 M-43-2 | ナデーハケメ | ナデーオサエ |
| 4 | 〃 | M-41-2・O-47-2 L-40-2 | 自然釉-ナデ | ナデーオサエ |
| 5 | 〃 | M-43-2 | ナデーケズリ | ナデーオサエ |

第20図 中世陶器(甕)

(壺)

1・2は口縁部が折りがえされ玉縁状になっている。1は頸部が直立し、上端は平である。内外面ともに横ナデ調整されている。色調は暗灰色で灰白色は自然釉がかかっている。胎土は砂を多く含み灰白色で硬い。

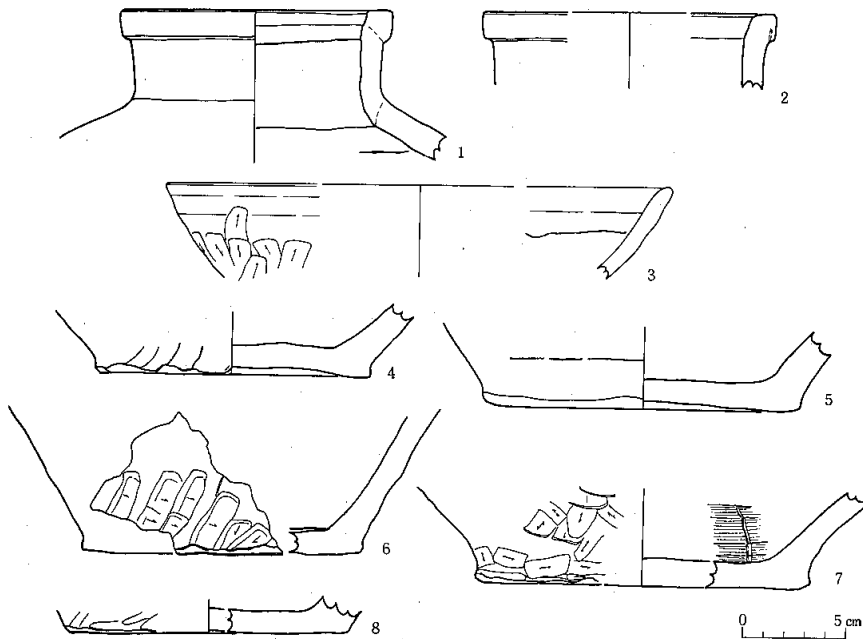
(鉢)

3は体部から口縁にかけての破片である。口縁部はやや平であり、外面にヘラケズリがみられ内面に紐巻き上げの痕跡が残っている。使用痕としては内面の下部に擦痕がみられる。

この他に甕体部破片が出土している。これらの多くはB平場のⅡ層中より出土している。その出土地区については第6表に示した。

無釉陶器の年代

甕:第20図-1のような形態のものは観音沢遺跡で、2~4のような形態のものは御所館、



| 番号 | 器種 | 地区・層位 | 外 | 内 |
|----|----|---|--------|----|
| 1 | 壺 | G-44-2・M-41-2・H-49-1 | | |
| 2 | 〃 | K-43-1 | | |
| 3 | 鉢 | 下段平場 | ケズリ・ナデ | ナデ |
| 4 | 甕 | H-44-2・J-48-2・N-47-1 | ケズリ | ナデ |
| 5 | 〃 | G-45・O-46-2・M-41-2 H-32-溝(3)・上段平場西斜面 | ケズリ | ナデ |
| 6 | 〃 | H-44-2・I-44-2 | ケズリ | ナデ |
| 7 | 〃 | L-38-2 | ケズリ | ナデ |
| 8 | 〃 | L-40-2 | ケズリ | ナデ |

第21図 中世陶器(壺・鉢・底部)

佐沼城で出土例が認められる。しかし、県内の窯跡からの発見例がないため県内における産地、年代について特定できない。県外でこのような口縁形態をした甕は常滑窯に類似品が認められる。この中で1は榑崎氏の常滑窯の編年では第Ⅲ～第Ⅳ段階とされる口縁に類似しており、その時期は鎌倉中頃～南北朝頃（14世紀）と考えられている。2～4は同氏の編年では第4～第5段階とされる口縁に類似しており、その時期は南北朝後半～室町時代中頃（15世紀中～）と考えられている。このことから甕は口縁形態的から常滑系のものと考えられ、その年代に1は14世紀頃、2～4は15世紀中頃としておきたい。体部・底部破片は、これらの1部と思われ14世紀～15世紀中頃の間として考えておきたい。

壺：玉縁をした壺は県内では発見されていない、常滑産の壺に類似品がみられる。これも甕と同様に榑崎氏の編年でみると第3～4段階とされる壺であり、年代は15世紀頃のものとしておきたい。

鉢：筋目の施されない播鉢は鎌倉中期～室町後半までみられるものであり、特に時期を決定できる資料ではない。

施釉陶器

施釉陶器は深皿、塀、小皿、梅瓶が出土している（第22図）。

塀

1は口縁部破片である。口縁部上半がややくびれてゆるやかな段をもち、口縁端がやや丸味がある。釉の色は赤褐色であり、胎土は灰白色である。

2は底部から体部にかけての破片である。底部と体部の間がくびれて稜がみられる。外面の体部下半がヘラケズリされている。高台部は削り出しによるものでやや内傾する。釉は内面と体部外面にみられ、釉の色は淡い緑色である。胎土は灰白色である。

深 皿

3は体部から口縁部にかけての破片である。体部から口縁部に直線的に開くもので口縁内部に突帯がめぐる。外面にクロ調整痕がみられ、内面は平滑である。内外とも体部の上半に釉がみられ釉の色はオリーブ黄色～浅黄色であるが光沢はなくザラザラしている。体部下半は内外面とも釉がみられず灰色である。胎土は灰白色で硬い。B-5号棟、B-7号棟の柱穴掘方埋土から出土している。

小 皿

4～7は体部から口縁部にかけての破片である。4は体部から口縁部にかけて直線的に立ち上り、口縁端部がわずかに外反する口縁内面に釉がみられ釉の色は褐色である。5～7は体部から口縁にかけてやや弯曲して立ち上り口縁上端は丸味がある。釉の色は5～6は白色であり貫入がある。7は灰オリーブである。

6、7は底部から体部破片である。いずれも底部からややふくらみをもって立ち上るものである。底部には糸切離しの痕跡がみられる。6は外面の体部下半まで釉がみられ、釉の色は黄緑である。7は内外面に釉がみられ、釉の色は暗い赤味茶である。

施釉陶器の年代：茶碗1・2は形態的に天目茶碗と呼ばれるものであり瀬戸産の天目茶碗に類似する。深皿は鉢に近い形態であり、このような口縁部形態をもつものは瀬戸窯の中でも山田八幡窯・小長憎窯産とされる鉢に類似する。茶碗・深皿とも器形、釉の色などから古瀬戸と考えられているものに類似していることから時期は井上喜久男氏の編年でIV～V段階の15世紀頃と考えられる。梅瓶は器形が不明であるため時期決定はむずかしいが、底部の形が類似する点で古瀬戸の梅瓶の最終段階である15世紀頃と思われる。

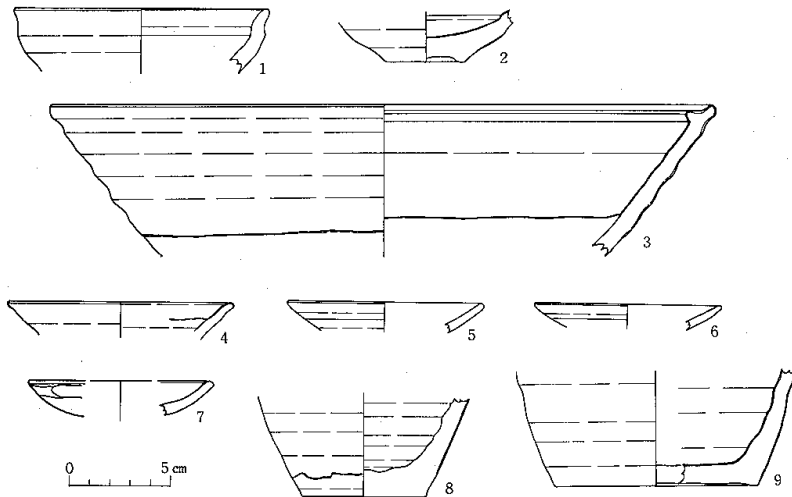
青磁

(坑)

口縁部、体部、底部の破片が出土している。

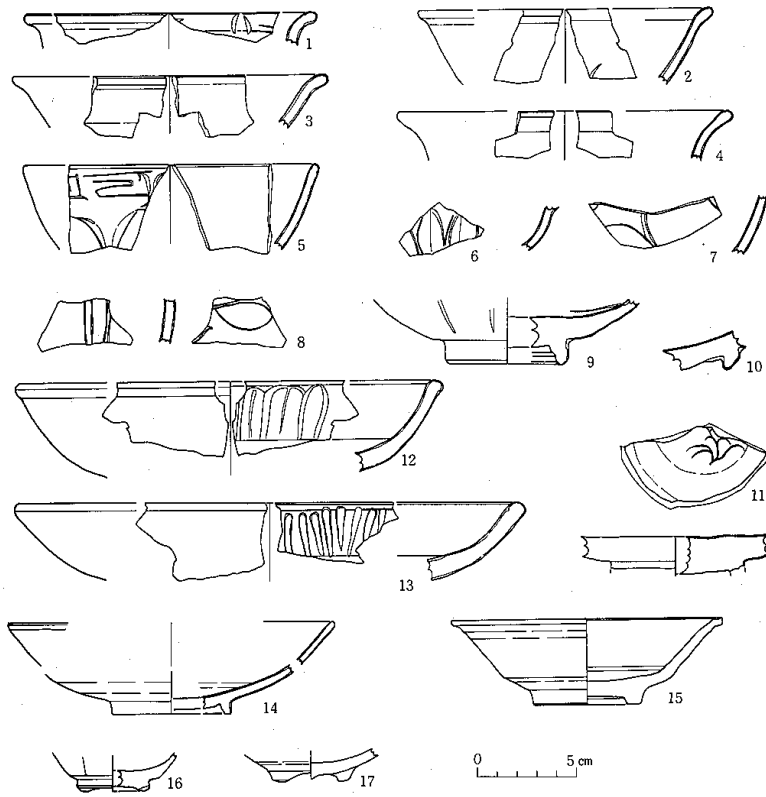
口縁部、体部（第23図1～8）

1～4は体部から内湾して立ち上り口縁部が外反する器形である。1は内面に篋書きによる蓮弁と草文がみられる。2はみこみ部分に篋書きによる草文がみられるものである。3・4は



| 番号 | 器種 | 地区・層位 | 番号 | 器種 | 地区・層位 |
|----|--------|--|----|----|---------------|
| 1 | 茶碗(口縁) | I-30-2 (A半場) | 4 | 小皿 | K-49-2 |
| 2 | 茶碗(底部) | H-45-2 | 5 | 〃 | G-42-2 |
| 3 | 深皿(口縁) | K-42-2・K-43-1・2 K-44-2・L-44-1・2 L-41-3・L-42-2 K-42-Pit1 K-43-44-Pit2a K-43-44-Pit2b AD-21 | 6 | 〃 | H-25 |
| | | | 7 | 〃 | G-44-2・J-44-2 |
| | | | 8 | 〃 | E-26Pit1 |
| | | | 9 | 〃 | H-21-2 |
| | | | | | |

第22図 施釉陶器



| 番号 | 器種 | 地区・層位 | |
|----|-------|-------------------------|--------------|
| 1 | 碗(青磁) | G-48 pit 18 | 灰味黄緑 |
| 2 | 碗(青磁) | J-50-2 | 灰味茶利 |
| 3 | 碗(青磁) | K-44-2 | うすオリーブ |
| 4 | 碗(青磁) | N-44-2 L-44-1 | 灰味茶利 |
| 5 | 碗(青磁) | I-33-2 | 灰味黄緑より明るい |
| 6 | ◇ | 平B | 灰味黄緑 |
| 7 | ◇ | 平A | 灰味黄緑より明るい |
| 8 | ◇ | J-45-3 | 灰味オリーブ |
| 9 | ◇ | K-38-2 | うすいオリーブ |
| 10 | ◇ | L-42-1 I-44 pit 9 | 灰味黄緑よりやや暗い |
| 11 | ◇ | G-46-3 | 灰味茶利 |
| 12 | 皿(青磁) | K-42-1 H-41-2 | 灰味茶利 |
| 13 | | | 灰味黄緑 |
| 14 | 碗(白磁) | G-40-2 北斜面 A D-26 | 明るいオリーブ灰 122 |
| 15 | ◇(白磁) | F-21-2 G-24-2 | オリーブ灰 |
| 16 | ◇(白磁) | L-45-2 | 明るいオリーブ灰 122 |
| 17 | ◇(白磁) | K-44-3 | 緑味白 129 |

第23図 青磁・白磁

文様がたい。5は体部から口縁にかけて内弯して立ち上り口縁端がやや丸味がある。外面の口縁に篋書きの雷文をめぐらし、体部に幅の広い鎬のない蓮弁文を同じ手法で刻んでいる。

6～8は体部破片である。6は体部が内弯し口縁部が外反する部分まで残るもので外面に明瞭な鎬のある蓮弁文がある。7は外面に篋書による蓮弁の輪郭線の一部がみられる。8は外面に線刻による蓮弁の輪郭の一部がみられ、内面には草文が描かれる。

底部

9～11は高台部の破片である。9は外面に篋書きによる蓮弁の輪郭線の一部がみられる。11はみこみに篋書きによる花文がみられる。

(皿)

口縁部破片が出土している。

12は体部がやや丸味をもって立ち上り、口縁部が玉縁状をしている。内面に太い剣先形鎬蓮弁文がみられる。13は体部がやや丸味をもって立ち上り、口縁端に丸味がある。内面に太く浅い沈線を菊花状にめぐらしている。

青磁の年代

これらの青磁はいずれも中国産のものである。この中で鎬蓮弁文の明瞭な体部破片6が元末～明初期(14世紀)頃のもの、篋によって蓮弁文を描いた文様のある壙1や壙体部破片の蓮弁文のある7・8が明の竜泉窯(15～16世紀)であり、雷文帯と蓮弁文の組み合わせる壙5(雷文帯蓮花文壙)は大宰府などでみられ14世紀～15世紀である。

剣先形蓮弁文のある皿11は15世紀後半で菊花状の蓮弁文のある皿には15～16世紀とされるものである。

白 磁

(壙)

口縁部～体部破片が出土している(第23図14～17)。

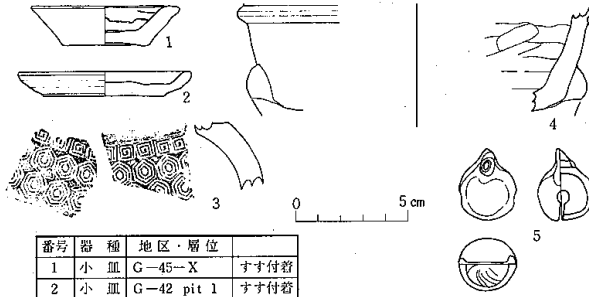
14は底部から体部にかけて弯曲して立ち上る。底部は削り出しの高台である。14は胎土と釉の状態から1と同一個体の口縁部と思われる。口縁の周辺は口禿げとなっている。

15は体部下半の稜をさかいにして底部から外傾して立ち上り、口縁端が小さく折れる。内面のみこみの部分に段がみられる。口縁の内側に沈線がめぐる。底部には削出しの高台がつくものである。

16は体部下端の稜をさきにして底部から体部に直角ぎみに立ち上っていく切子壙である。高台部は割高台になっている。

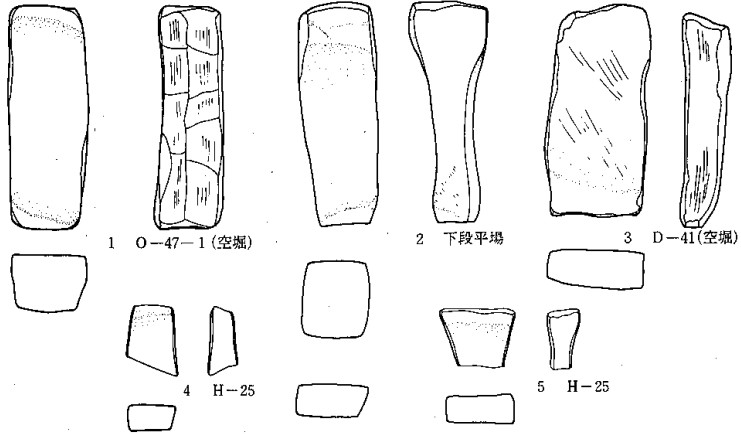
17～18は底部からゆるやかに立ち上るものである。高台部は割高台になっている。

白磁の年代

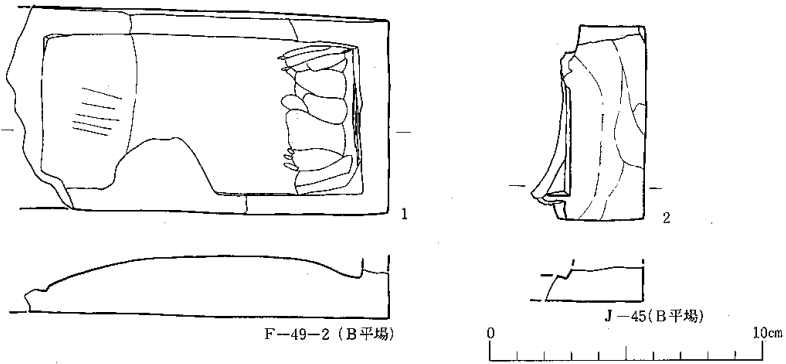


| 番号 | 器種 | 地区・層位 | |
|----|----|------------|------|
| 1 | 小皿 | G-45-X | すず付着 |
| 2 | 小皿 | G-42 pit 1 | すず付着 |
| 3 | 火鉢 | M-41-2 | |
| 4 | 火鉢 | 1号門埋土 | |
| 5 | 土鈴 | 北下段平場 | |

第24図 土師質土器・土鈴



第25図 砥石



第26図 硯

1～5は中国南部のもので、年代は14～15世紀とされるものである。

(B) 土師質土器

皿と火鉢が出土している（第24図）。

皿

2点出土しており、いずれも小形の皿である。

1は底部からやや外反しながら立ち上り、上端は水平である。内外ともにナデ調整されている。内面には粘土紐巻き上げ痕が残る。底面には回転糸切痕が残る。色調はにぶい橙色で胎土は砂をふくまない軟質である。内面の底に油が付着しているので灯明皿として用いたものと思われる。

2は口縁がやや内弯しながら立ち上り、口縁端は丸味がある。内外面ともにナデ調整がされ底面には回転糸切痕が残る。

火 鉢

3は口縁部に近い所の破片と思われる。外面はよくヘラミガキされ、雷文が1列に亀甲文が二列押印される。色調はにぶい橙色で胎土は微砂を含む比較的硬い。

4は底部の部分である。足がつくもので体部に隆帯がつく。

土 鈴

5は先端の尖がつつまみと鈴の部分からなり一部破損している。鈴は中央付近の円形の孔まで、口が切り込まれている。つまみ部分には楕円形の孔がみられる。

(C) 石製品

石製品には砥石・硯・石臼が出土している（第25図）

砥 石

砥石は5点出土している。1～3はほぼ完形で、4～5は砂損品である。

1・2は棒状のもので平面形は長方形で断面形は長方形である。四面使用で磨面がみられ、2は裏と表中央が使用の摩滅でくぼんでいる。

3～5は板状のである。3は1面だけ使用、4・5は4面使用のものである。

硯

硯は2点出土している（第26図）

1は周辺部の1部が破損しているため本来の大きさは不明である。平面形は長方形で、断面形はやや台形に近い。海部と陸部からなる。海部にはノミ状工具による削り痕が見られる。

2は海の一隅の破片である。海と陸の境の両外側に細い切り込みが入る。

石 臼

石臼の破片は12点である（第27図1～9、第28図1～3）

第27図1～9・第28図1・2は上臼の破片で、第28図3は下臼の破片である。
 第27図1～9、第28図1は縁のある上臼であり、27図1～2は台部と受皿の部分、3・4は受皿の部分、5～5は受皿の周縁部分である。

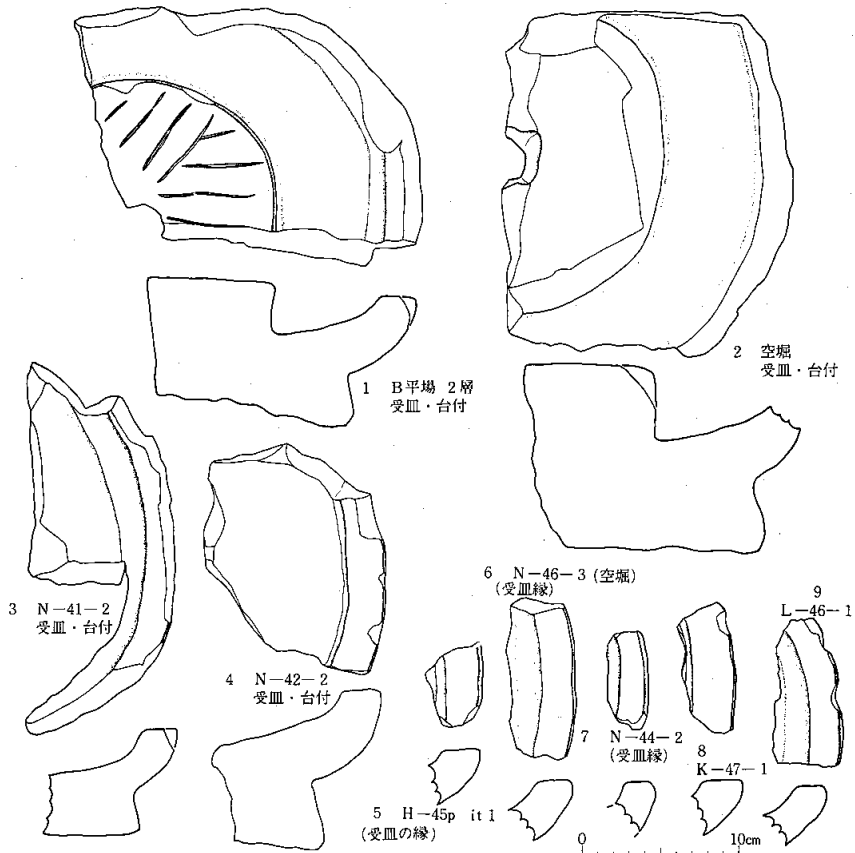
第28図2は縁がない破片で心棒孔と受口がみられる。

第28図3は下臼の破片であり、上面に16条の溝が放射状にみられる。

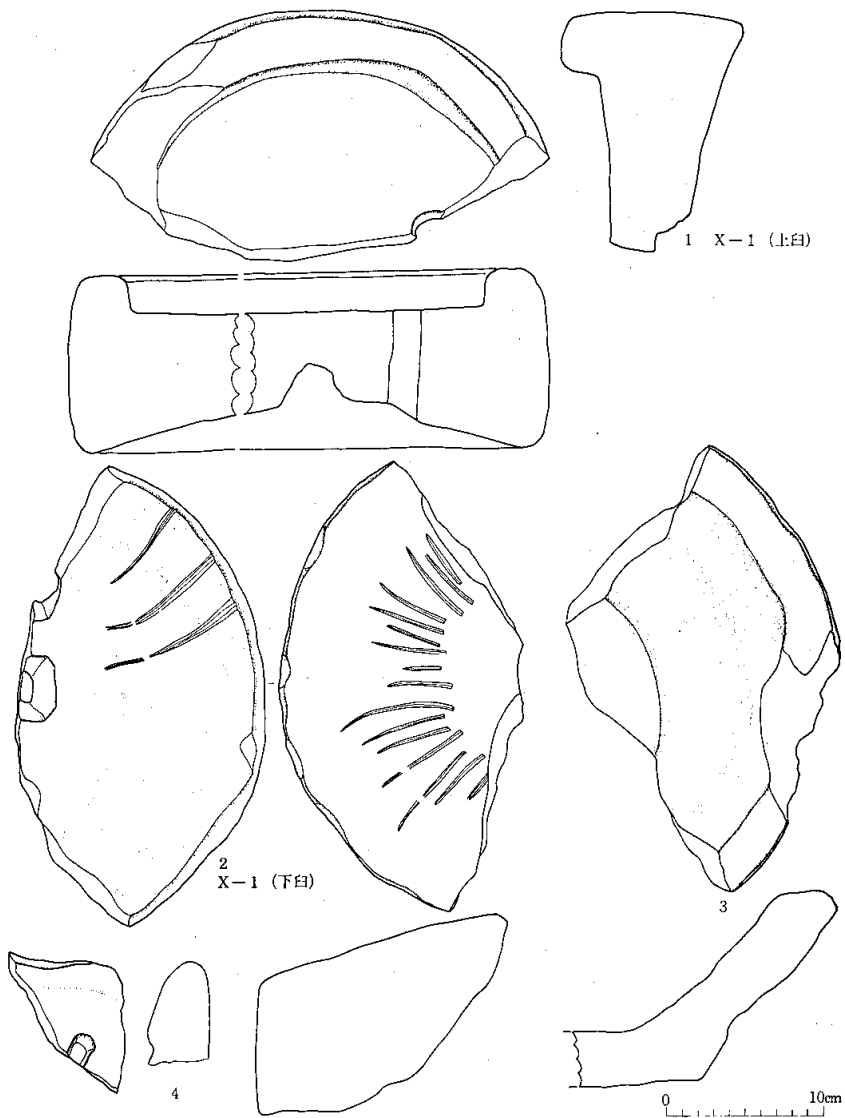
(D) 貨幣

貨幣は13枚出土している。この中で文字の半明するものは11枚であり2枚は摩滅のため判定できない。その種類には大定通宝、元祐通宝、熙寧元宝、咸平元宝、元豊通宝、景德元宝、至道元宝、洪武通宝、至大通宝、永樂通宝などがみられる。

この中で1の大定通宝はF-45pit21の出土で、背字として酉の文字がみられる。2・3はJ-44-pit5である。4～7の4枚はJ-44-3で接着して出土したものである。8～12は下段平場Ⅱ層中より出土している。

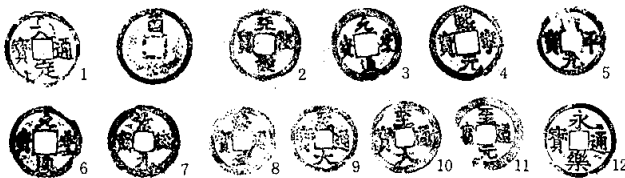


第27図 石 臼



第28図 石臼・石鉢

1. 大定通宝
2. 元祐通宝
3. 元豐通宝
4. 熙寧元宝
5. 成平通宝
6. 元豐通宝
7. 景德元宝
8. 興武通宝
9. 至大通宝
10. 至元通宝
11. 至元通宝
12. 永樂通宝



第29図 貨幣

V. 遺構について

1. 遺構の形態と規模

発見された遺構は掘立柱建物跡、土壇、溝、門跡、土塁、空堀などである。これらの遺構の形態・規模・時代についてみてみたい。

掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は上段平場（A平場）で4棟、北側下段平場（B平場）で11棟、南側下段平場（C平場）で4棟確認されている。各平場の建物跡の平面形（間面）、規模（間尺）、切り合い、棟方向は第4表に示した。

平面形、規模

建物跡には身舎だけの建物跡、身舎に廂がつく建物跡があり、桁と梁の総長比で次の4種がある。

（A）身舎だけの建物跡

身舎だけのものは4棟検出されている。身舎の平面をみると4棟とも長方形であるが、（a）比較的長い建物（A-1、B-2、C-3号棟）と（b）正方形に近い建物（C-1号棟）がみられる。

（a）型の間面には5間×2間、3間×2間、2間×1間の3種類がみられ、（b）型の間面は3間×2間である。

（B）廂がある建物

廂がある建物跡は15棟確認されている。身舎の平面形は15棟とも長方形であるが、（a）比較的長い長方形の建物と（b）正方形に近い建物がみられる。

（a）型の間面には5間×2間（A-3、B-5、B-6号棟）、4間×2間（A-2、B-1、B-4、B-8、B-10、B-12号棟）3間×2間（A-4号棟）の3種類がある。

（b）型の間面には3間×2間（B-11号棟）、2×2間（B-3号棟）、2間×1間（-2、C-4号棟）の3種類がある。

間尺について

桁行・梁間の柱間寸法は1つの建物の中でもいくぶん違いがみられるため、それぞれの建物の平均値でみると、桁行は1.58m～3.4mまでの範囲にあり1.95m～2mに集中する傾向がある。また、梁間は1.5m～4.2mまでの範囲にあり1.9m～2.1mに集中する傾向がみられる。

2. 遺構の重複

A平場にある4棟の建物の重複をみると（1号棟・2号棟・3号棟）と（2号・3号・4号棟）となっている。これらの建物跡は柱穴相互の切り合いから次のような前後関係を示している。

1号棟→2号棟

第4表 掘立柱建物跡計測表

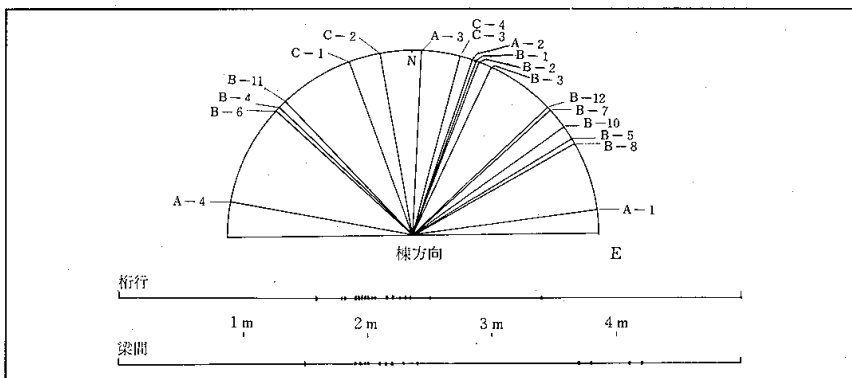
| No | 棟方向 | 桁行×梁間 | 桁 行 | | | | 梁 間 | | | | 備 考 |
|------|-------------------|-------|--|-------------|---|-----------------------------------|-------------------------------|----------------------------------|--|--|-----|
| | | | 柱 間 | 総長 (m) | 平均 (m (尺)) | 柱 間 | 総長 (m) | 平均 (m (尺)) | | | |
| A-1 | 東 西 N-82°30'-E | 5間×2間 | 北 2+2+1.7+2.1 南 2.1+1.9+2+2.2 | 9.8 10.1 | 1.95 (6.4) | 東 (4) 西 (3.8) | 4 (13.2) 3.8 (12.54) | 1.98 (6.5) | 2.3→1 | | |
| A-2 | 南 北 N-19°-E | 4間×2間 | 東 2+1.9+1.9+1.9 西 1.9+2+1.8+2 | 7.7 7.6 | 1.92 (6.3) | 北 2+2 南 2+2 | 4 4 | 2 (6.6) | 3.4→2→1 | | |
| A-3 | 南 北 N-30°-E | 6間×2間 | 東 1.9+1.9+2+1.9+(4.2) 西 1.9+(4.3)+1.8+1.9+2.2 | 11.9 12 | 1.98 (6.5) | 北 1.7+2.3 南 1.9+2.1 | 4 4 | 2 (6.6) | | | |
| A-4 | 東 西 W-79°-N | 3間×1間 | 北 2+2.1+2.1 南 1.9+2.1+1.9 | 6.2 5.9 | 2 (6.6) | 東 () 西 () | 3.8 3.7 | 3.8 (12.54) 3.7 (12.21) | | | |
| B-1 | 南 北 N-20°-E | 4間×2間 | 東 (4)+2+(?) 西 2.1+2+1.9+2 | () 8 | () 2 (6.6) | 北 1.9+1.9 南 1.9+2.2 | 3.8 4.1 | 1.9 (6.27) | 西面に幅1mの扉 南の南東隅柱穴から青磁碗の口縁出土 | | |
| B-2 | 南 北 N-21°-E | 2間×2間 | 東 3.6+3.2 西 3.6+3.2 | 6.8 6.9 | 3.4 (11.22) | 北 2.2+2.0 南 2.0+2.2 | 4.2 4.2 | 2.1 (6.93) | | | |
| B-3 | 南 北 N-25°-E | 2間×1間 | 東 2.3+2.5 西 2.2+2.4 | 4.8 4.7 | 2.35 (7.75) | 北 1.8+2.5 南 2.25+2.15 | 4.3 4.4 | 2.15 (7.09) 2.2 (7.26) | 北面に幅1mの扉 | | |
| B-4 | 東 西 W-46°-N | 4間×2間 | 北 2.2+2.5+2.1+2.2 南 2.2+2.2+2.2+2.4 | 9 9 | 2.2 (7.26) | 東 2.5+2.3 西 2.3+2.3 | 4.8 4.6 | 2.4 (7.92) | 身舎の南東隅の柱穴から磁石 北・西・南面に幅1mの扉 | | |
| B-5 | 東 西 N-59°-E | 6間×2間 | 北 1.9+2+2+2.2+1.9-2 南 1.9+2.0+2+2.1+2 | 12 12.2 | 2 (6.6) | 東 1.9+2.1 西 () | 4 3.8 | 2 (6.6) 1.9 (6.27) | 身舎の柱穴から古瀬戸皿青磁が出土 南面に幅1mの扉 4→5 | | |
| B-6 | 南 北 N-40°-E | 2間×2間 | 東 西 (4) | 4.1 4 | 2.05 (6.76) 2 (6.6) | 北 1.85+2.05 南 1.8+1.8 (+2) | 3.9 3.8 | 1.95 (6.43) 1.9 (6.27) | 身舎の柱穴から中世陶器破片 東西に幅1mの扉 | | |
| B-7 | 東 西 N-48°-E | 4間×3間 | 北 2+2+2+1.9 南 2+1.9+2+1.9 | 7.9 7.8 | 1.95 (6.43) | 東 () 西 1.9+1.9+2 | 5.7 5.8 | 1.95 (6.43) | 古瀬戸 西・南に幅1mの扉総柱 6→7 | | |
| B-8 | 東 西 N-61°-E | 4間×1間 | 北 2+2+1.9+2.1 南 2+1.9+2+2 | 7.9 7.9 | 2 (6.6) | 東 (3.7) 西 (3.7) | 3.7 3.7 | 3.2 (12.2) | 西・東に幅1.2mの扉 8→10 | | |
| B-10 | 東 西 N-55°-E | 4間×2間 | 北 1.8+1.8+1.9+1.8 南 1.9+1.8+1.9+1.8 | 7.3 7.4 | 1.82 (6) | 東 2.0+1.8 西 (3.8) | 3.8 3.8 | 1.9 (6.27) | 北・西・南面に0.8mの扉 8→10→11 | | |
| B-11 | 南 北 W-43°-N | 3間×2間 | 東 2+1.9+2 南 2+1.9+1.9 | 5.9 5.8 | 1.95 (6.43) | 北 (1.8+2.1) 南 () | 3.9 3.9 | 1.95 (6.43) | 西・南面に幅1.1mの扉 (南柱間2.1+1.8) 東面に幅1.9mの扉 10→11 | | |
| B-12 | 東 西 N-42°-E | 4間×2間 | 北 南 | 4.2 4.3 | 2.15 (7.09) | 東 2.1+2.1 西 (1.8+2.1) | 4.2 4.2 | 2.1 (6.93) | 柱穴埋土が中世陶器片が出土 東・南面に幅0.9mの扉 | | |
| C-1 | 東 西 W-10°-N | 3間×2間 | 北 1.7+1.75+1.6 南 | 5.05 5.5 | 1.68 (5.54) | 東 2.5+2.5 西 | 5 5.2 | 2.5 (8.25) | | | |
| C-2 | 東 西 W-10°-N | 2間×1間 | 北 2.4+2.1 南 2.2+2.3 | 4.5 4.5 | 2.25 (7.42) | 東 4.1 西 4.2 | 4.1 4.2 | 4.1 (13.53) 4.2 (13.86) | 西南面に巾0.8の扉 | | |
| C-3 | 北 南 N-15°-E | 2間×1間 | 東 1.9+2.5 西 2.2+2.4 | 4.4 4.6 | 1.9 (5.77) 2.5 (8.25) 2.3 (7.59) | 北 1.5 南 1.5 | 1.5 1.5 | 1.5 (4.95) | | | |
| C-4 | 北 南 N-15°-E | 2間×1間 | 東 1.5+2.1 西 1.5+2.1 | 3.6 3.6 | 1.8 (5.94) | 北 2 南 2.1 | 2 2.1 | 2 (6.6) 2.1 (6.93) | | | |

第5表 建物跡の方向と規模

| No | 棟 方 向 | No | 桁行×梁間 | 備 考 |
|------|-----------------|------|-------|--|
| A-1 | N-82°30'-E (東西) | A-1 | 5間×2間 | |
| A-2 | N-19'-E (南北) | A-2 | 4間×2間 | |
| A-3 | N-3'-E (南北) | A-3 | 6間×2間 | |
| A-4 | W-79'-N (東西) | A-4 | 3間×2間 | |
| B-1 | N-20'-E (南北) | B-1 | 4間×2間 | 西面に幅1mの廊 |
| B-2 | N-21'-E (南北) | B-2 | 2間×2間 | |
| B-3 | N-25'-E (南北) | B-3 | 2間×1間 | 北面に幅1mの廊 |
| B-4 | W-46'-N (東西) | B-4 | 4間×2間 | 北・西・南面に幅1mの廊 |
| B-5 | N-59'-E (東西) | B-5 | 6間×2間 | 南面に幅1mの廊 4→5 |
| B-6 | W-50'-N (東西) | B-6 | 5間×2間 | 北・南に幅1mの廊 |
| B-7 | N-48'-E (東西) | B-7 | 4間×3間 | 西・南に幅1mの廊総柱 6→7 |
| B-8 | N-61'-E (東西) | B-8 | 4間×1間 | 南に幅1.2mの廊 8→10 8→10→11 |
| B-10 | N-55'-E (東西) | B-10 | 4間×2間 | 北・西・南面に幅0.8mの廊 |
| B-11 | W-43'-N (南北) | B-11 | 3間×1間 | 西・南面に幅1.1mの廊(南柱間2.1+1.8) 東面に幅1.9mの廊 10→11 |
| B-12 | N-47'-E (東西) | B-12 | 4間×2間 | 東面に幅0.9mの廊 |
| C-1 | W-10'-N (東西) | C-1 | 3間×2間 | |
| C-2 | W-10'-N (東西) | C-2 | 2間×1間 | 南・西側に幅0.9の庇 |
| C-3 | W-15'-E (北南) | C-3 | 2間×1間 | |
| C-4 | N-15'-E (北南) | C-4 | 2間×1間 | 西側に |

| 桁 行 | | No |
|------|--|------------------------|
| 平均値 | | |
| 1.58 | | C-1 |
| 1.8 | | C-4 |
| 1.82 | | B-10 |
| 1.9 | | C-3(東) |
| 1.92 | | A-2 |
| 1.95 | | A-1・B-7・B-11 |
| 1.98 | | A-3 |
| 2 | | A-4・B-5・B-1・B-6(西)・B-8 |
| 2.05 | | B-6(東) |
| 2.15 | | B-12 |
| 2.2 | | B-4 |
| 2.25 | | C-2 |
| 2.3 | | C-3(西) |
| 2.35 | | B-3 |
| 2.5 | | C-3(東) |
| 3.4 | | B-2 |

| 梁 間 | | No |
|------|--|-------------------------|
| 平均値 | | |
| 1.5 | | C-3 |
| 1.9 | | B-1・B-5(西)・B-7・B-10・B-6 |
| 1.95 | | B-11 |
| 1.98 | | A-1 |
| 2 | | A-2・A-3・C-4(北) |
| 2.1 | | B-2・B-12・C-4(南) |
| 2.15 | | B-3(北) |
| 2.2 | | B-3(南) |
| 2.3 | | C-3(西) |
| 2.4 | | B-4 |
| 3.7 | | A-4(西)・B-8 |
| 3.8 | | A-4(東) |
| 4.1 | | C-2(東) |
| 4.2 | | C-2(西) |



2号棟→3号棟→4号棟

この中で1号棟と4号棟については直接重複関係はないが、2号棟→3号棟の移行を考えれば1号棟は4号棟より旧くこの4棟は次のように変遷が考えられる。

1号棟→2号棟→3号棟→4号棟

これがそのまま時期差を示しているものと考えられる。年代を推定できる資料はC-3号棟の柱穴から古瀬戸壺底部が出土している。

B平場にある11棟の建物の1・2号棟の間、3～12号棟の間で重複がみられる。1・2号棟の間では直接柱穴の切り合いがなく新旧関係は不明である。

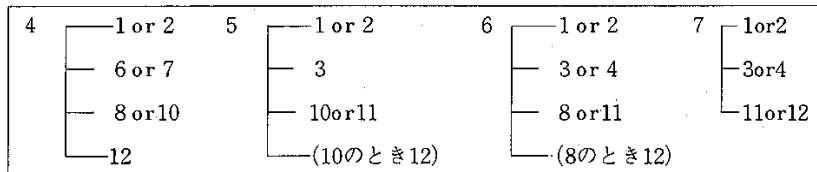
3号～12号棟は相互に部分的な重複をくりかえしており、次の建物間で重複がみられる。

(3・4)・(4・5)・(5・6・7)・(7・8・9)・(10・11)・(11・12)

この中で直接、柱穴の切り合いが認められる建物は7棟あり、次のような新旧関係が認められる。

4→5号棟 10→11号棟
6→7号棟
8→10号棟

この前後関のわかる9棟と他の建物跡が一連の建物群として組合うか明確でないが4・5・6・7・8・10・11号棟のいずれかと共存の可能性について考えてみると次のような組合せが考えられる。



このことからB平場に同時存在する数は多くとも5棟となる。この中で柱穴から遺物を出土する建物跡は1・5・6・7・14号棟であり次のような遺物が出土する。

1号棟 (青磁碗-14～15世紀)
5号棟 (青磁皿・古瀬戸深皿・元宝通宝・元祐通宝-15世紀)
6号棟・7号棟・12号棟 (中世陶器体部破片-16世紀)

C平場にある4棟の建物跡の重複をみると(C-1号棟・C-2号棟)と(C-3号棟・C-4号棟)となっており、直接柱穴の切り合いが認められるものは4棟であり次のような新旧関係がある。

C-1号棟→C-2号棟
C-3号棟→C-4号棟

このことからC平場の掘立柱建物跡の共存の可能性は次の2棟組合せである。

C-1号棟+C-3号棟
C-2号棟+C-4号棟

年代を推定できる資料はC-3号棟の柱穴埋土から古瀬戸の壺底部が出土している。以上のことからA・B・C平場で共存の可能性のある棟数は8棟～7棟と考えられる。

竪穴遺構

竪穴遺構は1基検出された。西側が削平されて本来の大きさは不明である。壁の周囲にある4個のピットは他の遺構との組み合わせは認められないため本竪穴に伴なう可能性がある。

このような形態の竪穴遺構は観音沢遺跡の竪穴遺構Ibタイプに類似するものと思われるが性格は不明である。

土 壙

土壙は17基検出した。土壙の平面をみると次の4種類がみられる。

- 円形 (1・2・3号)
- 長方形 (4・5・6号)
- 長楕円形 (7・8・9・10・12・13号)
- 楕円形 (14・15・16号)

この中で1号土壙から炭化米と石鉢、3号土壙から炭化米が出土している。

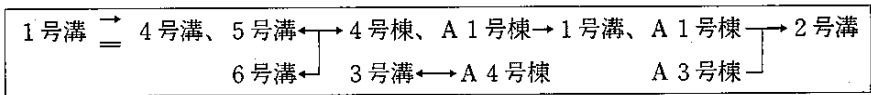
16基の土壙と他の遺構との重複関係や切り合いが認められるものは次の6基で他の10基は不明である。

B-10号棟=14号土壙
3号土壙→1号土壙
15号土壙→14号土壙
10号土壙→6号棟

溝

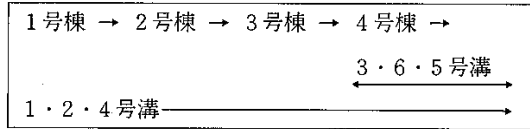
溝はA平場で6条、B平場で2条、C平場で3条検出されている。

(A平場の溝)形状、方位とも1定しない。この6条の溝は他の遺構との切り合いから次のような関係がみられる。

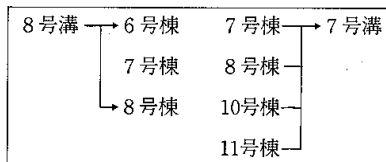


A-1号溝は遺物の出土はみられないが1号土壙の内側に沿っていることから土壙に伴なう溝の可能性も考えられる。また、A-4号溝は掘立柱建物跡の南を区画する様子を示している。このことからA-1号溝とA-4号溝はA平場を区画する溝とも考えられ、A-1～4号掘立

柱建物跡に伴う時期が考えられる。この関係から溝と掘立柱建物跡との関係は次のような可能性が考えられる。



(B平場の溝) 2本の溝は相互の切り合いから8号溝、7号溝の関係になっている。さらに2本の溝と掘立柱建物跡の関係についても6～8号溝の堆積土上面で確認されていることやB-7・B-8・B-10・B-11号棟が7号溝の底面で確認されていることから次のような新旧関係が考えられる。



7号溝は4棟の掘立柱建物跡より新しい時期であるがその性格は不明である。

(C平場の溝) 10号溝の底面でC-1・C-2号棟を確認し、11号溝の底面でC-3・C-4号棟を確認しているため掘立柱建物跡より新しいが時期は不明である。9号溝は3号土塁の内側に沿っているため土塁に伴う可能性がある。

門跡

門跡はB平場の南隅で約5m離れて2基検出された。2基とも斜面を「切り通した」ものである。1号門は土塁の積土と地山を壁としており、2号門は旧表土と地山を壁としていた。

1号門の通路部分は左側に直角に折れまがり、建物跡は出口側(A号棟・B号棟)と入口側(C号棟・D号棟)に配置されている。建物跡の規模は桁行1門・梁間1間である。建物相互の関係は柱穴の切り合いからA号棟→B号棟、C号棟→D号棟となっており、建て替えが認められる。しかし、(A号棟・B号棟)と(C号棟・D号棟)の建物跡は同時存在か否か不明である。門跡は後に人為的に埋められ2号土塁の1部として利用されている。年代を推定できる資料としては底面から中国産の青磁碗の底部が出土している。

2号門の通路部分は左にカーブするように切り通してあり、通路の中央付近に建物跡が付設される。建物跡は桁行1間、梁間1間であり柱穴の切り合いからE号棟→F号棟への建て替えが認められる。年代を推定できる資料は出土していないため時期は不明である。

土塁

A平場の北辺・西辺・東辺の1部(土塁1)・B平場の北辺～西辺、C平場の西辺、空堀1の西側にある。

A平場の土塁は内側に1号溝を伴っている。構築は旧表土上面に平場内側から外側に積み上げていく方法をしている。B・C平場の土塁と比較すると低くなっているため崩壊が相当すすんでいると思われる。

B平場の土塁の構築をみると北辺部では平場を確保するための整地層上面に積み土を行っており、西辺では旧表土上面に積み土を行っている。積み土は内側から外側に積み上げていっている。土塁の南側では1号門と土壇1号を埋めて土塁として修築している。

C平場の土塁は内側に9号溝を伴う。積土は旧表土上面に平場内側から外側にむかって積み上げられている。北側部分の残りがよい。

4号土塁は1号空堀と併行している。土塁の積土は旧表土の上に空堀側から斜面に向って積み上げられている。このことから空堀を掘り上げる時点で同時に構築したと思われる。土塁の規模は平場の周辺をめぐる土塁より幅広いといえる。土塁と空堀は併行して調査区外の北西隅の沢まで延びている。この意味で両者は1対として1つの防禦、通路的な性格をもっていたといえる。この意味で空堀から出土した中世陶器のほぼ近い時期に使用されていたと考えられる。

空堀

1号堀は4号土塁の内側にあり、堀の底面は南に来るにしたがって浅くなり1号門の南側で消滅する。

1号空堀は西側に4号土塁と併行して館の北東—北—北面を区画する防禦施設であるが、さらに、南西部で浅くなって1号門跡の北東平坦部にいたることは1つの通路的な役割を果たしたものと考えられる。土塁・空堀が通路的な性格をもって1号門跡に連絡するものと考えられるならば、土塁・空堀跡の構築年代が1号門跡と同時期にさかのぼる可能性がある。

3. 遺構の年代

発見された遺構は掘立柱建物跡、土壇・門跡・溝・土塁・空堀などである。これらの遺構について出土遺物などから遺構の年代についてふれてみたい。

掘立柱建物跡：柱穴から遺物が出土しているものは次のようである。

B-1号棟（青磁碗—15世紀）

B-5号棟（青磁皿・古瀬戸深皿—15世紀）

B-6・7・12号棟（中世陶器体部破片）

ピット3・36（白磁碗—14～15世紀）

この中で6・7・12号棟の体部破片はⅡ層出土の15～16世紀と考えられる口縁部に縁帯をもつ甕破片の体部に近いことから、15～16世紀の遺物と考えられる。

溝：A-4号溝の西側から中世陶器底部破片南東隅から中世陶器の体部、底部破片が出土している。この破片はB平場Ⅱ層出土の口縁と接合すること15～16世紀とした中世陶器とほぼ近

いものと考えられ、ほぼこの時期に近いものと考えられる。

8号溝からは遺物がみられないが15～16世紀と考えられる中世陶器を出土した掘立柱建物跡B-6、7号棟より古いことで15世紀以前としておきたい。その性格は不明である。

門跡：1号門の底面からは青磁埴の底部が出土している。

空堀：空堀の堆積3層中から中世陶器の甕の口縁部や体部破片、砥石、石臼が出土している。このことから堆積土出土遺物は空堀の放棄された時期を示しており、それは15～16世紀頃と考えられる。構築時は1号門・2号土塁とほぼ時期を同じくするものと考えられ14～15世紀初めまでさかのぼる可能性がある。

また、組み合わせが抽出できなかったピット3・36からも白磁（白磁埴-14～15世紀）が出土している。

以上のことから、時期が推定できる遺構と切り合いが認められ前後関係の判明する遺構を加えてみると、移行の時期は14～15世紀頃、15～16世紀初、16世紀中頃の3期に分かれると考えられる。

4. 館跡について

構築について

館跡は背後に丘陵をひかえ、前面に沖積地や善川のみえる南北に長い丘陵先端に立地する。館の構築をみると、丘陵の東西にある沢地に積み土による整地を行なって上段と下段の平場を造成し、その平坦部の縁辺に土塁をめぐらしている。同時に北側下段平場の斜面に空堀を掘り、その掘り上げた土を利用して堀の外側に土塁を構築している。さらに上・下段平場の東西斜面には積み土整地による1～2段の腰郭を配している。

これらの遺構を調査した結果、通路と土塁の間で部分的な改築が認められるだけで、館の拡張などの著しい変化は認められなかった。このことから、内部遺構の配置の変化以外は館の形態にあまり手を加えないで、ほぼ初期の範囲を利用していたと思われる。

遺構の変遷について

各平場で検出された遺構の中で、出土遺物から使用時期に近い年代を推定できる遺構は、1号通路、B-8号溝、1号空堀、B-1号棟、B-5号棟、C-3号棟、B-6号棟、B-7号棟・B-12号棟の遺構である。この時期を推定できる遺構をみると14～15世紀初め、15世紀中頃～16、16世紀中頃以降の3時期に分かれる。

また切り合い関係から時期推定できる遺構よりも古いと考えられる遺構と、切り合いは認められないが重複関係から共存が推定される遺構を含めて考えると3時期の遺構の配置が考えられる。

I期

B平場の縁辺には3号土塁がめぐり、その南西には平場へ入る1号通路が構築されている。通路には門跡がみられA棟からB棟への建て替えが行なわれる。B平場には8号溝が土塁の内側にありB-4号棟が建てられる。C平場ではピット10から14世紀の白磁碗が出ている。B平場の北、西斜面に1号通路に続く4号土塁と空堀が構築される。

II 期

B平場には1号通路がまだみられ、門は建て替えられてD棟が建っている可能性がある。建物としてはB-1号棟、B-5号棟が建てられ、B-10号土壌がみられる。A平場には縁辺に2号土塁がめぐり、A-1号棟が配される可能性がある。C平場には土塁がめぐり北東にC-1号棟が建てられ、西側にはC-3号棟がC-1号と共存かやや遅れて建てられる。

III期

B平場は1号通路が埋められ2号通路ができており、1号通路は埋めて土塁が延長される。平場にはB-6号棟、B-7号棟、B-12号棟が建てられている。B-7号棟、B-10号棟、B-11号棟が、B-7号棟・B-12号棟と前後して建てられていく。また、10号土壌が配される。

A平場には、A-2号棟、A-3号棟、A-4号棟と前後して建てられる。この段階では4号溝が建物の南を区画しており前後して1号溝、2号溝、3号溝がつくられていき、平場を区画していく。

C平場にはC-2号棟とC-4号棟が前後して配置される。

堆積土出土の遺物は少しの13～14世紀とされる白磁をのぞけば、明代の舶載磁器(青磁・白磁)、国産の陶器片などの15～16世紀のものが多い。このことから時期の明確でない掘立柱建物跡、土壌などは主として15～16世紀にかけて建て替えが行なわれたものと考えられる。

5. 館主について

本遺跡の館主については『仙台領古城書上』、(延宝年間)、『仙台領古城書立之覚』などには黒川氏一族の『八谷冠者……』となっている。八谷氏についてはこれ以後記録にはみられない。また、岩手県水沢市の大衡家に伝わる『黒川氏大衡家族譜』の中に相川氏の名が見られ、相川周辺に居住していたことが伝えられている。この2つの記録は江戸時代初期～中期にかけての口伝であり、相川～落合にかけて黒川氏と関係のある武士がいたことを伝えている資料である。

また、留守一族の八幡氏の『八幡氏系図』や前出の『黒川氏大衡家族譜』には、明応7年(1440)に黒川氏房が宮城郡高崎の高崎盛忠と相川地区で対戦したことが記されている。黒川氏は氏房の時代に鶴巢に居をかまえたことになっており、これは15世紀頃この地域が黒川氏と留守氏の支配の境界付近であったことがうかがえる。『伊達正統世次考』や『余目記録』に黒川氏が15世紀以後、この地域を支配していくことが記されている。出土遺物から館の遺構は15世紀後半

から16世紀初頃の遺構を中心していることで館主も黒川氏の系列に属する人物であったことは伝承などからも想像される。

古代の遺構と遺物

1. 古墳時代の遺構と遺物

B平場の北側で墓墳が3期検出されている。C平場の整地層下の第II層で土師器坏が確認されている。

(1) 墓墳

長方形の土墳が4mの間隔をおいて2基（1号土墳・2号土墳）並び、その間に楕円形の小土墳が1基みられる。この3基の遺構の確認面は地山面であり、土墳の周辺からは周溝や削り出しによる墳麓線のような遺構は確認できなかった。

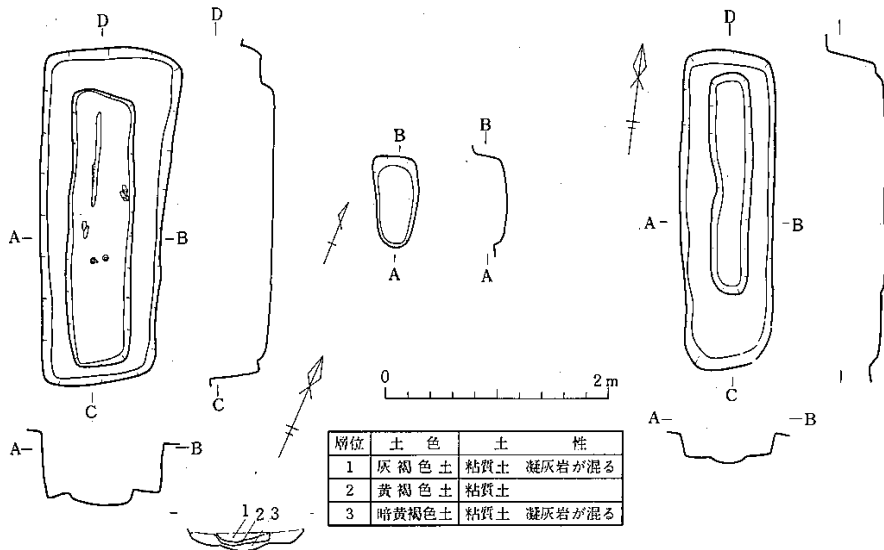
第1号墓墳

平面形は長方形で大きさは長軸約3m、短軸約1.1mである。堆積土は凝灰岩混り暗褐色土であり、ほぼ均一である。約60cm掘り下げたところで内部施設が確認できた。

内部施設：土墳のほぼ中央に付設された、長方形の土壇を程している。

平面形は長方形で、長さは長軸2.5m、短軸0.6mである。

堆積土は3層認められる。1層は凝灰岩混りの粘性がある灰褐色土であり中央に堆積し、2層は褐色土が4～5cmの厚さで「U」字状に堆積し、3層はやや舟底状にくぼんだ土壇の底面に粘土質の暗褐色土が堆積している。



第30図 古墳平面図

内部施設の床面は長軸で2.4m、短軸0.45mで確認面からの深さは10～15cmである。底面は皿状をして壁はゆるやかに立ち上る。

副葬品

直刀— 茎と刀身の1部分が残るもので残存長15cmである。平棟・平づくりの直刀である。刀身の残存長は15cmであり、身幅15cm、背巾0.5cmである。身の断面形は2等辺三角形をしている。茎の残存長は5cmであり、幅10cmである。茎の断面形は長方形である。茎と刀身の間は片関である。

鉄鏃— 5点出土している。無茎の平根式である。鋒からやや下ったところで外部に張り出すため三角形に近い。この主要部に逆刺がつくため全体は細長くみえる。矢柄が付着している。長さは5cmのものと4.5cmのものがある。幅は2.5cmのものと2.1cmのものがある。刃部の厚さは3～4mmである。

第2号墓壇

平面形は長方形で大きさは長軸2.9m、短軸0.8mである。堆積土は凝灰岩混り暗褐色土である。土壇の底面で内部施設が確認できた。内部施設の確認面までの深さは約30～40cmである。

内部施設：土壇のやや北寄りにあり、土壇の底面を掘り込んで付設されている。

平面形は長方形で、規模は長軸2m、短軸0.3m、深さ約10cmである。

堆積土は1層だけで暗褐色土である。

内部施設の床面は皿状をして壁はゆるやかに立ち上る。床面の長さは2mで、幅は20～30cmである。

第3号墓壇

第1号墓壇と第2号墓壇の間にあり、両側の墓壇より小さい。

平面形は楕円形で大きさは長軸80cm、短軸40cm、深さ30～20cmである。

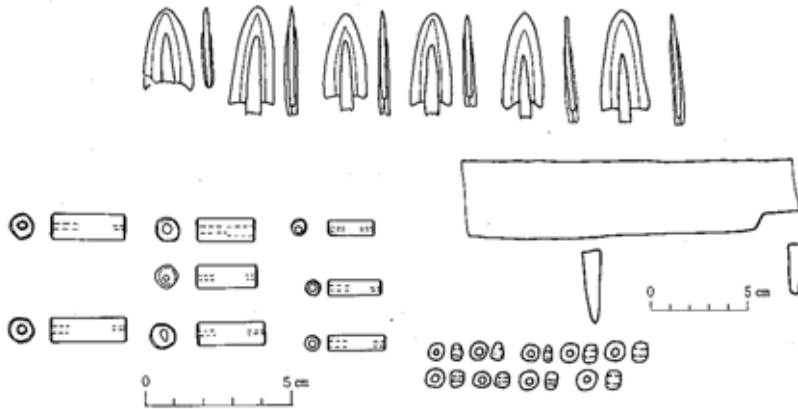
堆積土は凝灰岩混りの暗褐色土である。

底面は平担でゆるやかに立ち上る。底面から管玉、ガラス小玉、砕けた琥珀白玉が出土している。

副葬品

管玉は9点出土しており、いずれも碧玉製である。長さは1.6～3cm、直径は5～9mmでありそれぞれ大きさは異っている。穿孔は両端から行われており「V」字形をしている。片側が大きく、片側が小さい。

小玉は9点出土しており、いずれもガラス製の完形品で紺青色をしている。直径は4～6mmであり穿孔されている。



第31図 鉄鍬・直刀・管玉・うす玉

(2) 墓壇の構造について

土壇は平面形は3基とも長方形である。この中で1・2号土壇が大形のもので、3号土壇が小形のものである。

3基の土壇について検出状況から構築手順をみると次のようである。

1号墓壇

- ① 長方形の土壇を掘る
- ② 土壇の内部に長軸2.5m、短軸0.6m、深さ10~15cmの舟形状の土壇を掘る。
- ③ 舟形状土壇の底面に粘性がある褐色土を5~10cm詰める。
- ④ 褐色土の上に直刀、鉄鍬を副葬した埋葬施設を置く。
- ⑤ 土を土壇全体に入れる。

2号墓壇

- ① 長方形の土壇を掘る。
- ② 土壇の内部に長さ2m、0.3m、深さ10cmの舟形状の土壇を掘る。
- ③ 舟形状土壇に施設を置く（明確な施設はないが、埋土の違いがみられる）。
- ④ 土壇を凝灰岩混りの褐色土で埋める。

3号墓壇

- ① 長方形の土壇を掘る。
- ② 土壇内に管玉・琥珀玉、ガラス小玉を埋葬する。
- ③ 土壇を凝灰岩混りの褐色土で埋める。

2号墓壇の検出状況は1号墓壇の③・④の手順を確認できなかったが同様の構築手順がとられたものと考えられる。1号墓壇、2号墓壇で④段階で埋葬されたものは舟形状土壇の大きさ

から1号墓壙は2.5×0.5m、2号墓壙は2×0.3mの大きさがあったと思われる。

この手順からみると1・2号墓壙と3号墓壙の差は内部施設の差(いいかえれば用途の差)といえよう。

内部施設について

1号墓壙は検出状況から長方形の土壙中に直刀・鉄鏃を副葬した埋葬施設を埋めたものと思われる。埋葬施設は痕跡がみられないことから木棺のようなものと考えられる。形態としては土壙底面の埋葬施設を置いた部分の断面が舟形状をしていることから割竹型木棺の可能性も考えられる。

2号墓壙の検出状況は1号墓壙の③・④の手順は確認できなかったが、底面に長方形の掘り込みがみられることから1号墓壙と同様に木棺を埋葬したものと考えられる。形態としては長方形の掘り込みの底面が平坦であることから箱形の木棺が考えられる。

木棺の形態としては1号墓壙は土壙底面の埋葬施設を置いた部分の断面が舟形状をしていることから2.4m×0.5mの割竹形木棺の可能性も考えられる。2号墓壙は長方形の掘り込みだけであるから2m×0.3mの箱形の木棺が考えられる。

小土壙

小土壙は内部に管玉7点・小玉9点・琥白玉1点が出土している。

このような木棺直葬の土壙の側にみられる例としては宇ヶ崎1号墳のピットがみられる。

(3) 墓壙の性格

土壙内の褐色土上面に残された舟形状の跡は1号土壙では2.4×0.45m・2号土壙では2×0.3mである。このことから1号土壙は長方形の土壙を掘った後に土壙の底面に粘性のある褐色土を詰める。粘性の褐色土が10cmぐらいになったときに上に直刀・鉄鏃を入れたものを直接その上におき土をかけて埋めた手順が考えられた。

このように土壙を掘って、その中に粘性の褐色土をつめ、土壙底から10cm上のところに棺を埋設した宮城県での例をみると中期～後期古墳の埋葬施設に類似した様相を示している。このことから遺構の性格としては中期～後期の古墳にみられる埋葬施設であると考えられる。

副葬品の年代

直刀は背幅・身幅の広い片関である。関の部分は直角で、茎の幅は平行である。鉄鏃は無茎の平根式で逆刺の弱いものである。

このような片関の直刀、無茎平根式鉄鏃は県内では第7表のような古墳から出土した直刀に類似している。この古墳は5～6世紀と考えられている。このため、この直刀・鉄鏃は5世紀頃と考えられる。

管玉、ガラス小玉、琥白玉は中期古墳から後期古墳まで副葬として類例がみられ、各時期で

それほどの異いは認められない。

2. 古代の遺物と年代

中世以前の遺物はⅠ～Ⅱ層・整地層・遺構堆積層から土師器・須恵器・赤焼土器などが出土している（第32図）

土師器（坏）

1は、ロクロ不使用の坏である。口径12.6cm、器高4.2cmである。器形は底部が丸底で、体部は稜線から立ち上り、途中から外傾して開いていき、口縁部でやや外反する。口縁端部は丸味がある。外面は底部に手持ヘラケズリ、口縁～体部に横ナデが行なわれている。内面は底部・体部ともヘラミガキと黒色処理が施されている。

赤焼土器

2は底部破片である。製作にロクロを使用し底部の調整は底部周辺にヘラケズリを行なっている。

3は高台付坏の底部破片である。製作にロクロを使用し底部は糸切離しである。高台部は付高台である。

須恵器（甕）

4は甕の口縁部破片である。頸部が外傾して立ち上り、口縁部はわずかに下方つまみ出された口縁帯がめぐる。わずかに波状文がみられる。

5は頸部破片である。肩から頸部に立ち上る部分であり外面に波状文がみられる。

6は甕の体部破片である。外面に平行タタキ目、内面に青海波文がみられる。

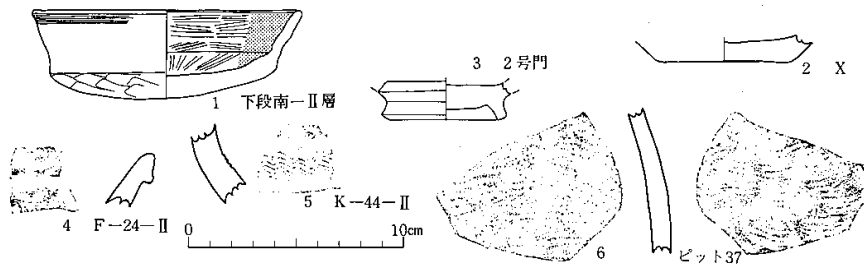
遺物の年代：土師器は器形や技法の特徴などから栗囲式で赤焼土器は平安時代である。

3. 焼土遺構

確認面は整地層下の地山面と旧表土であり、斜面に掘り込まれている。

平面形は長方形で、大きさは長軸5.3m、短軸1.8mである。

堆積土は8層認められる。1層～5層は暗褐色土と褐色土で焼土や木炭を含む層で、6層～

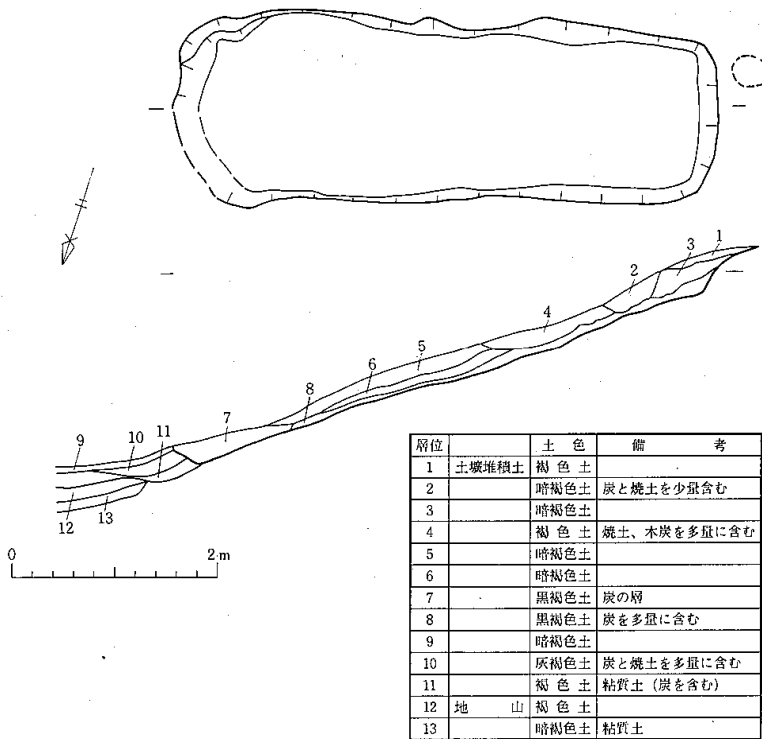


第32図 古代の遺物

8層は底面に約15cmの厚さで堆積した炭の層である。

壁は地山でかたい。壁高は約30cmである。底面は平坦であり、壁は底面からゆるやかに立ち上る。

出土遺物は認められないが、底面に炭の層がみられることで、斜面を利用して、何らかを焼いた遺構と考えられるが、その性格は不明である。年代は整地下発見であることから14世紀以前としておきたい。



第33図 焼土遺構

VI. ま と め

八谷館は、大和町蒜袋地区の大小の谷や沢が複雑に入りこんだ小丘陵の尾根上に15世紀頃築造、使用されたと考えられる。丘陵と、前面の平野部を流れる吉田川、善川の自然地形を考慮に入れた山城的な性格をもつ館である。この地域は仙台平野および松島、利府方面から大崎耕土に通じる交通上の重要な位置を占めている。北に接して、御所館跡があるが、その境は大きな谷によって区切られる。

調査区域の北半にある平坦面で多数の柱穴が検出された。建物が数回、同じ場所に立てかえられたため、重複個所が多い。どの建物に付属するかわからない柱穴もあるが、全体で20棟前後の建物を推定している。

また、平坦面と斜面の境に通路および門と推定される柱穴が発見された。通路は斜面を凹形にほり下げ傾斜をゆるめている。門は改築がみとめられる。

北側および西側の丘陵の周縁と斜面に空堀と土塁が断続的にめぐっている。空堀は浅いが、斜面を急にして山城としての性格を強めている。土塁は高い部分で1mと小規模である。

また直径1m、深さ60cmの貯蔵穴(?)の中から炭化米が出土した。出土遺物は、元・明代の青磁、白磁をふくむ国内産の陶器・古銭・鉄釘・鉄刀・石ウス・硯などである。この館の年代は出土品からみると15世紀以降のものが多い。「古城書上」などには永禄または天正年中(16世紀)まで居館していたとある。遺構についても重複および改築がみられるので、100年の存続が考えられる。大ざっぱに言って、室町時代後半とってよいであろう。

丘陵の北端の近い所で、古墳の主体部が検出され、内部から直刀・鉄鏃・装身具(管玉・ガラス玉・コハク玉など約20点)が出土した。しかし、墳丘および周溝は確認できなかった。

⑬
 相川村
 東西二十間
 南北十五間
 西方彌形土手有り但二重東北二一重之土手有り
 右城主黒川安鏡守進氏第八谷冠者と申者御座候
 一古殿
 蒜袋村
 東西十八間
 南北十八間
 東西十八間
 南北十八間
 右城主八谷冠者永禄年中迄居住ト申傳候又説ニハ八谷越前守ト申者天正年中迄居住共申傳候
 仙臺領古城書立之覚

第6表 遺物出土地点

| クリット | No | | 層位 | クリット | No | | 層位 |
|--------|----|-------------|-------|--------|----|-----------|--------|
| E 20 | 51 | | Pit 1 | K 44 | 36 | 青磁 | 2 |
| G 20 | 59 | 釘 | 2 | K 44 | 40 | 〃 (37と接合) | 2 |
| H 20 | 67 | 鉄 不明品 | | L 44 | 37 | 〃 | 1 |
| H 21 | 52 | 白磁 (底部) | 2 | F 45 | 27 | 〃 | 2 |
| N 21 | 11 | 不明 | 1 | F 45 | 1 | 大定通宝 | Pit 21 |
| G 22 | 10 | 〃 | 2 | G 45 | 38 | 灯明皿 | |
| J 23 | 65 | フタ (鉄) | 2 | G 45 | 87 | 鉄片 | 2 |
| G 24 | 15 | 白磁 (F21-2) | 2 | H 45 | 50 | 白磁 (底部) | 2 |
| G 24 | 15 | 〃 (口縁) | 2 | I 45 | 25 | 青磁 | 2 |
| H 25 | 69 | 〃 | | I 45 | 42 | 白磁 | 2 |
| H 25 | 71 | 砥石 | 2 | I 45 | 60 | 釘 (?) | 2 |
| H 25 | 72 | 〃 | 2 | J 45 | 85 | 鉄釘 | 3 |
| H 26 | 75 | 白磁 | 3 | K 45 | 21 | 釘 | 3 |
| H 26 | 66 | 鉄 不明品 | | L 45 | 16 | 白磁 (底部) | 2 |
| D 27 | 68 | 〃 | | G 46 | 28 | 青磁 | 3 |
| F 27 | 77 | 石器 fake | 2 | G 46 | 58 | 土鈴 | 2 |
| G 27 | 81 | 須恵器 | 2 | J 46 | 32 | 青磁 | 3 |
| H 28 | 13 | 青釉 (明代)(口縁) | 2 | K 46 | 63 | 釘 | 3 |
| I 30 | 70 | 白磁 (〃) | 2 | K 46 | 54 | 白磁 (口縁) | Pit 3 |
| C 31 | 46 | 〃 (〃) | 2 | K 46 | 64 | 釘 | 3 |
| F 32 | 18 | 鉄釘 | 3 | K 46 | 88 | 鉄釘 | Pit 2 |
| F 32 | 73 | 〃 | 3 | K 46 | 89 | 〃 | Pit 2 |
| I 33 | 20 | 青磁 | 2 | K 46 | 90 | 〃 | Pit 2 |
| I 34 | 61 | 釘 | 1 | K 46 | 91 | 〃 | Pit 2 |
| I 34 | 62 | 釘 | 1 | K 46 | 92 | 〃 | Pit 2 |
| G 37 | 45 | 白磁 (口縁) | 2 | O 46 | 53 | 白磁 (底部) | 2 |
| J 38 | 82 | 鉄刀 | 2 | O 46 | 83 | 鉄釘 | 2 |
| K 38 | 30 | 青磁 | 2 | G 47 | 39 | 青磁 | Pit 18 |
| M 39 | 49 | 白磁 (口縁) | 2 | J 47 | 93 | 鉄釘 | ㊦ミノ内 |
| G 40 | 24 | 〃 | 2 | I 49 | 76 | | Pit 36 |
| H 41 | 29 | 〃 (K42-1) | 2 | J 49 | 86 | 鉄釘 | 1 |
| O 41 | 56 | 砥石 | | K 49 | 43 | 白磁 (口縁) | 2 |
| K 42 | 6 | 至大通宝 | 3 | J 50 | 35 | 青磁 | 2 |
| L 42 | 31 | 青磁 (底部) | 1 | 上段平場 | 44 | 白磁 | |
| J 43 | 84 | 鉄釘 | 1 | 下段 | 〃 | 青磁 | |
| K43・44 | 79 | 白磁 | | 〃 | 33 | 〃 | |
| K43・44 | 80 | 〃 | | 〃 | 57 | 砥石 | |
| G 44 | 48 | 〃 (口縁) | 2 | 北斜面 | 22 | 青磁 (底部) | |
| H 44 | 78 | 〃 | | 〃 | 41 | 〃 | |
| I 44 | 34 | 青磁 | | 不明(XO) | 23 | 〃 | |
| J 44 | 47 | 白磁 | 2 | 〃 | 24 | 〃 | |
| J 44 | 2 | 元豊通宝 | 3 | 〃 | 55 | 白磁 | |
| J 44 | 3 | 或平元宝 | 3 | 〃 | 94 | 青磁 | |
| J 44 | 4 | 景德元宝 | 3 | 〃 | 74 | 鉄片 | |
| J 44 | 5 | 熙寧元宝 | 3 | 〃 | 8 | 元祐通宝 | |
| J 44 | 7 | 元豊通宝 | Pit 5 | 〃 | 9 | 不明 | |
| K 44 | 17 | 白磁 (底部) | 3 | | | | |

写 真 图 版

館跡遠景(御所館より)

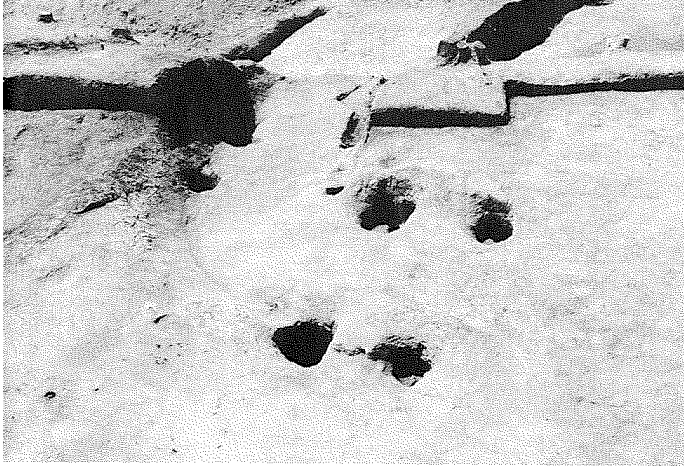


北側下段平場掘立柱群



北側下段平場掘立柱建物跡

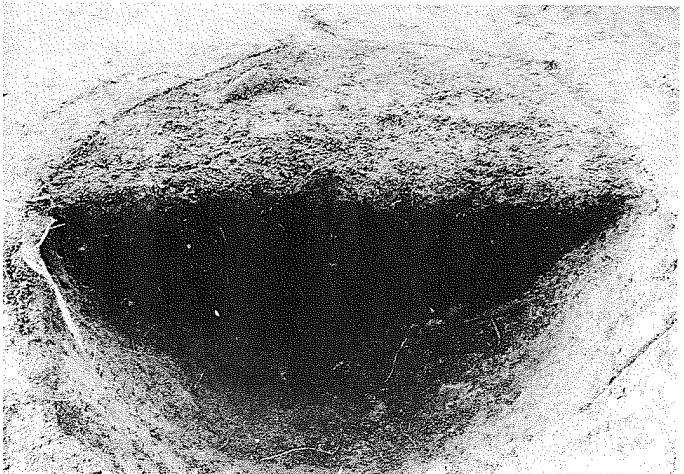




1号通路(平場側より)



1号通路(空堀側より)

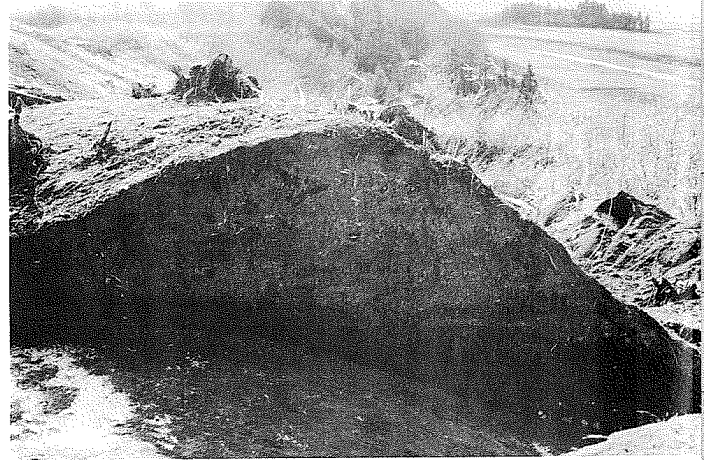


土堀1号

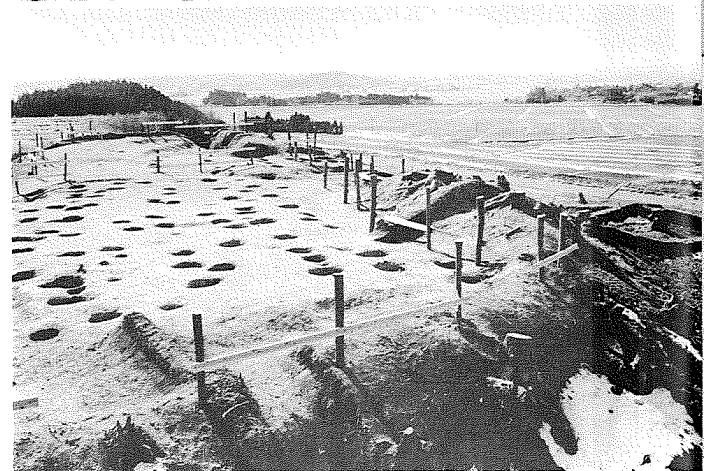
9号溝と掘立柱建物跡群



土塁断面



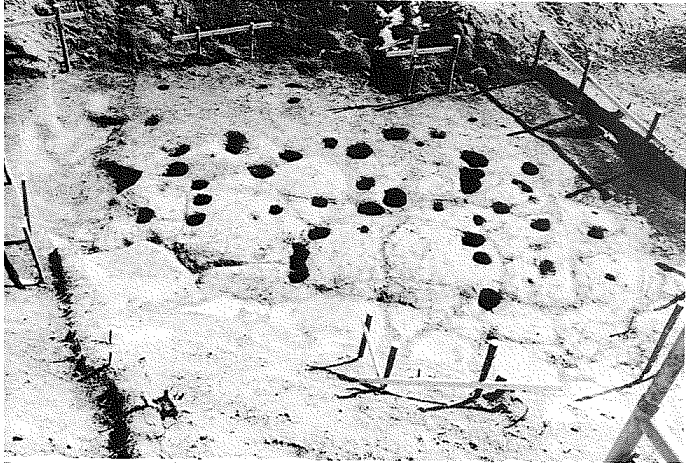
上段平場掘立柱群



図版 5



上段平場掘立柱群

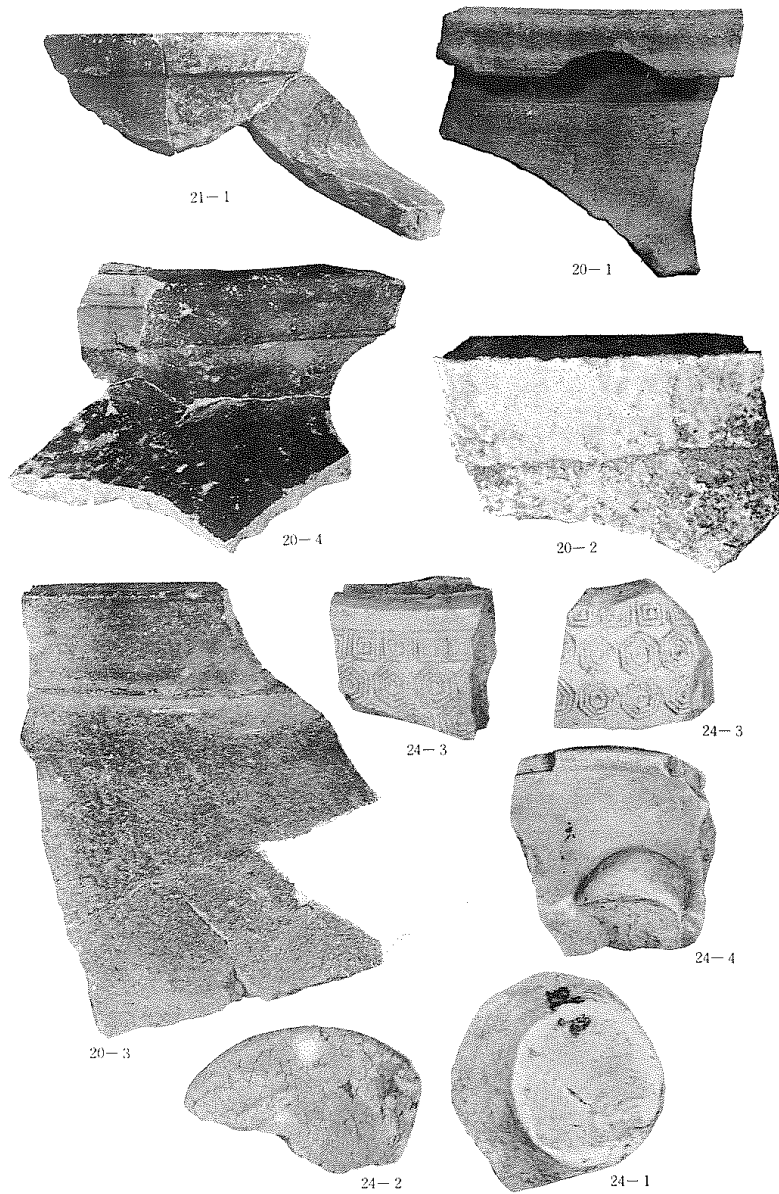


南下段平場掘立柱群

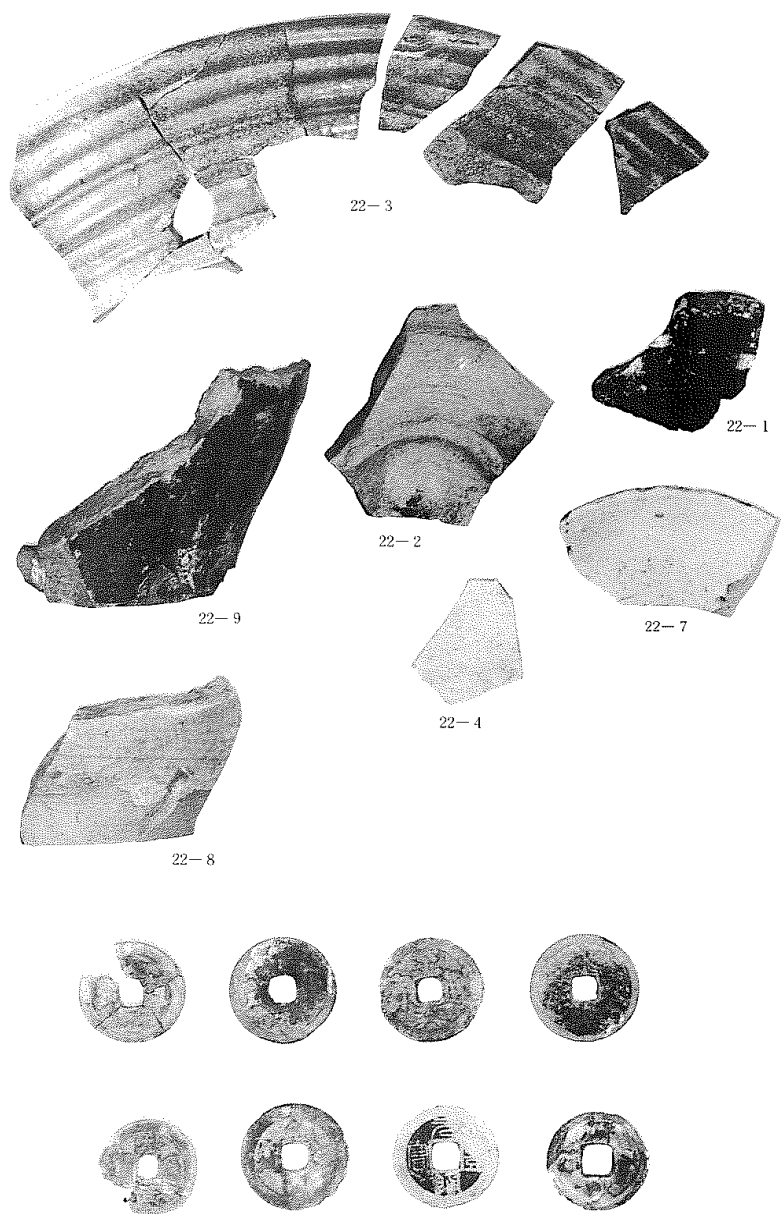


南下段平場掘立柱群

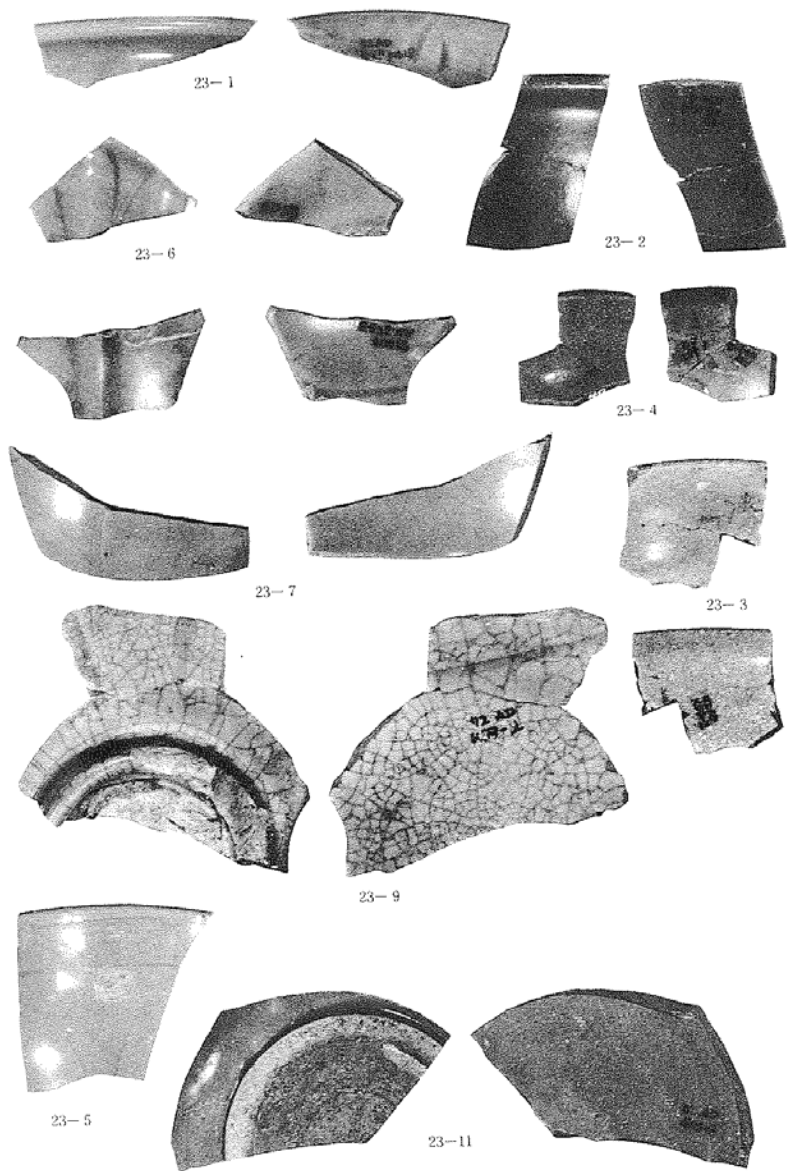
図版 6



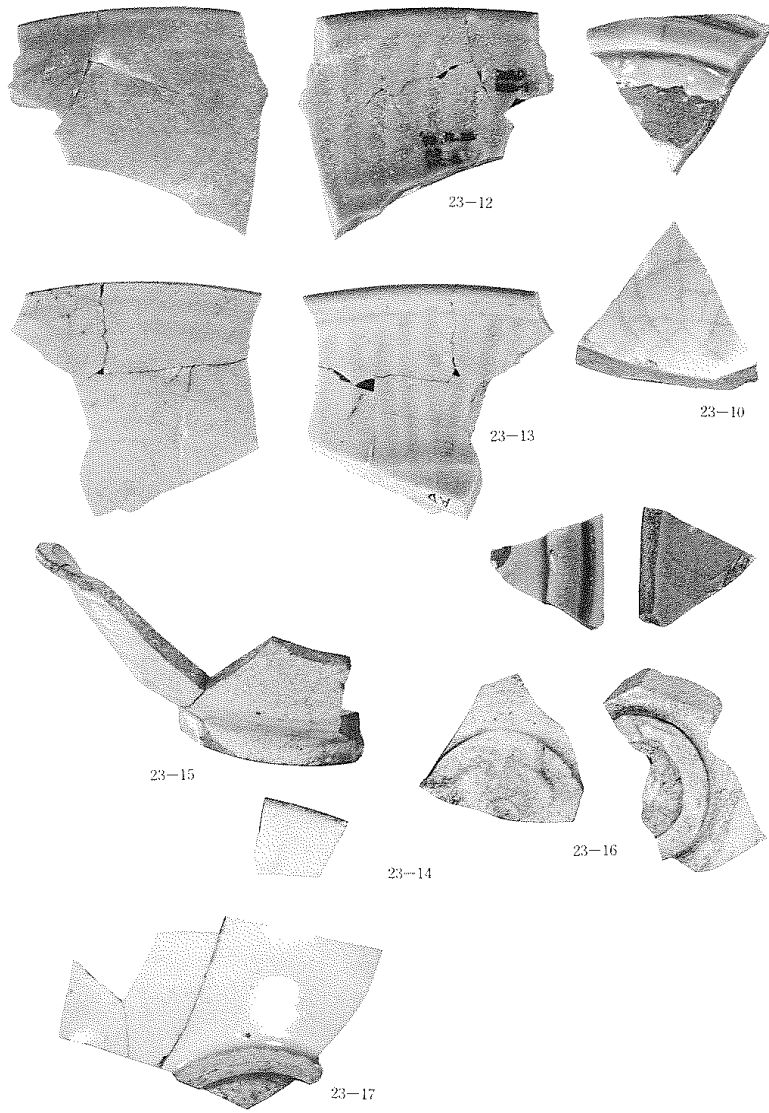
圖版7 八谷館 中世陶器・土師質土器



図版 8 八谷館 中世陶器・貨幣

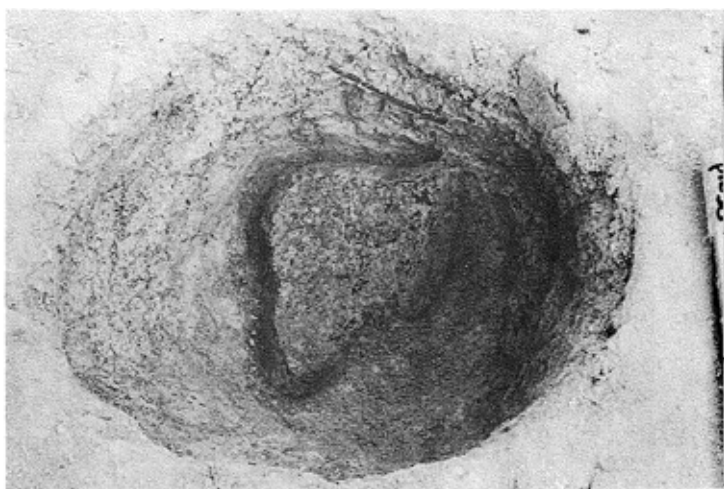


图版9 八谷館 青 磁

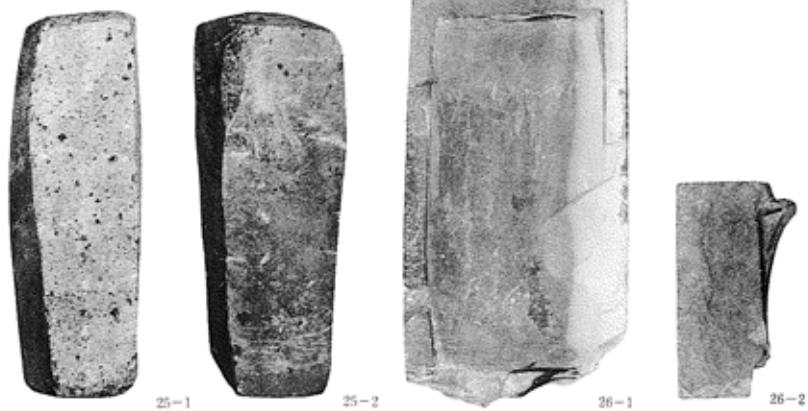


図版10 八谷館 青磁・白磁

P138 出土石鉢



すずり・砥石



古墳出土
鉄鍬
うす玉
管玉
直刀(部分)

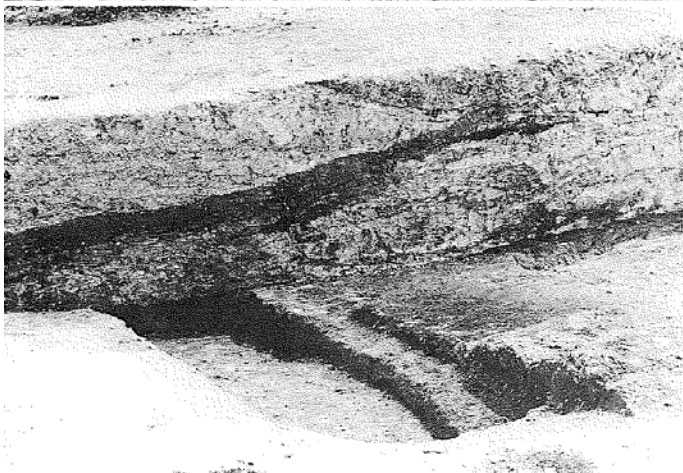




地層



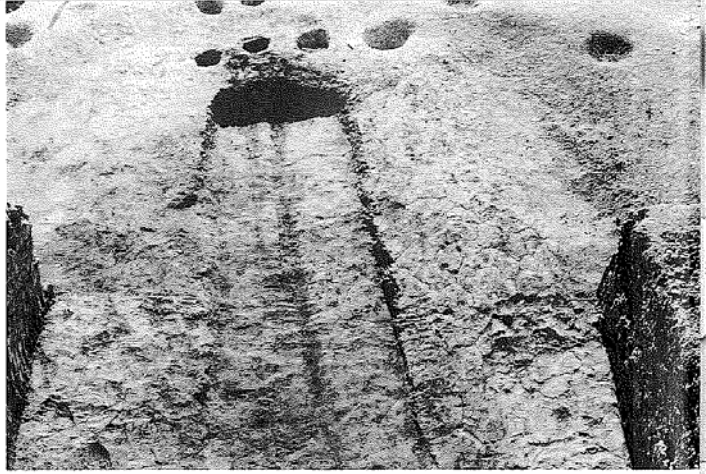
整地層断面図



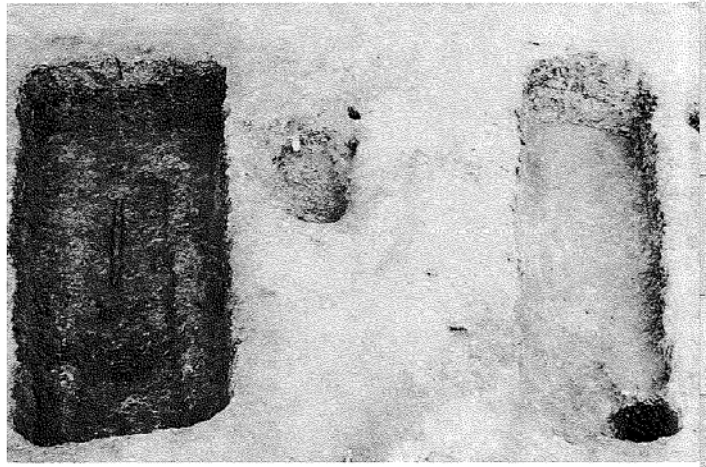
整地層と土質

図版12

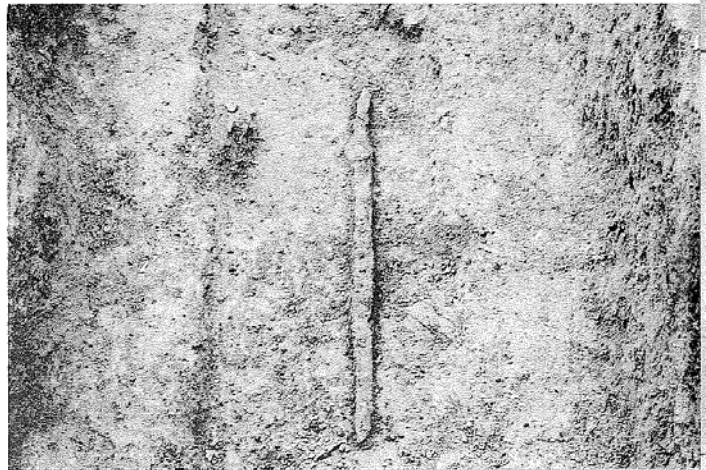
整地層下の土堀



基 壇



墓壇出土遺物



図版13